



青少年赤十字創設100周年記念 滋賀県青少年赤十字活動実践事例集



 日本赤十字社 滋賀県支部
Japanese Red Cross Society



 日本赤十字社 滋賀県支部
Japanese Red Cross Society

目次

巻頭言	日本赤十字社滋賀県支部 支部長 三日月大造	2
	滋賀県青少年赤十字指導者協議会 会長 田中滋規	3

実践事例

活動カテゴリー／赤十字理念・国際人道法の普及

守山市立守山小学校	みんなで作る「JRCひろば」	4
守山市立河西小学校	「気づき・考え・実行する」の実現に向けての取り組み	6
滋賀県立八幡高等学校	地域の中で高校生の果たす役割は何か	8
滋賀県立守山中学校・高等学校	献血、やってみよう！	10
滋賀県立高島高等学校	地域ボランティア団体を動画で紹介	12

活動カテゴリー／健康・安全

守山市立認定こども園守山幼稚園	自然を守り命の大切さを感じる取り組み	14
守山市立速野幼稚園	いっぱい歩いて体力づくり！	16
大津市立長等小学校	よりよい学校や学区を目指すOSK会議	18
近江八幡市立島小学校	自分で考え、健康な生活をつくりだそうとする子どもを育てる	20
近江八幡市立金田小学校	コロナ禍における健康・安全の取り組み	22
湖南市立菩提寺北小学校	学校を、地域を、「みんなで守る」	24
高島市立今津北小学校	健康クイズの取組	26
東近江市立愛東北小学校	児童が主体的に身の回りの環境を整えるための取組	28
長浜市立西浅井中学校	健康、安全を考える食育	30

活動カテゴリー／奉仕

守山市立立入が丘小学校	保幼小交流	32
甲賀市立大原小学校	やさしさいっぱいとはどけ隊、出動!!	34
甲賀市立佐山小学校	いのちを育む「花と健康の学校」	36
甲賀市立多羅尾小学校	ひとり暮らしの高齢者へ元気を届ける	38
高島市立青柳小学校	校内で育てている花を地域の施設にプレゼント	40
東近江市立山上小学校	山っ子ランドをしよう	42
大津市立唐崎中学校	生徒の自己肯定感の高揚を目指した生徒会活動	44
彦根市立稲枝中学校	地域の一員として	46
東近江市立永源寺中学校	ごみゼロ大作戦	48
滋賀短期大学附属高等学校	淡海エコフオスター活動	50

活動カテゴリー／国際理解・親善

甲賀市立甲南第三小学校	ミシガン大学生との焼き物を通じた交流学習	52
東近江市立市原小学校	海外の友達と国際交流をしよう	54

活動カテゴリー／防災

大津市立唐崎小学校	命を守る、唐崎の町を守る防災教育	56
草津市立老上西小学校	自ら考え実践する防災教育	58
日野町立桜谷小学校	自らが考え行動するための防災教育	60
東近江市立五個荘中学校	防災デイキャンプ	62
滋賀県立八日市南高等学校	滋賀県立八日市南高校地域支援活動部の活動	64

滋賀県青少年赤十字新型コロナウイルス対策コンテスト実施報告	66
青少年赤十字とは	73
青少年赤十字のあゆみ	74
滋賀県及び全国の加盟校数とメンバー数の推移	78
編集後記	79
編集委員	80

本事例集について

- (1)本事例集は、県内の青少年赤十字加盟校(園)の先生方からお寄せいただいた内容をそのまま抜粋せず掲載しています。ただし編集の都合上、趣旨を変えない範囲での表現の変更や形式的な字句の修正等を行っている場合があります。
- (2)本事例集に掲載した各事例は2021年度に事務局から各先生方へ執筆を依頼したため、本文の日付や時期等は執筆いただいた時点のものとなっています。また、執筆いただいた先生方の所属をはじめ、掲載内容、連絡先などは変更となっている可能性がありますので留意をお願いします。
- (3)本事例集では、各事例を「赤十字理念・国際人道法の普及」「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」「防災」の5つのカテゴリーに分類し、掲載しています。事例の中には、複数のカテゴリーに属する事例や分類しづらい事例も含まれていますが、便宜上、いずれかのカテゴリーに当てはめたくて掲載しています。



人は人の中で人となる

日本赤十字社滋賀県支部
支部長 三日月大造

青少年赤十字は、第一次世界大戦の後、もう二度とこのような争いを起こさないとの世界の多くの人々の願いにより、「将来を担う青少年が赤十字を正しく理解し、全ての国の子どもたちに対する友好的な扶助の精神を育成し、世界の平和と人類の福祉に貢献できるように、日常生活で、望ましい人格と精神を自ら作り上げる」ことを目的に誕生しました。

我が国最初の少年赤十字は、1922年(大正11年)に滋賀県の守山尋常高等小学校で結成され、その後、瞬く間に全国に広がりました。そして、今年、結成から100周年を迎えました。これまで青少年赤十字の普及や実践に携わっていただいた多くの皆様に感謝を申し上げます。

私は常々、「人は人の中で人になる」という考え方を大切にしており、人は人とつながり、ともに学び、ともに働き、ともに生きることで成長し、喜びを分かち合うことができると考えています。

しかしながら、今なお、世界では戦争や紛争が繰り返され、痛ましい事件も後を絶ちません。

こうした中、今後も、青少年赤十字の掲げる「いのちと健康を大切にする」、「社会的に弱い立場にあるひとの手助けができる力を養う」、「世界が抱える問題に関心を持つ力を養う」の3つの柱を大切に、様々な活動を行うことを通じて、次世代を担う子どもたちがこころ豊かに育つことを大いに期待しています。

このたび、100周年を記念し、県内の学校で取り組んでいただいている活動を実践事例集として取りまとめました。既に青少年赤十字活動に取り組んでいただいている学校にはさらなる活動のヒントとして、これから取り組もうとされている学校には入門書としてご活用いただき、一層の活動の広がりにつながれば幸いです。

最後になりますが、実践事例集の作成にご協力をいただいた教育関係の皆様へ感謝申し上げます。



実践事例集巻頭のこぼ

滋賀県青少年赤十字指導者協議会
会長 田中滋規

現在の学校現場は、学習指導要領の改訂により授業時間数が増加したり、ICT機器の導入により、その操作を学んだり使いこなすための時間が増えたり、さらには価値観の多様化やコロナ禍により保護者の要望が多種多様になったりと、教員の働き方改革という言葉も空しく響く状態です。

それだけに、「JRCに加盟しているけれど、特別に何もしていない」「何をすればいいのかわからない」「今やっているJRC活動で本当にいいのだろうか」という各校の先生方のお声を聞きます。そこで、長年聞かされてきたこういったお声に応えるべく、今回JRC発祥100周年を契機として、県内各校の取組をご紹介します実践事例集を作成しました。

JRCの実践目標「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」に即したテーマで、子どもたちが、JRCの態度目標である「気づき」「考え」「実行する」意識をもって活動していれば、その成果の大小に関わらず立派にJRCの精神に基づいた子どもの活動・育成ができています。そう考えれば、日ごろ行っている各校の教育活動を今一度JRCの視点で見直せば、きっと多くの学校で立派な実践がみられていると思われれます。

今回の実践事例集を発端とし、今後改訂を重ねて「JRC発祥の地滋賀県」の事例が全国に広がっていくことを願っています。

最後になりましたが、事例を提供いただいた学校や編集に携わっていただいた関係者の皆様にお礼申し上げます。

活動カテゴリー／赤十字理念・国際人道法の普及

みんなで作る「JRCひろば」

～ 100年の歴史と未来をつなぐ場所をめざして ～

守山市立守山小学校

〒524-0041 守山市勝部1丁目13-1
TEL.077-582-2424 FAX.077-582-6878

学校紹介

「私たちの守山小学校は青少年赤十字の発祥校です」——歴史ある守山銀座通りから本校を見上げると、この言葉が書かれた垂れ幕が目に入ります。入学式で赤十字マークの入ったワッペンを受け取り、全校児童1,000人を超える学び舎で6年間を過ごす中で、「気づき、考え、実行する」というJRCの精神を養います。そんな本校は2022年、青少年赤十字発祥100周年を迎えます。



活動のねらい

守山小学校JRC発祥100周年(22年)に向け、これまでの本校のJRC活動の歴史と功績をまとめ、さらに活動を発展させるために「JRCひろば」を設置し、これまでの様々な資料等の展示や、児童の成果物の掲示、学習室として活用する。また本校の児童がこのJRCひろばに気軽に立ち寄り、異学年で交流したり、さまざまな自主的活動を計画したりできるような場所を目指す。

子どもの変容

JRCひろば作りを進めるに連れて、「どうすればJRCのことを知ってもらえる場所になるか」を、自分たちで考え、JRCひろばをよりよいものにしようと試行錯誤する姿が見られるようになった。それに伴って、児童同士のコミュニケーションの量も増え、建設的なディスカッションが担当グループ内で多く生まれた。「気づき、考え、実行する」ために、自分の考えを伝える力、相手の考えを受け入れる力が伸びた。

今後の課題

JRCひろばの設置はできたが、「この場所をどう生かしていくか」が大きな課題となる。児童がJRCについて調べ学習をしたり、休み時間に自由に出入りして友だちと交流を深めたりできるような場所にしていきたいが、安全面や密を避けるために工夫が必要である。また、マンネリ化を防ぐためにさらに中身の充実を図り、過去の歴史と今、そして未来をつなぐ場所にしていきたい。

担当の先生からひとこと

活動内容

JRC委員会の児童を中心に、20年度から4階多目的室をJRCひろばとして活用するための活動を始めた。20年度は、JRCひろばの看板づくりやひろばの内容検討を行い、21年度より検討したことをもとに、主に以下の3つの視点から活動を行った。

①JRCひろば作り

毎月の委員会活動でJRCひろばづくりを進めた。「守山小学校のJRC活動のシンボルとなる部屋にするには、どんなレイアウトにすればよいか」を児童と共に話し合い、JRCの図書コーナーやトレセン体験コーナー、トルコ紹介コーナー(※)などの担当に分け、JRCに関わる具体的な展示物を作成したり、配置をしたりした。

掲示物の中には、1年生が集会活動時に発表した「JRCのうた」の歌詞や、3年生の総合的な学習で行われている「JRC博士になろう」で調べ学習をして作成した壁新聞などの学年の掲示物も配置され、それぞれの学年とJRCとのつながりも見えるレイアウトに工夫した。

※19年度に本校は、東京パラリンピック「ゴールボール」[視覚障害者柔道]トルコ代表のホストタウンである守山市の担当の方と連携し、トルコを中心とした国際理解・親善教育活動を続けている。

②集会活動を活用したJRCひろばの紹介

1学期から2学期初めにかけて進めてきたJRCひろばについて、11月18日(木)に行われた「第3回守っ子JRCのつどい」(集会活動)の中で、JRC委員



会の児童が発表を行った。

自分たちの作ったコーナーを説明する紹介動画を事前に撮影し、集会の中で全校に放送してJRCひろばの認知を高めた。動画を撮影する際には、「全校のみんなにJRCひろばをより知ってもらうには、どんな動画にすればよいか」を意識し、コーナーごとに工夫した撮影ができた。

教室で放送を見ていた1年生からは、「そんな所があるん？早く行ってみたい!」といった声も上がり、JRCひろばからJRC活動自体への関心がさらに高まっていく雰囲気を感じた。

③紹介したJRCひろばのお披露目会

完成したJRCひろばを集会活動で紹介するだけでなく、実際に活用してもらえるように「お披露目スタンプラリーイベント」を12月に行った。

密を避けるために学年を分けて休み時間に招待し、JRCの図書の紹介やJRCプッチトレセン体験などを委員会の児童がスタッフとして企画し、全校の児童にJRCひろばの認知をさらに高めることができた。

活動後には、今後のJRCひろばをどのように運営していけばよいか、児童自身が次の課題に気づく姿も見られた。



JRC発祥100周年に向け、教師と児童の願いの込められたJRCひろばを設置することができた。

この場所が、今後益々子どもたちにとって身近なものとなり、JRCひろばから発祥校としての歴史が新たに刻まれ、守山小学校のシンボルとなってほしい。



遠藤一磨 先生

「気づき・考え・実行する」の実現に向けての取り組み ～ 清掃活動、委員会活動、赤十字奉仕団との連携を通して～

守山市立河西小学校

〒524-0002 守山市小島町1843
TEL.077-582-2174 FAX.077-582-2164

学校紹介

本校は、全校生徒1,093人。JRC発祥の地として知られる守山市の中央に位置する学校です。学校教育目標は「共学愛郷」、～共に学び、郷土を愛する河西の子～の実現を目指しています。来年はJRC発祥100周年になります。児童一人一人が「気づき・考え・実行する」を意識できるよう、様々な取組をしています。



活動のねらい

- 清掃活動を通して児童が互いに助け合い、力を合わせて最後までやり抜く態度を身につける。学校や身の回りの環境を美しくする習慣をつける。
- JRC委員会を中心とした活動によって、全校児童が「気づき・考え・実行する」を意識できるようにする。
- 赤十字奉仕団の方々との連携を通して、共に活動する喜びを感じられるようにする。

子どもの変容

校内をきれいにしようと休み時間に掃除をしたり全校児童に呼びかけたりするなど、行動目標である「気づき・考え・実行する」を意識できる児童が増えてきた。2学期の後半は、5年生の学級が「ストップごみゼロプロジェクト」を計画し、全校に呼びかけて、学校の環境を美しくするためにみんなで清掃活動に取り組んでいる。

今後の課題

一部の学級やJRC委員会の児童が中心として活動していたため、全校児童が自分事として「気づき・考え・実行する」を意識できるように取組を強化する必要があると感じた。また、この活動を今年で終わらせずに継続して取り組むとともに、健康・安全、防災、国際理解・親善についての取組も取り入れ、活動の幅を広げていきたい。

活動内容

〈清掃活動〉

「だんまりそうじ」を合い言葉に毎日15分間の清掃活動（水曜日は5分間）に取り組んでいる。年度当初に各場所の掃除の仕方や役割分担を確認する。6年生は1年生に掃除の仕方を教えるために一緒に掃除をしたり、教員も児童と一緒に掃除をしたりしている。休み時間と掃除の時間とのメリハリをつけたり、真剣に掃除に向かったりすることを意識できるように、掃除に関係のない私語はせずに黙って取り組んでいる。また時間いっぱいまで清掃活動を行うため、自分が担当する掃除場所の掃除が早く終わった時には他の掃除を手伝ったり、他に掃除できそうなところがないか探して掃除したりする姿も見られた。

〈JRC委員会活動〉

1学期は全校のみんなにJRCについて伝える活動を行った。具体的には、実践目標である「健康・安全、防災、奉仕、国際理解・親善」の詳しい内容や、行動目標である「気づき・考え・実行する」を呼びかけるポスターを作って掲示したり、JRCに関する劇やクイズを作って校内放送を行ったりした。2学期は赤い羽根共同募金の活動の宣伝を行った。集まったお金がさまざまな人の役に立っていることを全校の児童に伝えることで募金活動の意味や目的を理解できるようにした。



3学期は清掃活動を中心としたVS活動を行ったり、ポスター（バリアフリーに関する内容、災害の備えに関する内容、現在の社会情勢を伝える内容）を作ったりして、さらに委員会活動を活発に行う予定である。

〈赤十字奉仕団との連携〉

1学期は、地域に住むお年寄りの方（一人で暮らしている）に渡すお赤飯につけるメッセージを児童が考え、赤十字奉仕団の方々を通して届けた。児童は、お年寄りの方のことを考えて「お元気ですか?」「健康に気をつけてお過ごしください」「これからも元気でお過ごしください」などのメッセージを書いていた。2学期は小学5年生の家庭科の学習でサポートをしていただいた。5年生の6学級全ての家庭科の時間に来てくださり、児童への支援にあたっていただいた。ミシンを使ってナップザックを作る学習で、児童はミシンの使い方を詳しく教えてもらったり、分からないことを質問したりして楽しく学ぶことができた。児童は普段関わることの少ない赤十字奉仕団の方々との交流を通して、家庭科の技術が身についただけでなく、自分たちのために教えてくださっているという感謝の気持ちを感じたり、目上の人との話し方を学んだりすることができた。



担当の先生からひとこと

清掃活動、委員会活動、赤十字奉仕団との連携から、児童が「JRC」について体験的に理解することにつながった。これからも児童が「気づき・考え・実行する」を意識しながら学校生活を送ることができるよう、児童の「こうしたい」という思いを大切にしていきたいと考えている。



中津茜音 先生

活動カテゴリー／赤十字理念・国際人道法の普及

地域の中で高校生の果たす役割は何か

～ 生徒を成長させる地域活動 ～

滋賀県立八幡高等学校

〒523-0031 近江八幡市堀上町105
TEL.0748-33-2302 FAX.0748-32-4051

学校紹介

社会福祉部は、1971年5月、新1年生の女子生徒が部活動を始める時に、近隣にできた滋賀県初の養護学校で寮生活を送る子どもたちと活動したいという強い志から創部した。以後、県内の支援学校や施設との交流を中心に、全国でも珍しい社会福祉部が継続し活動している。2005年青少年赤十字に加盟し、活動が県内の高校JRC部員、さらに近畿、全国のJRCの仲間と繋がりが拡大した。



活動のねらい

地域との活動から、高校生の時期に様々な他者と交流し、①自己の在り方生き方を考えること、②地域や社会の課題に気づき考え行動すること、③多くの人とのネットワークの中で、私たちの生活が支え合い営まれていることに気づき感謝できることを、自主的なボランティア活動から学び経験できるようにしている。

子どもの変容

地域活動をとおり、赤十字の行動目標、気づき考え行動する力が育まれる。高校生として学校生活では出会うことのない様々な人々と出会い知るといふのみでなく体験を重ねて他者との関わり方を体験し学んでいくことが重要である。多くの人と出会い、「ありがとう」「また来て下さいね」の一言で自信を持ち自己肯定感につながる。生徒からは、コミュニケーションがとれるようになった、相手の立場になって考えられるようになった、自主的に考え行動できるようになった、自分の考えが表現できるようになった、知識がなければ活動できないことがわかった、責任感、協調性の重要性がわかった、自分の生き方の目標ができた、という声がある。

今後の課題

地域活動は生徒に大きな効果をもたらしてきたが、施設活動の経験は最近の子ども達にとっては非日常的な経験であり、活動の参加に無理をし、ストレスが大きいことがある。成長する生徒がいる一方で、その緊張に不安を感じる生徒もいる。生徒へのきめ細やかな指導が必要となる。ここ数年の新型コロナウイルス感染症の影響により活動が縮小している。今改めて社会福祉部活動は新たなスタートの時だと考えている。

活動内容

①オレンジリボン（児童虐待防止）啓発

08年に市の広報誌や新聞で紹介されたことがきっかけで、県青少年子ども局や県警とのコラボ（オレンジリボン' 特派員）、オレンジリボン啓発活動に参加、毎年行われるイベントや11月「びわこ一周たすきリレー」にスタッフとして活動している。

オレンジリボンへの参加は自分の家族への振り返りとなり、また将来の子育てへの関心取り組みに繋がっている。

②地域自治体や支援施設、地域の日赤奉仕団と交流

日常活動として、保育園、認知症高齢者支援施設との交流、学校近隣地域の行事に生徒が参加し地域との連携を深める機会を得られている。

学園祭（八宝祭）では、きぬがさ福祉会の協力でクッキーの販売が恒例行事となっている。新型コロナウイルス感染症の影響により高齢者施設との交流は中止となっているため、校内活動として書道部の協力を得て年始の書を届けた。また、青少年赤十字活動として、支部の協力を得て、防災啓発を目的に救護テント展示や非常食作りなど毎年取り組みを継続している。

③手話学習と地域行事の手話通訳活動

市の行事やイベントでの手話通訳や手話コーラスによる地域参加は、障がい者交流支援の経過から活動の中心となっている。



21年11月第41回近畿高等学校総合文化祭が滋賀県で開催され、手話通訳として総合開会式に出場した。19、20年度は滋賀県の「手話言語や情報コミュニケーションに関する条例検討小委員会」の会議にオブザーバーとして参加する機会を得られた。様々な障がいのある方とコミュニケーションの方法を知り大変貴重な経験となった。

④青少年赤十字高校生連絡協議会の発足

高校生の青少年赤十字活動は加盟校の連携が少なく課題であったが、支部の事業として21年「高校生連絡協議会」を発足していただいた。各校の取り組みの紹介を中心に他校の動きを知り学べたことは大変良かった。

来年からは、各校の強みをいかした活動を県内で連携して実施していくことで、高校生の地域での役割がひろがると期待している。



担当の先生からひとこと

本校の社会福祉部は、高校の部活動としては全国でも稀な活動で、時代の流れと社会の課題の中で常に必要とされ現在に至る。青少年赤十字活動により経験の場が広がり、より多くの人たちとの交流し活性化した。高校生の時期に部活動として社会参加していく貴重な場が得られ感謝している。今年発足した「高校生連絡協議会」により、活動の様々な体験を県内の高校生が共有できることで、今後の活動の継続、発展につながると考える。

永井淳子 先生

活動カテゴリー／赤十字理念・国際人道法の普及

献血、やってみようよ！

～ 献血を通じてボランティア活動の一步を踏み出そう！～

滋賀県立守山中学校・高等学校

〒524-0022 守山市守山3-12-34
TEL.077-582-2289 FAX.077-582-6514

学校紹介

本校は滋賀県立守山高等学校として1963年4月に創設され、今年で59年目を迎えています。
また、2003年4月、県内初の県立中学校を併設し、その中学校も今年で19年目を迎えます。現在中学生が240人、高校生が817人の合計1,057人の在籍生徒数を数え、生徒たちは、校訓である「協和・進取・叡智」の精神のもと、意欲的に学習活動や部活動、そして学園祭等の学校行事に取り組み、活気あふれる学校生活を送っています。



活動のねらい

将来、献血活動をはじめ、日本赤十字社の各種ボランティア活動を支えるであろう若い世代、特に本校生徒に献血についてより深い興味・関心を持ってもらうきっかけとするため、「21年度 滋賀県献血推進ポスターコンクール」への参加を呼びかけました。

子どもの変容

先述しましたとおり、「今年度のポスターコンクールへの参加呼びかけ」そのものは、必ずしも成功とは言えなかったかもしれませんが、今回の呼びかけをきっかけとして赤十字の諸活動はもとより、ボランティア活動全般に対する、本校生徒の多くがより強い興味・関心や意識を持つようになったと考えられます。自分たちだけでなく、他者への関心を持つことは、本校生徒たちが卒業後、社会の一員として活動する際、極めて重要なことでもあります。「他者を思いやる心」は、私たちの粘り強い働きかけを通じて、徐々に子どもたちの心の中に形成されていくものです。

今後の課題

やはり、献血に参加する本校生徒を具体的にどのように増やしていくかが大きな課題の一つだと考えます。献血への若者の参加が十分ではないことは、本校生徒の多くが知識として、知っています。ただ、献血には「時間がかかる(特に成分献血)」や「注射針が痛い。」等、ネガティブなイメージもあり、彼らを具体的な行動へと促すための粘り強い取り組みだけでなく、献血セミナーへの参加を含め、具体的なアイデアが必要不可欠だと考えられます。

担当の先生からひとこと

今回、献血活動を通じて、本校生徒をはじめとする若い世代のボランティア活動について考える機会を頂戴しましたことを大変有難く感じております。「ボランティア」とは、元来「志願兵」の意味であり、各人が内なる動機から実践していくものです。「ボランティア活動への参加を促すことで生徒の成長を支援する。」大変大きな仕事ではありますが、目先の成果にとらわれず、一步一步、着実な粘り強い働きかけを心掛けたいものです。



吉野欽哉 先生

活動内容

滋賀県が主催し、日本赤十字社滋賀県支部ならびに滋賀県赤十字血液センターが協力する、「21年度 滋賀県献血推進ポスターコンクール」への積極的な参加を、7月1日(木)から9月15日(水)までの募集期間中、生徒会を中心に7月の学園祭や9月の生徒会役員選挙の際等、折りに触れて全校に呼びかけました。

残念ながら今回、本校から出品した作品は入賞することができませんでした。

しかしこの活動がきっかけとなり、生徒会執行部の生徒たちを中心に、本校の生徒たちにとって、ボランティア活動全般が、これまでにまして、身近なものと感じられてきました。

具体的にはJR守山駅前での各種募金活動や、10月に行われた滋賀県青少年赤十字高校生連絡協議会や、オンラインでの滋賀県青少年赤十字高校生連絡協議会役員会(12月)に八日市南高校、八幡工業高校、八幡高校、高島高校と共に参加し、「高校生の今、自分たちができること。」等について、真剣な議論を行いました。

オンラインでの開催でしたので、多少の不自由な点があったようですが、本役員会の議長を本校生徒会長が務め、次年度6月に予定されている次回会議での再開を約束し、充実した話し合いを終えました。



活動カテゴリー／赤十字理念・国際人道法の普及

地域ボランティア団体を動画で紹介 ～ まず自分たちが知り関わることから ～

滋賀県立高島高等学校

〒520-1621 高島市今津町今津1936
TEL.0740-22-2002 FAX.0740-22-4837

学校紹介

高島高校は地域の偉人である近江聖人中江藤樹の教えを大切に、人々の温かな結びつきを大切にする穏やかな生徒の多い校風です。これまでは地域に根差した普通科の学校として高島での教育の中核を担ってきました。学科改変を経て2021年度から新たに文理探究科を加え、伝統を受け継ぎながら次世代を担う若人の学び舎として、確かな学力と豊かな人間性を兼ね備えた人物の育成をめざしています。



活動のねらい

たかしま市民協働交流センターと協働し、地域のボランティア活動団体をインタビューすることで地域に貢献する活動をされている団体をYouTubeを通じて周知することでその活動を支援することを目的としました。また、高島高校JRC自体も上記の団体に加え活動を紹介する動画を作成し、広く赤十字の活動の意義や近年の高島高校JRCの活動内容を広報し、今後の活動の領域を拡大するため協働できる団体などへの呼びかけも目的としています。

子どもの変容

インタビューを通して、地域で様々な活動を信念をもって地道に続けておられる方々に出会えたことは高校生にとって大きな刺激となりました。他団体の立ち上げ段階からの苦労話を聞き、自分たちが比較的簡単で成果のわかりやすい活動ばかりをしていたということに気づいた生徒もいました。改めて自分たちの活動を振り返る機会となり、深く考えずに活動していたことやこれからの活動の意義について考えを深める契機となりました。

今後の課題

活動を通して地域で貢献されている大人の方々の熱意を感じ、高校生なりの視点から地域の問題に目を向ける機会を持てたことは非常に有意義でした。見せていただいた活動の中には高校生でも関われそうな内容のものもありました。今後はこれまではできていなかった活動領域にも関わりを増やしなが、学んだことや感じたことを自分たちの活動の中にどのように活かし発展させていくかを考えることが課題であると思います。

活動内容

本校JRC部の活動は70年以上にわたり、地域に根差した活動を実践してきています。

これまでは福祉施設、保育施設や学校でのボランティア活動が主な活動場所で地域の他のボランティア団体がどのような活動をしているのかを知る機会はありませんでした。20年度は新型コロナウイルスの影響が大きく、施設でのボランティア活動ができない中で、何ができるのかを生徒たちが考えなければならぬ年でした。

今回の活動では、たかしま市民協働交流センターと協働して他団体にインタビューをする機会を得ることができました。本校JRC部がインタビューを実施した団体は、「フードバンクびわ湖たかしま」、「NPO法人 子育て・子育てサポートきらきらクラブ」と「NPO法人 絵本による街づくりの会」（添付写真の団体）でした。インタビューの当初の目的は地域のボランティア団体を支援するための動画作成というものでしたが、高校生にとっては福祉施設や学校以外で、それぞれの強みを生かしたボランティア活動をされている大人と話ができる貴重な経験となりました。

インタビュー時の撮影は今津東コミュニティセンターの職員の方が担当し、インタビューの部分を高島高校JRCメンバーが担当しました。慣れないインタビューでは、うまく質問ができなかったり知識が無いためなかなか本題に入れないような場面もあつたりしましたが、真剣にお話をしてくださるボランティアの方々の熱意をじかに感じることができていました。



また、録画した内容を編集する作業にも関わらせていただき、動画(You Tube)に上げて閲覧可能な状態になるまでの一連の流れも経験することができました。

たかしま市民協働交流センターのホームページ上でインタビューした団体の紹介動画が閲覧可能な状態になっています。

<http://tkkc.takashima-shiga.jp/movie.html>

また、自分たち自身のJRC部も活動を紹介するインタビュー動画を作成しました。自分たちの活動を紹介しようとする中で必然的に、「私たちの活動って何なのだろう?」という疑問が高校生の中から生まれ、それぞれが自分にとってのJRC活動を見つめなおし高島高校のJRC部として何を目的としていくべきなのかを話し合う機会にもなりました。

この活動はたかしま市民協働交流センターの助力があってこそ成立したものであり、高校生の独力では到底できなかったものです。しかし、だからこそ地域や社会に貢献したいという思いを持つ人たちがお互いの活動を知り協働することで、様々な観点から社会を良くしていこうという刺激をお互いが与えあえるものであるということを学べた活動となりました。



担当の先生からひとこと

活動紹介動画を作るにあたり、もう一度高校生の部活動としての意義を振り返りJRCで何を目的として活動していくべきなのかを各々が再考する良い機会となりました。他団体へのインタビューを通して新しいつながりが生まれ、高校生が将来を通してボランティア活動を続けるとはどういうことなのかを学べたと思います。熱心にお話して下さるボランティアの大人の方とその話を一生懸命に聞く高校生の姿が印象的でした。



中野翔氏 先生

自然を守り命の大切さを感じる取り組み ～ もぴかdeウォークの親子美化活動やほたるの飼育の実践 ～

守山市立認定こども園守山幼稚園

〒524-0041 守山市勝部1丁目13-1
TEL.077-582-2165 FAX.077-582-4920

学校紹介

JR守山駅の近くの繁華街に位置し、園舎は幼小合築の施設である。福祉施設や親水公園などの複合施設が隣接し、高層マンションや新興住宅が立ち並び、県外や市外から転居者が増加している。核家族がほとんどで、子育て不安を抱えている保護者が多い。また、園周辺には歴史に名高い中山道・守山宿の面影を残した町並みや伝統ある寺社などの歴史的遺産も数多く、伝統行事も引き継がれている。地域はほたる保護環境地域に指定され、町をあげての取り組みが盛んである。



活動のねらい

自然や人とかかわる直接体験を通して、生命や自然環境への関心をもち、家族・友達・地域を大切にしたいという思いにつながるきっかけとする。

子どもの変容

〈もぴかdeウォーク〉では、家族の中でもごみの分別意識につながり、家族で分別の確認をしたり、地域の方の目に触れ、「ゴミ拾いありがとう」の声掛けをいただいたりして、地域への愛着や環境教育につながっている。

〈ほたるの幼虫の飼育〉は、ほたるの飼育を通してほたるに親しみを持つようになり、ほたるの生息や川の様子にも目を向けるようになった。自分の住む地域の川が、きれいな川であるようお願い、地域の自然環境に興味や関心が広がった。

今後の課題

〈もぴかdeウォーク〉高層マンションの増加や都市化が進み、交通量が増えてきて、森、田畑などの自然環境が減少してきている。交通安全に注意する必要性も高まり、これからも安全に留意しながらごみ拾いをする必要がある。また、2021年度から認定こども園となり、保護者の仕事で早くから登園する子どもや学区外で遠くから登園する子どももいるため、親子で取り組むためには今後どのような方法で継続していくのか、検討する必要がある。

活動内容

〈もぴかdeウォーク〉

1学期から5歳児、2学期からは4歳児が毎月初めの1週間、親子でごみ拾いをして登園する取り組みを行っている。

登園時には交通安全に留意して、空き缶や菓子袋、燃えないゴミなど親子で見つけ活動をした。今年度も、子どもたちは活動中に地域の方から声をかけていただき、住んでいる地域を身近に感じて、住む地域をきれいにしたいという気持ちにもつながった。

また、拾ったごみは親子で分別するので、分別する意識をもち取り組むことができた。

〈ほたるの幼虫の飼育〉

毎年、「ほたるの森資料館」の方から幼虫をいただき、4歳児が中心となり世話をしている。今年もほたるの生態や世話については「ほたるの森資料館」の方からお話をお聞きし、命の不思議さやきれいな川で育つことを学び、命や環境に対して関心を持つきっかけになった。

〈幼虫の放流〉

3月には4歳児60人が、地域を流れる守善寺前の川とあまが池親水公園の川に、ほたるの終齢幼虫を放流した。コップに入った幼虫に「大きくなって飛んでね」「また会おうね」などと声をかけながら親しみを込めた言葉が聞かれた。

〈ほたるマップ〉

ほたるが飛び交う初夏は、夕方から園近くの川に出かけて、ほたるの光を楽しむ家族がいる。毎年、見つけたほたるがどこにいたのか「ほたるマップ」にシールを貼っている。

この活動を通して、命の大切さや地域とのつながり、環境への意識などいろいろなことを感じて、気づき、考え、行動することにつながっている。



担当の先生からひとこと

〈もぴかdeウォーク〉〈ほたるの幼虫の飼育〉は、「川をきれいにしよう」「ごみのない町にしよう」という声が子どもから聞こえた。

自然や人とかかわる直接体験を通して、生命や自然環境への関心が高まり、自分の住む地域への親しみにつながっている。引き続き、活動の内容を園の状況に合わせて継続して取り組んでいきたい。

澁江阿津子 先生

いっぱい歩いて体力づくり！

～「レッツウォーク」「歩いて帰る日」の取り組みから～

守山市立速野幼稚園

〒524-0102 守山市水俣町2399-1
TEL.077-585-1175 FAX.077-585-0442

学校紹介

本園は、全園児66人、3～5歳児とも単級の小規模幼稚園です。すぐ近くに「びわこ地球市民の森」があり、年間を通して出かけ、四季折々の自然に触れて活動をしています。

また、市内で唯一琵琶湖畔に面している学区でもあります。学区の範囲がとても広く、殆どの園児が自転車か自家用車で登園していることから、琵琶湖畔まで徒歩で出かけるなど、「歩く」ことを意識した教育活動を行っています。



活動のねらい

歩いて登降園する期間や日を年間計画に位置付け、交通ルールの確認や「歩く」ことの意義などを保護者にも伝え、季節の移り変わりを親子で感じながら安全に歩けるよう啓発する。

また、希望者には万歩計の貸し出しを行い、より歩くことへの意欲を引き出す。

子どもの変容

毎月実施することで、特に交通ルールについては、学年が上がるごとに身に付いていく様子がよく分かる。歩く力についても、5歳児の琵琶湖畔への徒歩遠足の様子から、経験を重ねるごとに力強くなっていることがうかがえ、継続することの大切さを実感する。

また、万歩計を借りた園児が、翌日「〇〇歩も歩いた！」と自信に満ちた表情で報告してくれる姿も見られ、有意義な活動であることを感じる。

今後の課題

就労されている保護者が多く、全員参加での『歩いて帰る日』の実施が難しい。行事の日に合わせるなど、多くの親子が参加できるような工夫が必要である。

また、保護者に「歩く」ことの大切さを認識してもらえるよう、「体づくり」の基本は「歩くこと」であること、そして体幹を鍛えることが日々の生活や遊び、更には就学後の学習への意欲や集中力につながることを繰り返し伝え、啓発していくようにする。

活動内容

〈レッツウォーク〉

毎月のうち1週間を『レッツウォーク』と称して、歩いて登降園する期間を設け、できるだけ徒歩での通園を呼びかける。

〈歩いて帰る(来る)日〉

『レッツウォーク』期間中の1日を『歩いて帰る日』(暑い時期は『歩いて来る日』)として、登降園指導を実施する。

▶交通ルールの確認

- 道路横断時には「右・左・右、はい！」の掛け声とともに左右確認をする。自分自身の目で遠くまでしっかり見て安全確認することを意識づける。
- 親子で行い、保護者からも声掛けをしてもらうよう啓発する。
- 通園路の数か所に職員が立ち、交通ルールを守って歩いているか等の確認や声掛けをする。

▶担当者による啓発

- 体幹を鍛えることが姿勢保持や話を集中して聞く力につながることで、特に5歳児は就学後の学習への意欲につながることで、そして体幹を鍛えるには「歩く」ことが大切であることなどを伝え、活動の目的の理解を促す。



- 時期によって、園児が自分の荷物を自分で持って歩くこと、季節の移り変わりを感じながら歩くこと、通園路の危険箇所を親子で確認することなど、目的をもって取り組めるようにし、保護者にも意識してもらえるようにする。

▶万歩計の貸し出し

- 年間を通して万歩計の貸し出しを行い、園児自身も自分の歩いた歩数を確認しながら歩くことで、「もっとたくさん歩きたい」と楽しんで歩く気持ちを育てる。
- 貸し出しとともに感想を記入してもらい、それを定期的にまとめて知らせることで、更なる啓発となるようにする。

〈地域への園外保育〉

- 「びわこ地球市民の森」に年間を通して出かけ、自然に触れて遊んだり、思い切り体を動かして遊んだりする。
- 5歳児は春～初夏頃に琵琶湖畔まで片道を歩き(復路はバスを利用)、湖岸の清掃や散策など、琵琶湖環境学習活動を行う。また、秋には琵琶湖付近の公園まで往復を歩き、秋の自然に触れて遊ぶ。(どちらとも片道80～90分の道のり)
- 地域の社寺や公園、畑などへそれぞれの活動のねらいのもと、歩いて出かける機会を計画的にもつ。



担当の先生からひとこと

『レッツウォーク』の日には、徒歩で迎えに来られる保護者も少しずつ増え、活動への理解が深まっていることが感じられ嬉しく思っています。

また、職員自身も「歩くこと」の大切さを共通理解したうえで、保育を充実していけるよう今後も努めていきたいと思えます。

長野美絵 先生

よりよい学校や学区を目指すOSK会議 ～ 他校との連携を通し、よりよい社会参画の意識を育む児童会活動 ～

大津市立長等小学校

〒520-0033 大津市大門堂5-1
TEL.077-522-6669 FAX.077-522-1543

学校紹介

本校は、大津市中心部に位置し、商業施設等が立ち並び賑やかな街並みや、交通の要所であった浜大津、三井寺など歴史ある街並みが広がる校区にあり、来年度創立150年を迎える児童数607人の学校である。

特別活動が強みで、学級会を中心に話し合い活動を積極的に行っている。小中連携も盛んで中学校区の生徒会・児童会が集まり、よりよい学区にしていくためにOSK会議（皇子山中学校区小中学生子ども会議）を実施している。



活動のねらい

長等小学校がある皇子山中学校区内の小学校4校と中学校の子どもたちが連携を図り、より良い学校や学区づくりのための自主的・実践的な態度を育てる。

目標に向かい取り組む中で、皇子山中学校区の子どもの人間関係を形成していく。他校の実践を知り、自校の生徒会や児童会の活動の活性化を図る。

子どもの変容

皇子山中学校区では、OSK会議だけでなく、教師間の学級活動の研修も実施して、学級会や話し合い活動の向上に努めている。そのため、年々、子どもたちの話し合いの質の向上が見られる。「会議で発言して、自分の言動に責任を持つようになった。」「他の小中学校の人と意見を交え、広い視野を持つ事ができた。」という意見もあり、社会参画への意識も高まり、より良い学校・学区にしていくと自主的に取り組む姿が見られる。

今後の課題

OSK会議の取り組みは、参加した児童生徒にとって大きな力となっている。しかし、それを受けて取り組む他の児童生徒の活動については、見えにくい部分もある。自分たちの頑張りや「学区をよくしている」という気持ちにつなげられ、より主体的に様々な活動に取り組もうとする意欲につながるような工夫をしていきたい。また、新型コロナウイルス感染症による制限がどうしても出てくる場面があるので、さらなる工夫が必要である。

活動内容

一昨年までは学期に1回、皇子山中学校に集まって、話し合いを行っていた。期間を設けて取り組むことや1年を通して取り組むこと、他校と協力できることなど、子どもたちの話し合いを通して決定していた。

取り組みの例としては、いじめ防止に向けた人権的な取り組みや福祉活動、あいさつ運動といった生活習慣の取り組み、学習面の取り組みなどが挙げられる。過去の会議で提言した『OSKが目指す姿（目指す子ども像）』（あ…当たり前を当たり前、い…いろいろなことに挑戦、う…運動に力を入れる、え…笑顔であいさつ、お…思いやりを大切に）は、今もOSK会議の憲章的な役割を担っている。

昨年度からは、新型コロナウイルス感染症の影響で、リモート会議という形式で各学校の取り組みを共有している。昨年度から取り組んでいるのは、「元気な皇子山中学校区にしよう！」プロジェクトで、新型コロナウイルスの感染防止対策で、どの学校の児童や生徒も大きく活動が制限されている中で、後ろ向きな気持ちにならず、前向きに考えて、より良い学校にしていく取り組みを各学校で行うものである。

今年度は1学期（6月30日）に各学校の参加児童の自己紹介を行い、2学期（12月7日）に各学校の取り組みを報告し合った。本校では、以下の取り組みを報告した。

○黄緑リボン活動

自分や他者の人権を大切にしようという目的で、JRC委員会が黄緑リボンの絵を描いたものをラミネートして全校児童一人ひとりに配付した。

一人一人が自分を大切にするためにできることや相手を大切にするためにしたいことを考えて自分のリボンに書き込み、名札等につけて生活することで、人権に対する意識を高めた。

○なかよしそうじプロジェクト

黙って集中して行うもくもく掃除を全校で広げたいという企画委員の児童が提案した、1週間×2回に渡る取り組み。

5・6年生の各クラスでそうじプロジェクトチームを4～5人結成し、そのグループが月曜日にたてわりの下学年にそうじを教えに行った。火～金曜日はリモートで各クラスの教室掃除の様子を撮りながら、お互いの姿が見られるようにして掃除を行った。見られているという緊張感を持ったり、他の学年も頑張っている姿を見て自分たちも頑張ろうという思いを持ったりすることができ、もくもく掃除を意識して掃除ができるようになった。

3学期は、今年度の振り返りを行い、中学校区で次年度に統一して取り組んでいくことを、リモート会議で話し合っただけだったが、新型コロナウイルス感染症により、準備等が行えなくなり、やむを得ず開催を断念した。



担当の先生からひとこと

OSK会議を重ねる中で、子どもたちの自主的・実践的な態度で委員会活動や学校生活を営む姿が多く見られるようになった。

また、同じ校区の子どもたちが一つの目標に向かって取り組むことで、中学校での人間関係にも良い影響を与えていると聞いている。今後もOSK会議に取り組む子どもたちの支援を継続していきたい。



市川裕祐 先生

自分で考え、健康な生活をつくりだそうとする子どもを育てる ～ メディアに接する時間と就寝時刻に関する取組を中心に ～

近江八幡市立島小学校

〒523-0804 近江八幡市島町1603番地
TEL.0748-32-3510 FAX.0748-32-3843

学校紹介

本校は、全校児童113人、前には西の湖の水郷が広がり、後ろは姨崎耶山系に囲まれた豊かな自然の中にある小規模校です。この恵まれた環境を生かし、ふるさと学習やエディブルスクールヤードの実践を通じて、環境や健康を考える取組を行っています。コロナ禍の中、自分で考え、自らの健康を守る学習の一環として生活習慣を見直す取組を行いました。



活動のねらい

自分の心身に関心を持ち、生活習慣を見直して健康的な生活が送れるように意識向上と行動変容を図る。

子どもの変容

取組を通して多くの児童にとって自らの生活習慣を見直すきっかけとなった。個別指導では、限られた時間の中で生活習慣の課題を話し合い、どうしたら改善できるかを共に考えることができた。特に高学年児童は「携帯電話を使うのは21時半までにして、お母さんに預ける」「22時からのドラマを見ていたら寝るのが23時を過ぎるから、録画して別の時間に見るようにする」というように自分ができる改善策を考えることができた。

今後の課題

指導の直後は、多くの児童が睡眠の大切さ等を理解し生活を改善しようと意識したようだったが、時間と共にその意識が弱まっていった。

子どもたちには、さらに「継続する力」が必要だと考える。

睡眠の大切さについて定期的に継続して発信していくことでその時限りではない行動変容につなげたいと考える。

活動内容

1.生活調査と通信による指導、啓発

調査期間：2021年6月14日(月)～6月18日(金)
内 容：1週間の生活調べ(起床時刻、朝ごはん摂取の有無、ハンカチ携帯の有無、毎食後の歯みがき実施の有無、テレビ・動画視聴時間、ゲーム時間、就寝時刻の7項目)

生活調査の実施後、調査用紙に全校児童一人ずつコメントを記入して返却した。

また、結果を集計、分析し、健康課題(テレビ・動画の視聴時間の長さ、ゲームの実施時間の長さ、就寝時刻の遅さ)を明らかにして、課題解決に向けた通信を作成し、保護者に啓発した。

2.保健指導(集団指導・個別指導)の実施

睡眠の大切さについて2学期と3学期の身体測定の際にクラスごとに10分弱の保健指導を実施した。

2学期実施日：8月31日(火)、9月2日(木)

「ぐっすり すいみんで
げんきな からだ」

3学期実施日：1月11日(火)、1月13日(木)

「ぐっすり すいみんで
げんきな からだPart2」

生活調査の結果から、必要性の高いと思われる児童に対して個別の指導を行った。

中休みまたは昼休みに1人10分程度、生活調査用紙を見ながら指導した。

対 象：19人

実施期間：21年10月～11月

3.「ちょこっとメディアデー」の実施

冬休み前に学級での指導を行い、休み中に「ちょこっとメディアデー」としてメディア(テレビ、ゲーム、タブレット、スマホで動画を見る等の電子機器・電子端末の画面を見ること)に接する時間を自分でコントロールする日を設けた。

視聴時間を1時間までとする日を各自が自由に2日間設定して取り組んだ。

4.児童保健環境委員会による昼の校内放送

給食の時間を活用して保健環境委員の児童が、時期に応じた内容の健康に関する啓発放送を行っている。(6月むし歯予防、7月熱中症予防、12月風邪予防など)

また、早寝早起き、メディアについての内容についても継続的に意識できるように啓発している。



担当の先生からひとこと

生活習慣について集団指導、個別指導を行うことは児童の意識向上や行動変容など一定の成果がありました。

しかし、意識や行動の変容を定着させるためには、学校教育活動全体を通じ、あらゆる機会を活用して学校保健活動を推進していくことが必要だと思います。



森中佳奈子 先生

コロナ禍における健康・安全の取り組み

～ 正しく学び、差別をなくそう！～

近江八幡市立金田小学校

〒523-0001 近江八幡市金剛寺町276番地
TEL.0748-37-7575 FAX.0748-37-1191

学校紹介

本校は全校児童901人、近江八幡市内で一番の大規模校です。

近江八幡市の中央平野部に位置し、古くから千町田と称され農村地域として発展してきました。

1975年ごろから宅地の開発が進み、現在ではJR近江八幡駅を中心に商店街、新興住宅地、農村地域が混住しています。



活動のねらい

新型コロナウイルスの感染拡大が続く中、これまで当たり前のように活動していたことができなくなり、児童だけでなく保護者や地域も不安を抱えながら日々の生活を送っています。情報化社会の現在、間違っただけのうわさや風潮が流れることもしばしばです。そこで、次の2点をねらいとし活動を行いました。

- 正しい情報を取捨選択できるように学習の場を設ける。
- 自分たちにできることを考え、学んだことを発信する。

子どもの変容

学習を通して、自分たちの学校生活や家庭生活の中でも基本的な感染症対策がしっかりとできるようになってきた。

また、医療従事者への差別について考えたことで、努力している人たちへ感謝の気持ちを持つことの大切さを考えることができた。何より、自分の作成したポスターが掲示されることに対して自信が持てるようになったように思われる。

今後の課題

コロナ禍における社会生活は簡単に収束するとは考えにくく今後まだまだ続くかもしれない。

そんな中児童にとってはこの学習で終わることなく、今後も引き続き学習の繰り返しが必要になると考えられる。

活動内容

はじめに

新型コロナウイルスの感染症がなかなか収まらない中、新聞やニュースからコロナに感染した人たちが感染していなくても濃厚接触になった人たちへの差別や排除、医療に従事する人たちへの偏見といった報道を子どもたちは毎日のように見聞きしている。動画「ウイルスの次にやってくるもの」(日本赤十字社出典)にもあるように不安や恐怖が新たな差別や偏見を生むことから子どもたちに正しく伝えることが大切だと考えた。そこで、次のように学習を行った。

① コロナの感染症対策についての学習

- 6年生全学級で学習の場を設ける。
- 新型コロナウイルスについてみんなが知っていることを出し合う。
- まだまだ分からないことが多いが「手を洗う」「マスクをする」「人混みを避ける」「換気する」「間近で会話や発声をしない」ことで感染しにくくなるなどわかってきたことを確認する。
- このウイルスには3つの感染症という顔があると示しているの、それがどういうものか、みんなで理解を進める。
- このウイルスには3つの感染症という顔があると示されているので、それがどういうものか、資料に沿ってみんなで確認する。
- 第1の“感染症、は 病気そのもの。
- 第2の“感染症、は 不安と恐れ。
- 第3の“感染症、は 嫌悪・偏見・差別です。
- なぜ、嫌悪・偏見・差別 が生まれるのか3つの感染症はどうつながっているのかについて資料に沿って話し合い、3つの感染症を防ぐために大切なことは何か考える。
- 3つの連鎖を断ち切るために、私たちにできることを考えよう。

(出展：日本赤十字社新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう！
～負のスパイラルを断ち切るために～より)



② 啓発ポスター掲示

- 学習した6年生が一人1枚啓発ポスターを作成する。
 - 作成したポスターを校内に掲示。他の学年にも学習した情報を発信する。
 - 学区内の大型商業施設や各自治会へ依頼し、施設及び自治会館等で掲示してもらう。
 - 自分たちの活動について振り返る。
- 学習を通してまだまだ社会には誤った情報がたくさんあることに気づくとともに、児童だけでなく、教職員や保護者への意識付けと、正しい学びの必要性について感じさせる。また、「病気」「不安」「差別」の負のスパイラルでさらなる感染症の拡散につながることを考え、「気づく力」「聴く力」「自分をさせる力」を高めることの大切さについて学ばせる。そして、自分たちに一人一人何ができるのかを考えさせることにより、児童にコロナ禍の中、生きる勇気と自信を持たせる。

おわりに

今回の活動を通して、子どもたちは地域とのつながりを感じ、自分たちも地域に役立つことを改めて感じることができた。商業施設やコミュニティーセンターに啓発作品を掲示していただいたことで、子どもたちの自信にもつながった。日本赤十字社の資料は子どもたちにとって大変分かりやすかった。コロナ禍の中だからこそこれからも心の健康と安全に留意した取り組みを実践していきたい。



担当の先生からひとこと

新型コロナウイルスの3つの顔を知ることは、子どもたちにとって対策及び差別について考える上で大変貴重な学習になりました。

今後も資料を有効に活用しながら学習を進めていきたいと思ひます。

林崎謙造 先生

学校を、地域を、「みんなで守る」

～ 高学年が中心となり、環境や安全について考える手立て～

湖南省立菩提寺北小学校

〒520-3242 湖南省立菩提寺328
TEL.0748-74-3881 FAX.0748-74-3883

学校紹介

本校は、全校児童288人。近くには豊かな川が流れ、開校当時から「広野物語」と呼ばれる地域の歴史を綴った歌唱組曲が伝わる、特色ある学校です。

コロナ禍により異学年交流の機会や行事などの様々な活動が制限される中、全校が一体となって取り組める活動を日々模索しながら、学年間の交流を絶やさないう、活動を続けています。



活動のねらい

子どもたちが自分の身の周りのことに課題意識をもち、学級や学校の仲間と協力して安全に過ごそうとする気持ちを高める。

特に、委員会活動やたてわり活動などの特別活動の中で行うことで、上学年から下学年に意識を広げられるようにする。また、地域の美化や環境に対する関心を高め、奉仕の精神と思いやりの心を育てる。

子どもの変容

総合的な学習の時間に地域の川などについて学習をしていることもあり、地域の美化への意識は高い。クリーン活動後も、登校時にごみを拾って持ってくる児童がいたり、ごみが生態系や環境に影響を与えるため「またみんなでごみ拾いをした方がいい」「〇年生だけで行こう」などの声を聞いたりすることもあった。また、クリーン活動・委員会活動ともに、高学年児童の環境や安全に対する意識の高まりが見られたのが最も大きな変容であった。全校のために自分たちが責任をもって役割を果たすことの大切さを実感しながら、一つひとつの活動に取り組むことができた。

今後の課題

全校としての取組は年に1回であるため、意識を継続させることが難しい。

他教科の学習と絡めて環境について考えたり、日々の掃除など校内の活動にも生かして美化活動についての意識をより高めたりする必要がある。

企画委員会のあいさつ運動のような各委員会で発信していくような活動についても、一過性にならず、継続的に取り組めるとよいのではと感じている。

活動内容

〈クリーン活動〉

6月23日(水)5校時、通学班ごとに分かれて通学路及び地区周辺の美化活動を行う。

環境を守る取組の一環として行うため、事前学習では7月1日の「びわこの日」について学習し、クリーン活動の意義や方法について各学級で考える。通学班単位での活動となるため、上学年の学級では班全体の様子を見ながら活動することや、下学年の手本となるような姿を見せることも意識し、学校の中心として意欲的に活動しようとする様子が見られた。

また、通学班の班長を集めての説明会を行い、予め注意点を確認できるようにした。班長は「クリーン活動計画書」を作成し、時間配分や活動場所を調整することで見通しをもって活動できた。

当日は、通学班で集まって下校前に活動の流れや諸注意などを確認し、その後通常通り下校する。下校後、すぐに自宅に荷物を置いて再度集合場所に集まり、地域の公園や自治会館の周辺、通学路の住宅街など、自分たちの住む地区のごみ拾いを重点的に行う。その際、4年生以上はごみ袋と軍手、火ばさみなどを持参し、ごみを分別しながら手分けして活動した。

30分ほどの活動時間であったが、建物の裏や遊具の下など、死角になりやすいところも隅々まで見て時間いっぱい活動する児童が多く、最後まで全校児童が力を合わせて取り組むことができた。

さらに、下校までに見つけたごみを積極的に拾って集めたり、同じ班の友だちと声をかけ合って分別したりと、意欲的に活動する姿も多く見られた。



〈委員会活動〉

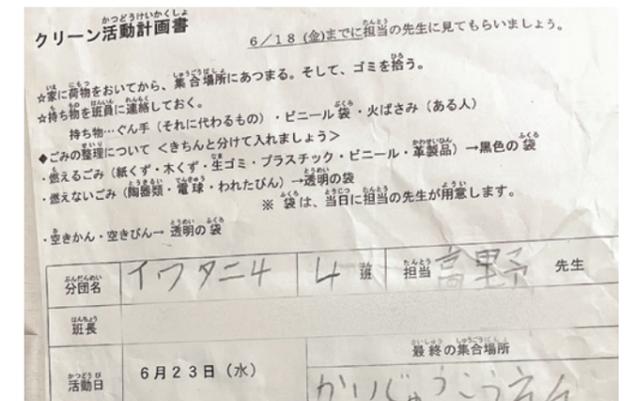
月に1回の委員会活動で、いくつかの委員会が「学校のみなが安全に気持ちよく使えるように」と、定期的に学校備品や危険箇所の安全点検をしている。

給食委員会が各学級の配膳台や台ふきんを定期的に点検したり、体育委員会がクラスのボールや体育館の用具庫を一つひとつ点検したりと、活動は多岐にわたる。

また、保健委員会では、石けんやアルコールの点検・補充をしたり、手洗い・うがいを促すための動画を制作して全校に放送したりと、コロナ禍の中だから大切にしなければならないことに関して自分たちができることを考え、活動している。

企画委員会では、友だちや教職員、地域の方々に気持ちのよいあいさつができるよう、あいさつ運動として朝休みの時間にあいさつに回り、各学級のあいさつの様子について放送して全校の意識を高める工夫も見られた。

今回紹介したのは委員会活動のごく一部であるが、高学年児童が学校の中心となり、自覚と責任をもって活動する中で、全校が助け合って安全に過ごせるような意識を広げている。



担当の先生からひとこと

全校が一体となって活動することで、「だれかにしてもらおう」意識から「自分たちで気づく、気をつける、行動する」意識が生まれるきっかけになりました。

今後も一つひとつの活動を見直ししながら、児童の実態や社会情勢に合わせて柔軟に工夫を重ねていきたいと思っています。

高野千秋 先生

健康クイズの取組

～ 体のことをもっとよく知って元気に過ごそう ～

高島市立今津北小学校

〒520-1655 高島市今津町日置前100
TEL.0740-22-2134 FAX.0740-22-3972

学校紹介

校区は高島市今津町の北部に位置し、箱館山や琵琶湖などの自然に恵まれた地域である。山裾の扇状地帯では、柿や蕎麦が栽培され、地域の特産物となっている。その周辺から琵琶湖岸にかけて田園が広がり、早場米の産地として知られている。箱館山にはスキー場があり、重要な観光資源となっている。近年、兼業農家が多くなり、3世代同居家族も多い。保護者や地域の方々の学校への信頼は厚く、期待も大きい。学習活動や各種行事、PTA活動等、学校教育に極めて協力的である。学校教育目標は「すすんで やさしく たくましく」で、全校児童98人の小規模校である。



活動のねらい

健康委員会の児童が企画・運営を行い、全校児童が健康に関する問題を解くことによって自分の体のことを知り、より健康に生きていこうとする気持ちを高める機会とする。

子どもの変容

楽しくクイズを解く中で、体の仕組みの素晴らしさ・不思議さに気づくことができたことで、健康に対する意識が高まったように感じる。

今後の課題

単発の活動で終わることなく、毎学期取り組んだり、毎年恒例の活動にしていったりできるとよいと考ええる。

担当の先生からひとこと

健康委員会の児童が、本当によく頑張って企画・運営していた。児童会主体の活動をこれからも大切にしていきたい。



三宅弘晃 先生

活動内容

〈委員会活動と全校朝会〉

本校には、5・6年生が参加する6つの委員会活動がある。それは、企画委員会、体育委員会、図書委員会、放送委員会、環境委員会、健康委員会の6つである。

大体、月に1回程度(年間で11回)の委員会活動を月曜日の6時間目に実施している。そこでの話し合いをもとにして、各委員会での常時活動などに取り組んでいる。

また、各委員会ともに、年間1回であるが、体育館で行う全校朝会(2カ月に1回程度実施)の場で、委員会の取組紹介や活動報告をしている。どの委員会も発表する内容や方法に工夫を凝らして、表現する力を高める貴重な場となっているとともに、4年生以下の児童にとっても、お兄さんお姉さんの日々の努力や苦勞を知る機会ともなっている。

〈健康ウォークラリー〉

今回紹介する取り組みは、健康委員会が行った取組である。

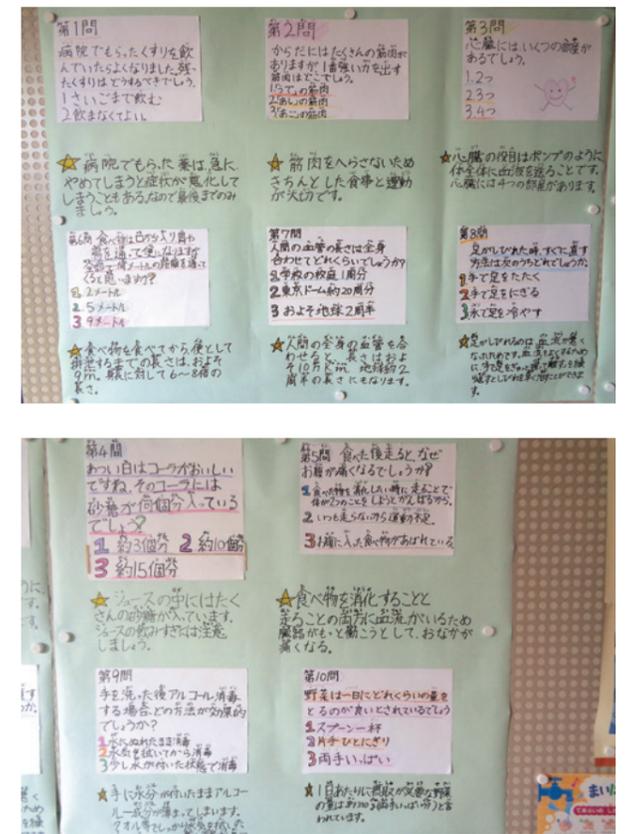
2021年11月29日から12月3日までの昼休みに、校舎内のあちこちに掲示してある健康クイズ(全10枚)を探して、クイズを解いていく「健康ウォークラリー」である。10枚のクイズは、すぐには見つけられないような場所(掃除箱の裏側、消火器の裏側等)に貼ってあり、問題の貼ってある場所を探すこと自体にまず興味を示した子どもたちであった。

問題を見つけた児童からは、「やった見つけた。あと～枚!」とか、「僕達が見つけたのが最初!友達にも教えてあげよう。」というような喜びの声が上がっていた。

10問の健康クイズの中には、「食べた後に走ると、なぜお腹が痛くなるのか。」とか、「人間の血管の長さ、全身合わせてどれくらいでしょうか。」というような大人でも知らないような内容が扱われているものもあった。しかし、全て選択式の問題となっていて、全校児童が取り組みやすい内容となっていた。

全問正解をした児童は、残念ながらいなかったが、各学年の中の高得点者には、健康委員会から賞状が贈られた。全校児童の中では、何と、1年生児童の9問正解が最高得点であった。後日、正解の番号だけでなく、解説も紹介されていて、楽しく健康に関して勉強する機会となった。

健康委員会の児童が、「気づき、考え、行動する」今回の活動を実施したことをきっかけにして、係活動でクイズラリー的なイベントを実施した学年もあった。



児童が主体的に身の回りの環境を整えるための取組

～ 保健給食委員会、環境委員会の活動を通して ～

東近江市立愛東北小学校

〒527-0143 東近江市百済寺本町1399
TEL.0749-46-0588 FAX.0749-46-0376

学校紹介

湖東三山の一つ、百済寺に近い所に、アンデルセンのおとぎの国を思わせるオレンジ色の校舎、東近江市立愛東北小学校がある。

本校は、1995年に校舎が、また2006年にプールと体育館が改築され、校庭には桜やつつじ、銀杏、紅葉などが季節ごとに美しい景観を見せ、恵まれた環境の中で、子どもたちは学習に励んでいる。全校児童112人、8学級の小規模校であるが、安全教育、環境教育、福祉教育などを中心に地域と連携し信頼される学校づくりに取り組んでいる。

また、地域・保護者の方も協力的で、スクールガードをはじめ多くの方に支援をいただいている。愛東地区は自然環境に恵まれ、以前より地域をあげて様々な実践が行われてきた。

こうした中で、本校の特色ある教育活動の一つとして、全校で縦割り班『はとのご班』を組織し、毎年1学期に「はとのご遠足」を実施し、多くの水鳥や渡り鳥が飛来する校区にある「恵美須溜」において、水鳥が安心して過ごせるように清掃活動をしている。

また、ゲストティーチャーのご指導を受けながら、米作り体験や梨の栽培、絶滅危惧種カワバタモロコの保護をテーマにした学校ビオトープ「琵琶湖の池」での環境保全学習など、地域の環境に学び、その学びを地域に発信する教育活動を展開している。



活動のねらい

新型コロナウイルス感染防止策が必要であるという知識を持ち、教師主導ではなく、委員会活動として意識して室内の換気を行う等、子ども自身が命を守る行動ができるようにする。

子どもの変容

当初、換気し忘れの部屋があった中で、環境委員が積極的に声掛けをしたり換気をしたりする姿が見られた。

徐々に、児童たち同士が意識的に声を掛け合ったり、自主的に換気したりできるようになった。

今後の課題

換気という「命を守る」行動ができたことで、他にもできることはないかと考えさせ、他の活動へと波及させていきたい。

活動内容

〈窓開け用の小物づくり〉

保健給食委員会では、新型コロナウイルスの感染を防止するため、室内の小まめな換気が必要であると考えた。

どうすれば意識して換気ができるのかという議題で、児童たちが話し合った。「休み時間になったら当番が換気をする」「いつも窓を開けておく」といった意見が出てきた。養護教諭が学校薬剤師と相談し、「窓やドアを5cmほど開けておく」という助言を踏まえ、「各教室のドアに黄色の矢印を付ける」ことになった。

休み時間に各教室を回り、5cmほどの間隔を測って、黄色の矢印を接着した。初めは違和感を覚える児童もいたが、今ではすっかり馴染んでおり、日常的に意識して換気を行うことができています。

〈教室の換気チェック〉

環境委員会では、保健給食委員会の取組をもとに、「各教室で換気が行われているのか確認しよう」という意見が出てきた。

そこで、毎日、朝と昼に各教室を回り、矢印の位置までドアが開いているかどうかを点検した。初めは、全く換気できていない教室や、矢印の位置が意識できていない教室があり、その都度、声掛けをしたりドアの間隔を適切に空けたりして注意喚起した。一週間の終わりには、校内放送で換気チェックの結果を発表し、全校に周知した。今では、児童たち同士が意識的に声を掛け合ったり換気したりできるようになっている。



〈ポスター掲示やCO₂モニターの設置〉

各クラスには、「自分をまもる！だいじな人をまもる！みんなをまもる！ために…」と題して、新型コロナウイルス感染防止策のポイントをまとめたポスターを掲示した。

「①かんき ②せきエチケット ③てあらい・うがい ④けんこうかんさつ ⑤きそく正しい生活 ⑥ともだちとくっつかない ⑦おもいやり ⑧いじめはゆるさない」

こうした合言葉を示すことで、新型コロナウイルスの感染防止だけでなく、感染者への差別を防止するための人権意識の向上に努めた。今回の取組は、新型コロナウイルス感染防止策という視点に加え、一人ひとりの基本的な生活習慣や人権意識を見つめ直す機会につながり、今後も継続していきたいと考えている。

また、各教室にCO₂モニターを設置し、CO₂濃度や温湿度などの空気環境をデータとして確認できるようにした。このことにより、視覚的に教室の空気環境を把握し、常に快適な空間づくりに取り組むことができた。

一人ひとりが意識して主体的に取り組むためには、こうした視覚的な支援や定期的なアナウンスなどが必要である。今回の実践を生かし、来年度も一人ひとりが意識して快適に生活できる学校づくりに取り組んでいきたい。



担当の先生からひとこと

少ない予算で何かできることはないかと考えた。

保健給食委員会・環境委員会を中心にして、全校児童が「密を避け、命を守る」ということを意識できた活動であったと感じている。



大塚雄介 先生

健康、安全を考える食育

～ 食育資料や委員会の活動を通して ～

長浜市立西浅井中学校

〒529-0704 長浜市西浅井町塩津中312
TEL.0749-88-0123 FAX.0749-88-0655

学校紹介

本校は全校生徒87人で、琵琶湖の最北端に位置し、北は福井県、東は余呉、木之本、西は高島市に接しています。山と水と緑に囲まれた自然ロマンあふれる町で、遺跡や古墳、歴史的建造物など歴史的価値のある文化遺産も多くあります。地域の環境や住民の生活様式も変化し、価値観の多様化も進みつつある中で、地域の産物、食文化や食にかかわる歴史等を理解し、それらを尊重する心をもつことができるよう、食育を進めています。



活動のねらい

- 毎月食育の日を設定し、給食センターからの資料を読むことで、食事の重要性や食事の喜び、楽しさを理解する機会を設ける
- 給食委員会が残飯調査を行い、全校生徒の給食に対する意識を高める

子どもの変容

毎月食育資料を読むことで、生徒の食への興味関心が高まった。資料の内容は栄養素や食事のマナー、給食の準備など様々であり、特に4月の食育資料を読んだ後は、エプロン・マスク・手洗いに対する意識が高まり、生徒全員が正しい服装で準備前に手を洗うことができた。また、残飯調査を行うことで、どのような工夫をすれば残食を削減することができるか生徒たち自身で考えることができた。

今後の課題

給食委員会と連携し、食育資料を掲示物としても活用したい。
また、残飯調査の結果をどのように掲示すれば効果的であるかを検討しなければいけないと感じた。

活動内容

〈食育の日〉

毎月食育の日を設定し、給食センターからの資料を読む。

- 4月「身支度の理由を知って、衛生的に取り組もう」
身支度の意味を知り、改めてエプロン・マスク・手洗いに対する意識が高まった。
- 5月「協力して後片付けしよう」
後片付けのルールを確認することができた。
- 6月「よい食べ方を身につけよう」
正しいおはしの使い方を確認することができた。
- 7月「衛生に気を付けて食事をしよう」
手洗いの重要性やペットボトルの飲み残し、バーベキューでの生焼けの肉など、夏場だからこそ危険である事柄に目を向けることができた。
- 9月「黄色の食べ物について知ろう」
黄色の食べ物の働きについて知り、具体的にどの食べ物が黄色の食べ物であるか知ることができた。
- 10月「赤色の食べ物について」
赤色の食べ物の働きについて知り、具体的にどの食べ物が赤色の食べ物であるか知ることができた。
- 11月「緑色の食べ物について知ろう」
緑色の食べ物の働きについて知り、具体的にどの食べ物が緑色の食べ物であるか知ることができた。
- 12月「食レンジャーについて知ろう」
9～11月の振り返りを行い、食べ物の持つ働きについて学び、毎日健康に過ごすためにはどのような食事をすればよいか考えることができた。



〈残飯調査〉

給食委員会の活動として、12月6日～10日まで残食チェックを行った。

学校給食の食品ロスは年間で生徒一人当たり約17kgともいわれ、「給食の食べ残しはなぜ起こるのか」や「食品ロスを削減するために自分たちは何ができるか」を考える良い機会となった。給食準備を早く行って、食べる時間を長くすることや、残食がないようすべて配りきることなどの工夫を各クラスで行った。

この工夫をすることにより、普段は残食が多いクラスもすべて食べきろうという目標を持つことができた。

〈生徒の食生活・食事状況調査〉

給食委員会の活動として、食生活・食事状況調査を行った。学校給食だけでなく、家庭でどのように食事を摂っているか把握することができた。以下が調査によりわかったことである。

- 朝食はほとんどの生徒が食べてきている。
- 給食の時間を楽しみにしている生徒が多い。
- 大半の生徒は給食を残さずに食べているが、好き嫌いがある生徒が多い。
- 食事は家庭でとる家が多く、外食をすることはほとんどないが、月平均1～2回程度の外食の日がある。
- 保護者の仕事などの都合で、家族全員でそろって食事がとれない家庭も少なくないが、孤食の生徒は少ない。



担当の先生からひとこと

継続して食育資料を読むことで、生徒たちの食に関する興味関心が高まっていくのを感じた。

給食委員会としては、クイズなどの掲示物を多く取り入れたいと考えている。



長瀬美帆 先生

保幼小交流 ～ 花いっぱいからつながりを～

守山市立立入が丘小学校

〒524-0031 守山市立入町222
TEL.077-581-0081 FAX.077-581-0082

学校紹介

本校では、「たのしさいっぱい！ちからいっぱい！はないっぱい！」を合言葉に様々な行事に取り組んでいる。「はないっぱい」の学校になるよう委員会を中心に学校花壇づくりに取り組み、毎年花壇コンクールにも参加している。子どもたちが育てた花を地域の保育園、幼稚園の5歳児や一人暮らしのお年寄りにプレゼントする活動も進めている。



活動のねらい

花壇の花を自由に摘み、児童と交流する活動を通して、小学校への期待や楽しさを広げる。

子どもの変容

保育園、幼稚園の5歳児が委員会の子もたちと楽しそうに花を摘み、花束のように飾り付けてもらうことで、来年への期待で目を輝かしている。

5歳児たちのきらきらしたまなざしを向けられて照れながらもがんばる子どもたちは交流の輪を広げていくことができた。

今後の課題

地域の5歳児と花を介した交流はできたが、他の園児や高齢者の方などとも交流活動に広げていくことが必要だと感じた。

担当の先生からひとこと

5年生と5歳児の交流会（5・5交流）や6年生と新入生との交流だけでなく地域の方との交流を大切にしていくことが大切だと改めて感じた。

摘んだ花を両親や地域の方に渡すという声も聞かれ、花をきっかけに多くの人とつながることができれば、保幼小の交流もさらに深い活動になると思う。



立石 光 先生

活動内容

〈フラワーフェスティバル〉

保育園、幼稚園、各学年の子どもたちが学校花壇の花を自由に摘み、持ち帰ることができる活動。近年は10月～11月の数日間に分散して行っている。



やさしさいっぱいとどけ隊、出動!!

～ お年寄りとの交流を通して ～

甲賀市立大原小学校

〒520-3414 甲賀市甲賀町大久保1000
TEL.0748-88-2049 FAX.0748-88-8030

学校紹介

本校は、全校児童195人、歴史や自然がいっぱいの校区です。本校の総合的な学習は、「ふるさと大原」をテーマとして学習を進めています。

ふるさとを愛し、ふるさと大原を大切にしていける子どもを育てていくために、各学年の発達段階に応じて、地域の方にも協力を得ながら学習しています。



活動のねらい

- ・高齢者に対する思いやりの心やともに生きようとする心を育てる。
- ・自分にできることを実践していこうとする態度を育てる。

子どもの変容

2世帯同居の家庭が多い校区ではあるが、年々核家族の家庭も増えてきている。

また、身内の高齢者と接する機会はあっても、地域の高齢者と接する機会は少ない。そんな中で高齢者と交流することを通して、どんな関わり方ができるかを考える良い学習となっている。

また、地域のバリアフリーや自分ができることにも目を向ける機会になった。

今後の課題

子どもたちは、「高齢者の方に対して」「幼児に対して」となると、優しく接したり、どんなことに気を付ければよいか考えたりすることはできる。しかし、周りの友だちに対してとなると、自分勝手なことをして迷惑をかけたり、心無い言動をとったりすることがみられる。誰に対しても思いやりの心をもって接することの大切さをより深く学べるようにしていきたい。また、普段の生活の中で、自分から行動に移すことは難しい子が多い。例えば、スロープの上で靴を脱いだり、車いすや松葉杖の友だちがいても廊下や教室が乱雑になっていたりとすることがある。学習したことが、普段の行動につながっていくように声をかけていく必要があると感じた。

活動内容

〈高齢者体験〉

- ①社会福祉協議会の方を講師に迎え、地域の高齢者の方に対する取り組みや制度を紹介してもらう。
- ②装備をつけて、高齢者の方がどれだけ動きづらいのか、どうすれば動きやすくなるのか(施設面)について考える。

〈高齢者との交流〉

- ①デイサービスセンター「すこやか荘」施設長さんより、「すこやか荘」ではどんなことをしているかや、施設の設備について説明していただく。
- ②高齢者の方との交流計画を立てる。(どうすれば楽しんでいただけるか、どんなものを作ればいいのか、どんな声掛けやお助けをすればよいかを考えながら計画)
- ③実際に高齢者の方と交流する。

〈交流に向けて〉

交流に向けて子どもたちは、グループごとに活動をした。

魚釣りゲームや福笑い、かるたなどを手作りし、どうすればゲームに参加しやすいか、グループ内で試行錯誤したり、お年寄り役と4年生役で実際に交流してよかったところ、改善するところを意見交換したりすることでより良いものにしていこうとする姿が見られた。



〈活動後〉

高齢者の方との交流のあと、クラス全員で振り返りをおこなった。

子どもたちは、「初めはどうしたらよいかわからなかったが、介護士さんの動きを見ているとゆっくり大きな声で話しておられたので、同じようにしたらうまくいった。」「笑顔が見られてうれしかった。」「楽しんでもらえてよかった。」など、高齢者の方の立場に立った振り返りができた。

また、施設のバリアフリーのつくりを見て、自分たちが暮らす町のバリアフリーではみられないところや心のバリアフリーができていないところにも目を向け、だれもが住みやすい町にするために、これから自分たちがどのように暮らしていくことが大切なのかを考えることができた。

他教科との連携として、国語科や社会科の学習でも、バリアフリーについて考えることができた。今後あらゆる場面で折に触れて、ソフト面、ハード面でのバリアフリーについて考える機会をもてるよう、仕組みでいきたい。



担当の先生からひとこと

高齢者体験で体の動きにくさを体験してから、すこやか荘のバリアフリーの施設を見ることでより理解が深まった。子どもたちはどうすれば楽しんでもらえるか、一生懸命グループで相談しながら計画を進めていたが、実際に交流するとうまくいかないことがあったり、どう接していいかわからなかったりすることがあった。しかし、介護士さんの動きが手本となり、介護士さんがされていることを真似していくうちにうまく交流できる子どもが増えていった。核家族の家庭も増えてきている中で、改めて交流することの大切さを感じた。



松永摩紀 先生

いのちを育む「花と健康の学校」

～ 1年間を通した園芸活動の取り組み ～

甲賀市立佐山小学校

〒520-3402 甲賀市甲賀町小佐治2922
TEL.0748-88-4077 FAX.0748-88-8029

学校紹介

甲賀市の南東に位置する本校は、全校児童90人の小規模校である。花と健康の学校として、「ふるさとを愛し未来を拓く 心豊かでたくましい 佐山っ子の育成」という教育目標のもと、伝統的に園芸活動に取り組んでいる。今年度は、「自ら気づき、考え、表現（行動）し、学び合う力の育成【信】」を重点目標とし、いのちを育む花づくりを通して、「自ら気づき、考え、実践する子」をめざしている。



活動のねらい

「頭を練り 心を育て 体をつくる花づくり」という大きな柱のもと、《1. 種から育て、開花・結実するまでの過程を通して、生命を大切にしたい慈しむ態度や、自然を愛する心情を培うこと。2. 花の美しさ、汗して働く姿の美しさを感じる感性を醸成すること。3. 仲間と協働し、力を合わせて取り組む楽しさや努力の結果に対する成就感を味わうこと。》を主なねらいとして掲げ、取り組んでいる。

子どもの変容

園芸委員会を中心に、水やりや草取り、花摘みなど花壇の管理に取り組んでいる。初めは、当番の役割として仕方なく取り組むといった様子だったが、次第に、朝の用意を手際よく済ませ、自分から進んで園芸活動に取り組もうとする姿に変わってきた。また、作業が滞っていた時期に、園芸委員ではない児童に、園芸活動の手伝いを呼びかけたところ、快く応じる児童が多かった。「気づき、考え、行動する」態度が育っていることを感じた。

今後の課題

夏季休業中には、4～6年生の児童が当番を決めて登校し、職員と草引きや花摘みの活動を行っていた。しかし、近年、夏の暑さが厳しく、熱中症対策として夏季休業中の当番活動を中止した。そのことで、園芸委員以外の児童が、花の盛りの充実した花壇との関わりをもつ機会が少なくなっている。今後、児童一人一人の花壇への関わり方をどのように保障し、どのような計画を立てていくか、が現在の課題となっている。

活動内容

花壇経営にあたっては、園芸委員会の常時活動（水やり・除草・花摘みなど）に合わせて、各学年で年間約5時間程度、苗作りや定植、除草作業などの全校勤労活動を行っている。

《苗づくり・ポット移植》

苗箱で発芽させた小さな芽を、全校児童の手で苗用ポットに移植している。秋花壇づくりの場合、1～3年生は比較的苗がしっかりしているマリーゴールドを、4～6年生はサルビアなどを扱う。低学年児童にとっては、小さな芽を移植することは大変根気のいる作業であるが、時間をかけて一つ一つ丁寧に作業に取り組んでいる。

《定植》

秋花壇づくりでは、4～6年生・教職員による花壇設計コンクールで選ばれたデザインをもとに、6年生児童がメイン花壇に、5年生児童が予備花壇に、1年～3年生はビオトープ周りの学級花壇に定植を行っている。また、色別円花壇があり、そこでは、高学年児童が低学年児童に声をかけるなど、サポートしながら、全校児童が順番に定植を行っている。仲間とともに働くことで、自分たちが育てた花や花壇に愛着をもとうとする児童の育成をめざしている。

《除草》

日常の花壇の草取りは、園芸委員と各クラスの当番が、朝の活動や清掃時間の活動として行っている。児童たちには、今、自分たちが世話をしていることが美しい花の開花に向けた大切な作業であることを伝えて



いる。夏の炎天下でも、冬の寒い日にも草引きに熱心に取り組む児童の姿に勤労奉仕の態度が育まれているのを感じる。

《種取り大会》

年2回、園芸委員会の活動として、花の種取りを全校で行っている。「この花は、こんなところに種をつけているんだね。」「ひとつの花からたくさんの種がとれるんだね。」などのつぶやきの中に、子どもたちと小さな花のいのちとのふれあいを感じられる。これらの活動から、さらなる自然愛護の精神が培われていくことを期待している。

《一人一鉢栽培》

夏休み前に、サルビア・マリーゴールドの苗を各自2株ずつ持ち帰る。夏休み明けには、毎日欠かさず育てたその成果を持ち寄り、学年ごとに立派に育てた児童を選び、「努力賞」を贈っている。また、運動会当日に、グラウンドに全児童のプランターを並べて、花いっぱい会場を飾っている。育てる苦労や失敗、咲いた喜びなどについては、作文や日記を通して知ることができる。

《地域への奉仕活動》

園芸委員会が中心になり、全校児童が関わって育てた花の苗を、特別養護老人ホームや保育園・市民センターなどの施設にプレゼントしている。特別養護老人ホームには、園芸委員の児童が苗を持って訪問し、利用者の方々と一緒に定植を行っており、大変喜んでいただいている。



担当の先生からひとこと

コロナ禍のため、今年も例年とは違う活動になりましたが、花壇のデザイン、苗づくり、定植など精一杯の活動を続け、例年通りの花いっぱい花壇になりました。園芸委員会以外の子ども達も進んで休み時間に手伝う等、学校全体で取り組むことができました。



山本忠保 先生

ひとり暮らしの高齢者へ元気を届ける ～ 地域の高齢者のために私たちにできること ～

甲賀市立多羅尾小学校

〒529-1821 甲賀市信楽町多羅尾2012
TEL.0748-85-0004 FAX.0748-85-0198

学校紹介

本校は、滋賀県の最南端に位置し、周囲を山に囲まれ静かな環境にある学校です。全校児童8人のうち6人は、特認校制度を利用して近隣の学区より入学・転入してきた児童です。

オペレッタ発表の際には約140の方が鑑賞にきていただくなど、地域全体で児童一人ひとりを大事にしてください。学校と地域との結びつきはたいへん強いです。



活動のねらい

地域への感謝の一つとして、ひとり暮らしの高齢者へ自分たちにできることを考え、実行する。

子どもの変容

道ですれ違った方から「元気金メダルありがとう。うれしかったわ。」と声をかけていただき、子どもたちは、自分たちで考えて実行したことに対してやりがいを感じ、言葉を交わし、思いが通じたことへの喜びを感じることができた。

今後の課題

児童数は減少方向にある一方、地域の高齢者の数は増加の一途をたどっている。子どもたちの力でできることを年々工夫していく必要がある。

担当の先生からひとこと

ひとり暮らしの高齢者のみならず、相手の気持ちに寄り添って、自分たちにできることを考えることに値打ちがあると考えています。

児童が少なく、一人の分量は多いが、今後も可能な限りこの交流は続けていきたいです。



杉山綾音 先生

活動内容

①考える

- 児童会本部が、敬老の日に向けて、ひとり暮らしの高齢者に元気になってもらえるために何ができるかを考える。

②取り組む

- 決定事項を全校児童に伝える。全校合同で行っている朝の会の中で、ねらいや内容を伝え、取組を始める。
- 今年度は、オリンピックにちなんで「元気金メダル」を作成し、手紙とともに渡すことになった。
- これまでは、手紙の他に育てた花の種や苗、手作りのカードなどをお渡ししたこともある。

③届ける

- 児童数に対して、学区が広範囲の上、ひとり暮らしの高齢者の数が多いため、市民センターや地域の方にご協力いただいて届けさせていたideている。
- コロナウイルス感染拡大状況になるまでは、近くのお家の方には児童が直接届けていた。



校内で育てている花を地域の施設にプレゼント

～ 知行合一の実践 ～

高島市立青柳小学校

〒520-1211 高島市安曇川町青柳1138
TEL.0740-32-0039 FAX.0740-32-0045

学校紹介

●全校生徒：156人 ●校訓：良知に生きる ●教育目標：自ら学び心豊かでたくましい子どもの育成

本校は、中江藤樹先生の生誕の地であり、その教えにもとづいて「豊かな人間性」を育む教育を充実させている。様々な教育活動に上級生が下級生をいたわり、下級生は上級生に感謝の意を表す場面が設定されている。藤樹先生の教えを自分たちの学校生活にたとえて実践している。



活動のねらい

中江藤樹先生の教えである、「知行合一」：(学んだことは実行してはじめて知ったことになる)を実践するため、児童会活動(栽培ボランティア委員会)等で、地域貢献する活動を行っている。

子どもの変容

様々な教育活動の中に、単級学級をいかした縦割り活動を行っているため、学年を越えて仲が良く、上級生がリーダーシップをとって活動を行うことができている。苗を育てることについては、春と秋の2回実施した。1回目は、教師の支援がないと子どもたちは動けないが、2回目は、段取りもよくわかっているため、子どもたちが積極的に動く場面が多く見られた。伝統的なこの活動が、上級生の動きを見て下級生がまねをしながら動いていくことを通して、「あんな先輩になりたい」という思いを強めていききっかけになっている。

今後の課題

今年度も、コロナ禍ということもあり、栽培したものを各施設に送ることしかできていないが、今後は、福祉関係の施設訪問を行い交流をしたり、施設以外にも苗を植えたりできればと考えている。

小学生だからこそ、地域のためにできることはまだまだありそうだ。

担当の先生からひとこと

活動内容

児童会テーマ「心の芽思いやる気持ちで花が咲く」

本校の児童会活動では、藤樹先生の教えにもとづき行っている活動がある。

1.企画委員会は、人を傷つけるような言葉を使う事例がでてきた時に、「優しい言葉プロジェクト」として、「優しい言葉」の使い方の例を20枚画用紙に書き込み、校舎内に掲示した。その後、全校児童にこの事例を見てもらうために、20例を利用したウォークラリーを行った。さらに、事例を見るだけでなく実践してもらえるように、人権週間にもつなげ、各学級から実施した内容を発表する機会も設けた。

2.栽培ボランティア委員会は、年間2回(春・秋)、種から苗を育て、地域の施設等に実配布している。春は、サルビア、マリーゴールド等、秋は、ビオラ、パンジー等を育てている。今年度の配布場所は、特別養護老人ホーム、市内こども園、郵便局、市内中学校等である。

- ①7月14日 サルビア・マリーゴールドの苗を園や市内施設に寄贈
- ②12月17日 ビオラ・パンジーを養護老人ホーム、郵便局等に寄贈



〈藤樹先生の教え「知行合一」〉

「人々は、学ぶことによって、人として行わなければならない道を知ることができる。しかし、学んだだけで、それを行わなければ本当に知ったことにはならない。物事をよく理解し、実行してこそはじめて知ったことになる。」

子どもたちは、日頃から地域の様々な方々にお世話になっている。感謝の気持ちを表すために、自分たちで育てた苗を配布し、多くの方にきれいな花を見て元気になってもらおうと計画をした。種から丁寧に育てた苗は、次の手に受け継がれ、より多くの方の心を豊かにしてくれることだろう。



石畝千登勢 先生

「青柳小学校の花壇を明るく華やかに！」委員会活動で児童と花壇のデザインをしたものの、どんな花をどうやって育てていけばよいのかと悩んだ。そこで、力になってくださったのが、地域ボランティアの方々である。委員会活動や昼休みなど、児童の活動時間に合わせて学校にきてくださり、助言や下準備、活動の手助けをしてくださった。児童は自分たちが大切に育てた花の苗を自信をもって地域に送り出すことができた。世代を超えた地域のつながりが脈々と受け継がれている。

山小っ子ランドをしよう

～ 思いを伝えること・伝わる良さに気づける子どもの育成 ～

東近江市立山上小学校

〒527-0231 東近江市山上町200
TEL.0748-27-0028 FAX.0748-27-8055

学校紹介

本校は、全校児童153人。四季折々の豊かな自然に恵まれています。保護者や地域も学校教育に対して、とても協力的です。児童も、素直で子どもらしい子が多く、行事などには積極的に関わることができています。たてわり活動などもさかんで、高学年がリーダーとしての自覚を持ち、異年齢とも仲良く活動できています。しかしながら、新しいものを受け入れる力は弱く、発展的に対話を広げるコミュニケーション力は弱いと感じています。



活動のねらい

幼稚園の5歳児さんが楽しんでもらえるようにということに重点を置き、自分の意見を出しながら、友達と一緒に話し合っ製作する中で、自分の思いが伝わる楽しさ、友達と一緒に工夫しながら作る楽しさ、協力して活動することの素晴らしさに気づかせたいと考えました。また、一番身近で長く過ごす友だちと関わる楽しさがわかることで、日々の学校生活においても、仲良く過ごしていこうという気持ちに繋がればよいなと思いました。

子どもの変容

当初、1・2年の異学年交流ということもあり、活動を進める中では、トラブルも多く見られました。中には、「もう無理や。」とあきらめる場面もありましたが、意見の相違点を見つけ、お互いの意見を出し合い、折り合うところを考えさせたことで、相手の良さに気づくことやさらに良くなる方法を考える楽しさを見つけることができました。「相手に楽しんでもらいたい」という気持ちが、粘り強く活動を続けることに繋がったと思います。

今後の課題

遊びを考える時点では、自分たちの経験が基盤となるので、いろんなことを体験させることが大切だと改めて感じました。

また、どこまで現在の活動が進んでいるのかなど、見通しを持つということについては、まだまだ難しいので、視覚的にわかるような支援ができればよかったですと感じました。

活動内容

『5歳児さんに、山小っ子ランドを楽しんでもらおう』

1・2年生が力を合わせて、『山小っ子ランド』と称したいろんな遊びができる場所を体育館に制作し、幼稚園の5歳児を招待しました。

◆計画◆

自分たちが楽しかった遊びを1・2年生で共有し、その中から、招待する幼稚園の5歳児が楽しめそうな遊びを選択しました。単なる遊びではなく、小学校の要素も取り入れて工夫をしました。喜ばせたいと思う対象相手が明確なことや自分たちもかつて山小っ子ランドを経験していることもあり、どの子も意欲的でスムーズに活動に参加し始めました。

次に、作りたい遊びごとに、グループを決め、看板、遊びの道具やルールについて、図書資料なども活用しながら、制作しました。

また、リハーサルと称して、幼稚園の友だちに披露する前に、学校の友だちの前で発表して、よりよくなるように意見交換し、それを受けて、再度修正しました。

リハーサル後、当日の自分の目標とグループの目標を考えたことにより、一段と活動に前向きに取り組めるようになりました。



◆山小っ子ランド 当日 2020年10月30日(金)◆

『さかなつり』『ビー玉転がし』『射的』『ボーリング』『ガチャガチャ』『さかなつり』『まとあて』の7つのコーナーを設置し、園児を迎える準備をしました。

まず始めに、コマーシャルと題して、7グループがコーナー紹介をしました。どの子もとても緊張していましたが、大きな声ではっきりと伝えることができました。

そして、いよいよ5歳児が、各コーナーを回ってきます。5歳児を迎えて、「楽しんでほしい」という願いが、コーナー案内やゲームの説明、園児への声かけや励ましなど、あらゆる場面で見られました。はじめの会から終わりの会まで、自分たちの力で司会進行することができました。

◆振り返り◆

終わったあと、「5歳児さんが喜んでくれたことが、自分たちの喜びとなり、見ているだけでも楽しくなった。」という感想が挙がりました。話し合う活動を通して、友だちの良さに気づき、いろんな人と親しく接することができるようになった自分の成長を感じていました。

また5歳児さんからも、「小学校へ行くのが楽しみになった。」とか「楽しかったので、幼稚園でも制作してみたい。」など、小学校へのあこがれを抱くことに繋がりました。



担当の先生からひとこと

「相手に楽しんでもらいたい」という自分たちの思いが誰かに伝わることや形になることの喜びが、子どもたちの笑顔からあふれていて、終わったあとの達成感や充実感を子どもたちに感じてもらえたと思います。

当日は、司会進行から終わりの挨拶まで、自分たちの力で進めることができている、とても、頼もしく感じました。



飯沼美保 先生

生徒の自己肯定感の高揚を目指した生徒会活動

～ 令和2年7月豪雨災害義援金募金活動を通して ～

大津市立唐崎中学校

〒520-0106 大津市唐崎2丁目9-1
TEL.077-579-2306 FAX.077-579-8944

学校紹介

本校は、全校生徒365人の中規模校である。琵琶湖と比叡山系に挟まれた大津市中部に位置し、渡来人の往来や唐崎の松に代表されるように歴史と由緒ある地域である。地域関係団体や校園が協力し、防犯や青少年育成に積極的に取り組んでいる。毎年、赤い羽根共同募金の活動に中学生が参加したり、全校生徒が中学校の周辺地域を清掃したりするなど、ボランティア活動にも意欲的に参加する生徒が多い。



活動のねらい

ここ数年、地域や社会に貢献する生徒会の実現を目指してきた。生徒会を中心とする特別活動によって地域に根差した学校づくりをおこなっている。この活動を通して、自らの活動や行動が「他者との関わり」によって評価され、認められるものになり、自己肯定感の高揚につながるものと考えている。また、このような生徒主体の活動において、自己の存在意義を認識することで、次代を担うリーダーの育成を行ってきたい。

子どもの変容

最初は、どのような声掛けをしたら良いかわからず、思うように活動ができなかった。しかし、街ゆく人々の協力が増えるにつれ、大きな声で呼びかけられるようになった。また、テレビや新聞といったメディアに取り上げてもらい、そのニュースを見た人々からの声掛けが自信に変わり、予想以上の成果につながった。この活動を通して、「自分たちの行動が地域や社会に認められている」という自己肯定感の高揚につながったと思う。

今後の課題

今回の活動を通して、生徒は大きな達成感を得ることができた。3つの柱の一つ「地域に貢献（唐中コミュニティ）」を実践することで、さらにもう一つの柱「生徒全員が誇り（唐中プライド）」の達成にも有効な活動であった。今後は生徒会役員だけが主体となる活動ではなく、生徒会役員が中心にリーダーとしての役割を果たしながら、学校全体の取り組みとして他の生徒への広がりがある活動を行ってきたい。

活動内容

唐崎中学校生徒会では「YES WE CAN ～やればできるさ～」のスローガンのもと、活動の3つの柱を毎年掲げている。

この活動が行われた2020年度の生徒会の3つの柱の中には、「地域に貢献（唐中コミュニティ）」という柱があり、中学生として地域や社会に貢献することを活動の一つのテーマとして目指していた。

当時の生徒会長は、「豪雨災害のニュースを見ていて、私たちに何かできることはないだろうか。」と思い、早速、その日の昼に生徒会ミーティングを緊急に行った。そのミーティングで、「義援金募金活動を行おう」と意見がまとまり、生徒会役員が一致団結した。

活動は、20年7月15日～21日の5日間、朝7:45～8:15にJR唐崎駅前と本校校門の前に役割を分担し、生徒会役員が豪雨災害の被災地への義援金募金を呼びかけた。

また、JR唐崎駅前では横断幕を掲げ、呼びかけを行った。JR唐崎駅前では出勤途中の多くの地域の方々が募金に協力してくださり、校門前では全校生徒が生徒会役員の呼びかけに応じて募金を行った。また、テレビや新聞といったメディアに取り上げられたことで、地域住民の方にも周知されることとなり、わざわざ募金をするために足を運んでいただく方もあった。

さらに、大津市の教育長が募金に参加頂いたり、滋賀県知事からも励ましの手紙をいただいたりと、生徒たちの活動が多くの人に認めていただける活動となった。5日間の募金の合計金額は175,777円となり、21年7月22日に日本赤十字社滋賀県支部に寄付した。



担当の先生からひとこと

生徒の発案から、大々的な活動ができた。メディアにも多数取り上げてもらうことができ、生徒たちの自己肯定感を高める活動になり、有意義なものとなったと思う。また地域の方々の協力もあり、大きな成果を得ることができた。これからもこの活動を基として、地域に根差し、社会に貢献できる唐崎中学校を目指していきたい。



木下大和 先生

地域の一員として ～「ふれあい広場」除草作業～

彦根市立稲枝中学校

〒521-1105 彦根市田原町202
TEL.0749-43-2210 FAX.0749-43-5955

学校紹介

本校は、全校生徒285人。周囲は豊かな田園風景が広がる地域に位置する学校です。

また、彦根市役所稲枝支所や稲枝地区公民館、みずほ文化ホール、稲枝地区体育館など多くの方が利用される公共の施設と隣接しています。そういった施設を学校も利用させていただく機会があります。物心両面で地域の方に支えていただいています。



活動のねらい

- 周囲の環境に目を向け、その改善に取り組もうとする生徒を育成する。
- 作業を通して、勤労の尊さや成就感を味わう。
- 「ふれあい広場」などを整備することで、地域の一員としての取り組みの必要性を自覚すると共に、日頃から地域に貢献できる生徒を育成する。

子どもの変容

作業に集中するまで少し時間がかかったが、割り当てられた範囲の除草にしっかり取り組んでいた。

特に3年生は多くの方が通行する場所を担当したが、非常にきれいにすることができた。

最後、刈った草を集めた時にはどの生徒も作業をやり遂げた満足感を感じていた。

今後の課題

昨年度は新型コロナウイルスの影響でこの活動を実施することができなかった。

今年度は実施できたが、この活動に限らず、地域の一員として取り組む活動の多くが制限されてしまうのが課題である。

地域の方に何かをしていただくだけでなく、自分たちができることも増えたと実感できる機会が増えるといい。

活動内容

〈除草作業〉

- 1.日 時
2021年6月7日(月) 5・6校時
- 2.活動場所
1年生…ふれあい広場グラウンド・公園
2年生…ふれあい広場グラウンド・稲枝地区体育館周辺
3年生…稲枝支所周辺・校舎南側フェンス沿い
- 3.作業内容
 - グラウンド内、公園の遊具周辺、体育館の周り、稲枝支所周辺の生垣周辺の除草作業を行う。刈った草については袋に入れ、ふれあい広場横に集める。
 - この活動は稲枝地区連合自治会からの協力依頼があり実施する。

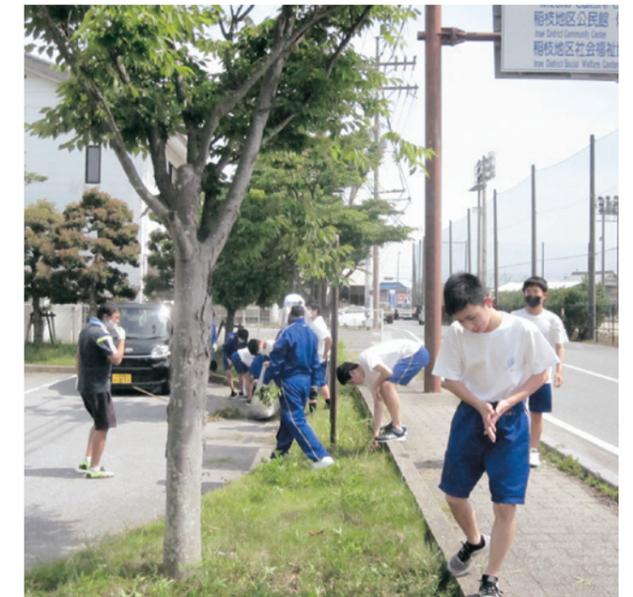
地域の一員として生徒は、稲枝地区青少年育成協議会等から依頼があった活動にボランティアとして参加している。

多くの活動は、参加を希望する生徒が活動するものである。例えば、稲枝駅前環境美化事業として行われる花植えの作業や花の水やり、夏祭りや稲枝地区文化祭、子ども祭りなどの運営の補助である。個人としての参加だけでなく、部活動単位で参加することもある。

ただ、コロナ禍の広がりによって中止される活動も多く、以前に比べると地域に出かける機会は少なくなった。

「ふれあい広場」除草作業については、連合自治会が毎月1回計画される除草作業を、地域の各種団体が順番に請け負っている活動で、稲枝中学校も地域の一員として取り組んでいる。

この活動については、作業の範囲も広いため、学校全体での活動としている。地域に貢献することができる機会が少なくなったため、貴重な活動の一つと言える。



担当の先生からひとこと

昨年度は新型コロナウイルスの影響により実施できませんでしたが、今年度は実施することができてよかったです。

この活動を通して、子どもが地域の方や施設を大切にしようと思えることができました。日々の環境の美化を意識づけることにもつながったと思います。



青江巧真 先生

ごみゼロ大作戦

ごみゼロに向けて ～ 私たちにできること ～

東近江市立永源寺中学校

〒527-0231 東近江市山上町4300
TEL.0748-27-0043 FAX.0748-27-0380

学校紹介

本校は、生徒数106人の小規模校で、大変豊かな自然や美しい環境に恵まれている。校区となる東近江市永源寺地区は、愛知川を中心に広がる肥沃な扇状地と広大な山地を有し、木地師の里といわれるように古くから林業や農業が盛んな土地である。少人数ながら生徒は明るく活発で、生徒会を中心にした行事の企画・運営や学年を超えた交流を進めるなど自主的に活動し、また地域の行事への参加や小学校との連携を大切にしている。



活動のねらい

本校は、学校教育目標にSDGsを盛り込み、人々や自然との共生と調和を大切にした教育を推進している。椎茸栽培を通じた環境学習に長年取り組んでおり、生徒たちは日頃から豊かな自然に親しむことのできる生活をしているが、広く世界に目を向ければその裏には自然環境の危機的な状況がある。そうした事実に向け、一人ひとりが自分ができることは何かを考え、自然を守っていこうとする実践的な態度を身に付けることを目指して本活動を計画した。

子どもの変容

生徒会環境委員会を中心に椎茸栽培における収穫や管理作業、またペットボトルキャップの回収に取り組み、全校を上げての環境学習に取り組んでいる。また、花の苗を植えるポランティアに多くの生徒が集まるなど、環境への意識は高まっている。

PTA主催の講演会では永源寺地区の木材を活用した様々な取り組みや山林の保全、林業の実態について学ぶなど、SDGsについての理解を深めることができた。

今後の課題

本校の生徒は、講演などでは素直に話を聞くことができ、今回の活動にも熱心に取り組むことができた。こうした取り組みを継続し、様々な視点からSDGsの理解につなげていくことが望ましいが、他の学習活動や行事との関係から年間スケジュールがきついものになりがちである。

限られた時間の中でいかに効果的な活動を組み立てていくかが今後に向けた課題である。

活動内容

「環境美化の日」(5月30日)に合わせ、「ごみゼロ大作戦」を実施した。

【出前講座】

5月25日(火)6校時 全学年対象 体育館

演題：『ごみゼロに向けて～滋賀県の現状と私たちにできること～』

講師：琵琶湖環境部循環社会推進課

主な内容：家庭及び事業所から出るごみの排出量、処分費やリサイクル率等の現状とごみの分別や食品ロスの削減、生ごみ減量化について講話を聞き、ごみの減量化の推進につなげる。

滋賀県のごみ問題の実態やごみ処理における課題などについて画像や図とともにわかりやすく説明していただき、滋賀県の自然の美しさやそれを守っていくことの難しさ、人々の努力を知り、自分たちの身近な生活がごみ問題など世界の環境問題に繋がっていることを学ぶことができた。



【ごみ拾い奉仕作業】

5月28日(金)6校時 地域のごみ拾いをする。

学年を3つのグループに分け、合計9グループがそれぞれ担当したコースを歩いてごみ拾いをする。

- 1.学年ごとに校舎前に集合。
- 2.ごみ拾いの方法や安全上の注意点などについて確認し、それぞれのコースへ出発する。
- 3.生徒は各自が不要となったレジ袋を持ち、分別をしながらごみを集める。
- 4.学校に戻ったら、ごみを種類ごとに回収する。

当日は天候も良く、普段は何気なく通行している道路でも、田畑や草木に目を向けながらゆっくりとコースを巡った。

のどかな田園地帯であるが、実際に歩いてみると空き缶や食品の袋、弁当の容器など意外と多くのごみが落ちており、生徒たちはその状況に憤りの声を上げながら、熱心にごみを拾った。

学校に戻って各自が集めたごみを回収すると大量のごみが集まることとなり、生徒たちはごみの多さに驚くとともに、「きれいになったな」と言い合うなど地域の美化に役立った充実感を感じることができたようである。



担当の先生からひとこと

環境問題は地球規模で取り組まなければならない課題である。中学生には地球環境に目を向けながら、私たちが地球のため、環境のためにできることをする態度を身につけてほしいと願っています。その取り組みの一つが、東近江市のごみの現状を知り、問題意識をもって、ごみ拾いをする事です。



花澤 誠 先生

淡海エコフオスター活動

～ 地域清掃から考える環境問題 ～

滋賀短期大学附属高等学校

〒520-0052 大津市朝日ヶ丘1-18-1
TEL.077-522-3465 FAX.077-522-3651

学校紹介

大津インターの真下、琵琶湖を一望できる小高い丘に位置しています。自立を促し、社会に出て活躍できる人材育成を目標に教育活動を行っています。今年度より新しい教育課程で学んでいます。学科は普通科、類型はⅡ類・Ⅰ類の2つです。国公立、難関私学を目指すⅡ類と総合進学コース、スポーツ健康コース、生活デザインコースの3つのコースを持ち多種多様な進路実現を可能にするⅠ類です。文武両道をモットーにしており、多くの生徒が勉強に部活動に全力で取り組んでいます。



活動のねらい

地域に根ざした学校づくりの理念のもと、学校周辺の校外清掃活動を通して、奉仕の精神を養うとともに、環境美化に対する意識の高揚を図る。これらから社会で生きるための豊かな人間性を育む。

また、地域に愛される学校をめざし、清掃中に会う人と挨拶をするなど交流に努め、社会の一員としての自覚の涵養を図る。

子どもの変容

エコフオスター活動として学校周辺の清掃活動を行っている。活動を通じて、地域住民の方々との交流も生まれている。生徒は、登下校で通る道に沢山のゴミが落ちていることに改めて驚き、公共の場にゴミを捨てる人の存在に大きな問題意識を抱いていた。活動後は、ゴミの分別が丁寧に行われるようになり、登下校中、自発的にゴミ拾いを行う生徒の姿も増えるなど、生徒の環境美化に関する意識が高まる結果となった。

今後の課題

授業時間内では、ゴミ拾いに行ける範囲が限られているので、生徒会執行部や委員会、学年と連携し清掃範囲を拡大していきたい。

また、県がおこなっている清掃活動にも積極的に参加をするよう促していく。

活動内容

エコフオスターとは、エコ（環境）とフオスター（育成する）を結びつけ、環境こだわり県・滋賀を表す「淡海」を冠した造語です。

公共的場所の美化および保全のため、県民、事業者等が当該場所を愛情と責任を持ってボランティアで清掃する制度です。（淡海エコフオスター制度パンフレットより）

〈参加生徒〉

第1学年及び環境整備委員や生徒会執行部など有志生徒

〈活動期間〉

原則として隔月一回程度、複数クラスによる地域清掃活動を行う

2021年度は、6月2日・6月9日・12月13日・1月19日・2月16日に実施した。（7月12日にも実施予定でしたが、雨天のため中止になりました。）

〈実施区域（県からの依頼区域）事前に3コースの設定あり〉

- コース① 県道56号線（大津IC取り付け）
- コース② 県道103号線（県庁前）
- コース③ 大津駅中央通りの一部



〈主な清掃の内容〉

空き缶および吸い殻等の散乱ゴミの収集、分別
エコフオスター実施2週間前から1週間前までに学年・生徒会などの対象教員・生徒と話し合い実施コースの決定をする。実施2日前には生徒に持ち物の確認とコースの説明をする。エコフオスター当日は、最後に分別しやすいようにゴミの担当を決めるなど、コミュニケーションを取りながら一生懸命取り組んでいた様子が見られた。また、地域の方々とも挨拶をかわし、交流に努めている。エコフオスター終了後、各自ゴミの分別をし、感想文を書く。

校内でもごみの分別をしている。主にペットボトルは感染症対策のために洗浄した後、キャップ・ラベル・本体に分けている。キャップはエコキャップ推進活動をしている企業に送り、世界の子供たちにワクチンを贈る活動に貢献している。この活動を始めた当初はペットボトルを洗うことが習慣化されておらず、洗う生徒が少なかった。そのため教員が下校指導の際に声掛けをした。すると、今では教員が何も言わなくても分別・洗浄し、ペットボトルを捨てるようになった。これらの活動はゴミの分別を学び、環境問題について考えるきっかけになったと考える。



担当の先生からひとこと

エコフオスターを通じて生徒たちは、ポイ捨てや環境美化についての関心が高まった。

また、エコフオスター活動中に地域の方に「お疲れ様」「ありがとう」などのお声掛けをいただき、地域社会の一員であるという自覚が芽生えたように感じる。



山本怜奈 先生

ミシガン大学生との焼き物を通じた交流学習 ～ 心を通じ合わせてすてきな焼きものづくりをしよう～

甲賀市立甲南第三小学校

〒520-3305 甲賀市甲南町野川840
TEL.0748-86-2038 FAX.0748-86-0538

学校紹介

本校は自然豊かな地域に位置し、全校児童43人と少人数校であるため、縦のつながりも強く一人ひとりが分かり合える環境にある。

長年、愛鳥活動に取り組み、野外観察会や発表会を行っている。また、野鳥に関する愛着や知識も豊富である。外国語活動にも力を入れ、英語を使った学習発表や修学旅行でのインタビュー活動などにも取り組んでいる。



活動のねらい

- 外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図るとともに、日本と外国の言語や文化について理解を深める。
- イメージを伝え合い、協力して作品を作り上げる喜びを味わう。
- 本校の特徴である鳥の作品を甲賀市の特産品である信楽焼でつくることで、自分たちが住んでいる地域の良さを伝え、学校に対する愛着の気持ちを育てる。

子どもの変容

自分のペアを見つける活動では、ミシガン大学の学生さんに進んで声をかけ自分の好きなものについてスピーチすることができた。

ランプシェードづくりでは言葉だけでなく、身振り手振りや絵を使ってコミュニケーションを図る様子が見られた。

自分の思いを伝えたり相手の思いを理解しようとして努力する姿が見られた。

今後の課題

外国の方々と触れ合う機会の少ない本校にとって、このような機会をいただけることはとてもありがたいことである。

本事業を今後も続けていけるように関係機関と連携し計画的に進めていきたい。

担当の先生からひとこと

少人数の中で育っている本校の子どもたちにとって、自分の思いを伝えることや相手とコミュニケーションをとりながら作品づくりをするこの体験はとても貴重でした。

活動しているうちにどんどん打ち解けていく子どもたちの様子を見てとてもうれしく思いました。



早川 学 先生

活動内容

1) 陶芸の森の学芸員さんや陶芸家の方から「焼き物と光」について話を聞く。

2) アイスブレーキング (ペア探しスピーチゲーム)

ミシガン州立大学の学生さんに自分のペアを見つけるために、自分のことについてスピーチをし、名前を尋ねる。

作業ペアを発表する。

3) 粘土や人と仲良くなろう

粘土の特性を感じたり、ペア同士の気持ちが打ち解けられたりできるように粘土を使った活動を行う。

引率の先生と陶芸家の方のデモンストレーションを見て、自分たちもコミュニケーションをとりながら大きな作品をつくる。

4) 鳥のランプシェードを作ろう

形作りから色付けまで、さまざまなコミュニケーションの方法を用いて作品をつくる。

- どんな作品をつくるか、何の鳥にするかペアで相談する。
- 土台となる形を作る。
- 鳥のパーツを付け合わせる。
- ランプの光が漏れるように穴を開ける。
- 色付けをする。

5) 作品を見せ合い感想を発表しあう

ペアごとに出来上がった作品について相談しあって取り組んだところを発表し、感想を交流しあう。



海外の友達と国際交流をしよう

～ My Best Memoryから日本の文化を伝えよう～

東近江市立市原小学校

〒527-0223 東近江市高木町1124
TEL.0748-27-0140 FAX.0748-27-0237

学校紹介

本校は、布引丘陵と永源寺から流れる愛知川のほとりに位置する田園地帯にあり、美しい自然の中で人々のつながりを大切にしている教育を行っています。また、2022年度に創立150周年を迎える歴史と伝統のある学校です。

歴年JRCに加盟し、人のため郷土社会のために貢献できる人育てを目指し、教育目標「未来を拓く心豊かでたくましい人づくり」を掲げ、人権教育福祉教育、環境教育等を大事にしてきました。



活動のねらい

- 海外の小学生と、習った英語を使って同時双方向テレビ会議オンラインシステムにより国際文化交流を行い、グローバルな視野を広げ、互いを尊重する気持ちを育む。
- 自国の文化や歴史に触れたり、交流により学んだりしたことから、自信をもって更に伸びようとする気持ちや、将来への夢や希望を拓こうとする心情をはぐむ。
- 「気づき・考え・行動する」力を醸成し、社会に貢献できる人材育成に役立てる。

子どもの変容

海外の小学生とどんな出会いができるのだろうとの関心は高く、伝えたいことを話そうと積極的に取り組んだ。テーマを決め、交流が成功するように準備や練習を行い、本番では通じ合えたことに感動し、相手校の努力に温かい拍手を送る姿も見られた。文化交流を楽しみ、自分の力を発揮する貴重な体験をすることができた。「貴重な時間だったので大人になっても多分忘れないと思う。忘れたくない。」という感想を残した児童がいた。将来の自分に役立てようとする気持ちを醸成することができたと感じる。

今後の課題

交流した台湾の子どもたちが教えてくれた内容に興味を持ったり、発表のわかりやすさに気づいたりすることができ、違った環境に暮らす相手にわかるようにする手立てや、寄り添う気持ちの大切さなどが実感できた。海外文化交流の第一歩としてよい学習経験となった。中学校に進級する子どもたちが、今後、グローバルな課題に目を向けたり、平和について思考したりして自分との関わりの中で行動ができるとよいと思う。

活動内容

6年生英語科「My Best Memory」を発展的に単元構成し、「一番の思い出」に予測できるのは「修学旅行の思い出」である。11月に広島・宮島に修学旅行で学んだことや活動したことを丁寧に記録したり、12月に近隣校と交流した平和学習の内容を振り返ったりしながら、「私の一番の思い出」がしっかりと描けるようにして1月を迎えた。

交流の方法は、オンライン双方向会議システムを使って行う計画を立てた。相手は、台湾台中市瑞穂国民小児童26人である。外国語科、総合的な学習の時間（平和学習）を横断的に扱い、事前に交流相手校についても地理や学校規模等を知り、海外に目を向け、関心を高めた。交流のテーマは「台湾の友達にMy Best Memoryを伝えよう」と決め、相手意識を高めつつ、既習事項を基本において英語のスピーチができるよう取り組んだ。

文化の違いがあり、互いに初めて見聞きすることがあるので、特に見せて紹介することや感じたまま反応することに気を付け、相手意識を持つように心がけた。本番では、初めて体験するオンライン同時双方向交流を全員がやり遂げ、活動を楽しむことができた。

相手校からは、「学校紹介」と「My Best Memory」について同様にグループによるプレゼンテーションをしていただいた。互いに普段は英語を使っていない子どもたちなので、ゆっくり、はっきりと話すこと、何か発表の助けになるものを見せる（実演も含めて）こと等を守って、楽しくわかる異文化交流活動ができた。



【交流の内容】

市原小学校6年生16人による紹介内容

一番の思い出は、「修学旅行」。修学旅行でそれぞれが最も印象に残ったことを日本文化の紹介として伝えるように焦点化した。

- ①乗り物（バス、電車、新幹線、船を使って広島・宮島に行ったことを題材に）
- ②食べ物（広島での昼食お好み焼きを紹介、店員さんとふれ合った思い出等）
- ③広島平和記念公園原爆資料館を見学したこと（原爆の恐ろしさを感じたこと、戦争はしないこと、千羽鶴をささげて世界平和を祈念したこと）
- ④買い物（家族へのお土産をお小遣いで買った体験、友達と過ごした楽しい時間のこと）
- ⑤宿泊したホテルの思い出（おいしい夕食、カニグラタンの思い出。）
- ⑥世界遺産宮島（海に浮かぶ厳島神社の美しさやみんなで記念写真を撮ったこと。）
- ⑦宮島水族館の思い出（海の生き物の美しさ、飼育員の餌やりを見学した体験）

瑞穂国民小5年3組26人

- ①台湾の特別料理（オイスターオムレツの紹介、食べられるお店の場所）
- ②バブルミルクティーの作り方（日本に伝わったタピオカミルクティーの作り方実演）
- ③クイズ（絵隠しクイズ・誰でしょうクイズ（日本のアニメ登場）・これは何でしょうクイズ）
バイクウェイの紹介（約5キロメートル、長いトンネルや橋があって、景色がとてもいい場所であること）



担当の先生からひとこと

外国語がより身近になり、中学校進学を目前にして、目的をもって学ぶことの意義を感じたり、少し困難であってもあきらめずに学習に取り組む意欲を高めたりするきっかけとなった。

相手校は「地球温暖化」をテーマに学んでおり、本校SDGsの学習とも関係づけてグローバルな双方向学習にも期待ができる。



伊藤麻希子 先生

命を守る、唐崎の町を守る防災教育

～ めざせ! 唐崎防災リーダー!! ～

大津市立唐崎小学校

〒520-0002 大津市際川四丁目7-1
TEL.077-525-2375 FAX.077-525-3168

学校紹介

本校は全校児童888人、東に琵琶湖岸、西に比叡山を望む山麓の丘陵地として、自然豊かな地域に位置する学校です。

一方で、国道161号やJR湖西線も通っており、交通に便利な地域でもあり、京阪神からの転入者が多く住宅開発も盛んな地域です。



活動のねらい

唐崎小学校ではこれまで防犯学習として、地域や保護者の方とともに不審者からの被害にあわないよう、自分の身を自分で守ることを学んできました。しかし近年、台風や線状降水帯による集中豪雨、水害や土砂災害など想定外の自然災害が日本各地で頻発するようになってきました。今夏は唐崎の町でも土砂崩れや大雨の被害が出ました。本校でも自分や家族の命を守る学習の重要性から、2021年度より防災学習に取り組み始めました。

子どもの変容

知識としては知っている災害ではあるが、実際に課題をもって調べたり、命を守るために必要なことを考えたりすることを通して、身近なものである意識を高めることができました。自然の怖さを改めて感じるとともに、被害を少なくする減災の考え方や具体的な避難行動の仕方などを学ぶことの大切さに気付きました。また、学校での学習にとどまらず家庭や地域に働きかける姿も見られました。

今後の課題

「防災」をテーマに本格的に学習をしたのは本年度が初めてであったため、試行錯誤をしながらの取り組みでした。自分の命を守るために必要なことを子どもたちなりに学ぶことができました。しかし、子どもたちが実際に、また、将来において「唐崎の町を守る」ためには、調べ学習だけでなく、地域と連携したり地域へ実際に出かけたりするなど、地域から学ぶ取り組みがさらに必要であると感じました。

活動内容

今年度の防災学習は、「めざせ! 唐崎防災リーダー!!」というテーマで、大きく以下の3つの学習活動を中心に学習を進めました。

(1)「防災」について詳しく調べたいことを考えよう

学習の初めには、今夏、地域で起こった土砂災害を話題にあげ、防災についての関心を高めました。3年生で防火施設について学んだことや、5年生の理科で台風の被害について学んだこと、また、避難訓練を通して考えたことをもとに、「災害」について学習をしました。災害は火災や水害、地震、台風の被害などがあり、どの災害であっても自分の命は自分で守る「防災」が大切であることを知りました。

そして、「防災」をテーマに学習課題を立てました。
(具体的課題)

- 自然災害の怖さについて
- 防災グッズについて
- 減災について
- 避難行動について
- 避難所について
- 防災の呼びかけ など

(2)「めざせ! 防災リーダー!!」防災について調べよう

各自が立てた学習課題をもとに、調べ学習に取り組みました。今年度は1人1台のタブレットが貸与されていますので、インターネットを使ってテーマについて調べ学習を進めました。

災害はなぜ起こるのか、災害が起きたらどのような行動が必要なのか、災害の被害を防ぐために、被害を減らすためにどのような取り組みがなされてい



るのか、どのようなことができるのか、などを詳しく調べることができました。そして、調べたことをもとに、「自分たちに何ができるか」「唐崎の町から災害をなくすためには何ができるか」「唐崎の町で災害が起こったらどうしたらよいのか」ということを考えました。実際にポスターを作って地域に防災を呼びかけるグループや、防災倉庫を確認して避難所開設の仕方について考えるグループなどがありました。各家庭で防災バッグを準備したりその中身を確認したりする児童もありました。

最後に、自分たちが調べたことや考えたことを、また、実際に取り組んだことを、「サミット会議」と題して、5クラスを解体して他のクラスの児童に発表する学習を行いました。どの班も相談しながら、調べたり集めたりした情報を、iPadを使ってまとめ、分かりやすく発信することができました。

(3)「めざせ! 防災リーダー!! サミット会議」調べたことを発表しよう

「サミット会議」では、各グループで調べたこと・取り組んだことを、ほかのクラスの児童に発表しました。今回は、教室の大型テレビに映しながら発表する形で行いました。災害時の避難の方法や避難場所、防災倉庫の役割や防災バッグの中身などについて各グループが紹介をしました。このサミット会議には、市民センター長や自主防災組織の方々など地域の方々にも参観していただきました。



担当の先生からひとこと

- 学習後半に設定した火災を想定した避難訓練では、子どもたちの訓練に対する真剣な態度やスムーズな避難の仕方から、防災を自分事として捉えていることを実感した。
- 防災の専門家の話を聞いたりするなど、体験的な活動を設定していくことで、より防災を意識して行動できる子どもが育成できるのではないだろうか。



丹羽貞博 先生

自ら考え実践する防災教育

～ 防災ハンドブックから学ぶ ～

草津市立老上西小学校

〒525-0066 草津市矢橋町508-1
TEL.077-566-2401 FAX.077-566-1224

学校紹介

老上西小学校は全校児童728人、2015年度に新設された小学校である。木の素材を生かした温かみのある校舎のつくりとなっている。最新の防災機器が揃っている反面、木造部分が多くあるため、地震や火災の際には適切な避難が求められる。



活動のねらい

本校の学校教育目標は、「自立と共生の礎を培い、今と未来を豊かで創造的に生きる子どもの育成」である。JRCの態度目標でもある「気づき・考え・実行する」と重なる「自ら考えて実践する」ことを、非常時においても発揮できる子どもの育成を目指したい。避難訓練の事前に防災ハンドブックを活用して、あらかじめ校舎内の危険箇所を予想する。日常から非常時のことを考える大切さについても学んでほしい。

子どもの変容

子どもに行った事後アンケートから、「日本は地震が多い国なので、いつ災害が起こるか分からない。いつどこで起きても自分で身が守れるように日頃から考えていきたい」や、「揺れがおさまった時に周りの状況を見て判断して避難することが大切だと分かった」や「学校内で危険な場所について改めて考えることができた」など、日常から備えておくことの大切さや臨機応変に考えて行動することの大切さを学んだ児童が多かった。

今後の課題

避難訓練は、年間3回程度行われる。訓練の前後では、防災・減災についての意識は高いものになっているが、日々の生活の中でどうしても薄れていってしまう。そこで、毎年の訓練を継続して積み上げを行うことや、避難訓練だけでなく、学習や学校生活の中で自ら考えて行動する体験を多く積ませることが必要であると感じた。

活動内容

【火災を想定した避難訓練(1学期)】

前年度とは違った新しい教室になるため、新しい避難経路を覚えることを第一の目標として行う。また、避難した後に集合する際にも新しいメンバーでの集合となるため、いかにすばやく正確に避難できるかが求められる訓練である。訓練の事後学習では、適切な避難経路について確認した。今回の訓練では、基本的な避難経路の確認を目標に行ったが、実際は、避難経路が火災で危険になってしまうことも想定される。火災場所を考えた上で、より安全な避難経路がないか考えさせる学習も行った。コロナ禍ということで、子どもたちは常にマスクを着用している。例年であれば、煙を吸わないようにハンカチなどを口に当てるのがセオリーとしてあるが、「マスクがあるからハンカチは必要ないのでは?」や、「マスクとハンカチを併用した方がより煙を吸ってしまうリスクを減らすことができるのではないか?」など、新しい生活様式に応じた避難方法についても議論した。

【地震を想定した避難訓練(2学期)】

事前学習として防災ハンドブックを活用した地震時に教室内で危険な場所について考える学習を行った。ハンドブックの写真を見ながら危険箇所を考えるだけでなく、本校の教室の構造を考えてガラスが飛び散りそうな場所や、倒れてきそうな物、身を守るために適した場所や物について考える学習を行った。学級で自分の考えをディスカッションすることで、自分の考えに自信を持つことや新しい考えに出会うことができた。地域の消防士



から緊急地震速報を含む地震時のサイレンについてお話をうかがった。スマートフォンなどから緊急時に流れるサイレンや地域にある防災サイレンなど、身の回りに危険を知らせるサイレンがたくさんあることを学ぶことができた。緊急地震速報が流れた時には、すばやく身を守ることでできる場所(教室内では机の下が主となることが多い)に避難した。ただ身を隠すだけでなく、机の足をしっかり持って地震に耐えることや、余震に備えることも確認した。

【東日本大震災から学ぶ(3学期)】

本校では、毎月朝の学習の時間に「じんけんの日」という学習を行なっている。3月のじんけんの日では、東日本大震災での被害の様子を知るとともに、人々の苦労や悲しみ、差別について学んだ。東日本大震災が起こったのは、今から11年前ということで、当時の様子を知る児童は、少なくなっている。震災の写真を見せると、想像以上の被害に驚く児童が多かった。避難所での生活の様子を紹介すると、現在の生活と比べると不便さやもどかしさ、やるせなさを感じていた。ただ、避難所で活躍する子どもの姿に気づき、「自分たちにも何かができるのでは」と、考える児童もいた。「少しでも誰かのために行動したい。役に立ちたい」という思いを持つことができた。また、震災から生まれた差別についても考えた。本校では、人権学習に重きを置いている。困っている人を助けることや、差別を許さないことについて再確認した。



担当の先生からひとこと

避難訓練は小学校で毎年行なっていることで、学年が上がるにつれて避難するスピードや非常時の対処に関わる認知面は、向上している。ただ、それでも毎年訓練を行うのは、訓練は継続することでいざという時に効果を発揮し、また、日々変化する生活様式に柔軟に対応できる力をつけるためである。今後も、自ら考え実践する大切さを伝えていきたい。



南原正和 先生

自らが考え行動するための防災教育

～ 地域の一員として行動する子どもをめざして ～

日野町立桜谷小学校

〒529-1619 蒲生郡日野町佐久良37
TEL.0748-52-0338 FAX.0748-52-8713

学校紹介

本校は全校児童92人で、佐久良川沿いの豊かな自然に囲まれた地域が学区です。そのため、大雨や地震などの自然災害が起きた際には甚大な被害が予想されます。

そこで、数年前より地域の防災士さんと連携し、避難訓練とともに「防災教育」を行い、自ら考え行動できる児童の育成をめざしています。



活動のねらい

毎年様々なテーマで、発達段階等も考慮して計画的に避難訓練や防災訓練を実施することで、子どもたちが災害から身を守るため、そして地域の一員として何ができるかを学ぶことをねらいとしています。

万が一の災害に対し、落ち着いて行動する心構えや生命を守る行動の仕方、さらに地域の安全性について考え、自ら行動できる子どもたちを育成します。

子どもの変容

子どもたちの避難の仕方が、早さの点でも態度の点でもよくなってきている。継続は力なりという言葉が実感でき、教職員からだけでなく、地域の防災士さんから学ぶということも子どもたちにとっては大変価値のある活動であったと思われる。また、防災学習では、上学年がリーダーシップを取り、下学年に指示やアドバイスをしながら作成し、実際の災害時にも有効に活用できるものだと確認することができた。

今後の課題

「安全・迅速に児童を守るための避難訓練」と「非常時にどう行動するかを考える防災教育」をセットで行う。

また、一度きりの活動で終わらず、毎年継続して内容も発展的な内容にしていく必要を感じた。

活動内容

〈避難訓練〉

①火災想定：4月22日(木) 火事を想定した避難訓練。
目的は新学期を迎え、新しい教室からの避難経路を知る。さらに、避難するときの約束(おかしも)を守り、落ち着いて集合場所まで避難できるよう指導する。

②不審者侵入想定：10月12日(火) 不審者が侵入することを想定した避難訓練。どこから侵入し、どんな動きをするか予測できない不審者に対して、指導者の指示や放送に集中させ、冷静かつ敏速に行動し、安全に避難できるようにするとともに、指導者の危機管理意識を高め、非常時に対して、連携をとることを目的に行う。

③地震想定：11月30日(火) 地震を想定した避難訓練。
授業中に地震が発生したことを想定し、放送を静かに聞くこと、身を守る体制をとること、指示に従って避難することを目的に行う。その後防災士から、避難の様子で気づいたことや気を付けることの指導を受ける。

④地震想定：1月20日(木) 地震を想定した避難訓練。
休み時間に地震が起こったことを想定し、校舎内外どこにいても、身の安全を考え、放送をしっかりと聞き、約束を守って避難する訓練を行う。その後、防災士から、避難の様子で気づいたことや気を付けることの指導を受ける。



〈防災学習〉

③の訓練終了後、起震車体験活動を行うことで、地震の揺れの強さを仮想体験し、このような状況で身を守りながら避難することの大変さを実感し、災害避難に対する意識づけと、訓練の必要性を感じさせる。

④の訓練終了後、1～3年は、避難場所と避難所の違いや、家の近所の避難場所の確認をし、災害時にどんな行動をとればよいかを知り、その後、避難所で一人のスタッフとしてどんな行動をとればよいかを教わった。4～6年は体育館でたてわりグループごとにわかれて、避難所開設のためのプライベートスペースづくりを教わった。子どもであっても避難所のスタッフとして行動することの大切さを学んだ。

〈交通安全教室〉

5月18日(火) 児童に安全な歩行の仕方や自転車の安全な乗り方をしっかりと身につけさせ、交通ルールについての理解を深め、交通事故防止に努める態度を育てる。



担当の先生からひとこと

子どもたちの避難の仕方だけでなく、どう避難すればより安全かを考えて行動できる児童が増えてきていると感じる。これは、毎年防災士さんから防災学習を受けている成果だと感じる。継続は力なりという言葉が実感でき、学校教職員からだけでなく、身近におられる地域の防災士さんから学ぶということも子どもたちにとっては大変価値のあることだと思われる。



音羽克之 先生

防災デイキャンプ

～地域の一人としてできることを学ぶ～

東近江市立五個荘中学校

〒529-1422 東近江市五個荘小幡町227
TEL.0748-48-2451 FAX.0748-48-5919

学校紹介

本校のある東近江市五個荘地域は、古くから中山道の要所として栄え、近江商人として全国各地で活躍した人物を多く輩出した歴史と文化の街である。本校は青少年赤十字加盟校として、地震とかねてから全校挙げて地域清掃や福祉施設支援ボランティアなど、福祉教育、ボランティア活動に取り組んできた。さらに近年は、東日本大震災を機に、被災地支援の取り組みとともに、防災教育に力を入れ、地域と連携した取り組みも進めている。



活動のねらい

南海トラフ巨大地震が30年以内に起きる確率は70%～80%といわれ、私たちはいつどこで被災するかわからない。そのため、災害に直面したときに、生徒が社会の一員として主体的に活動できるよう実践的な学びが必要であると考え設定した。

- (1)非常災害時に地域の一員として活動できる技能を養う。
- (2)活動を通して防災意識を高め、「気づき、考え、実行する」力を育てる。

子どもの変容

自宅にある身近なものでも応急処置ができることを知って防災活動をもっと知りたいと思う生徒が増えた。

声かけやコミュニケーションの大切さを感じる生徒もいた。

実際にものを使って体験したり、作ったりすることで生徒にとって価値のある学習になったと考える。

今後の課題

今回の体験で学んだこと以外にも防災活動はたくさんあり、災害の緊急時に利用される避難所の運営に関することも学習していかなければならない。

この体験だけで終わらず、防災に関して継続して意識できるよう定期的な学習が必要だと感じた。

活動内容

全員でかまどベンチについての講習を受け、その後クラスごとに3つの実習をローテーションして行った。

- ①ハイゼックスについての説明を受けた後、地域の日赤奉仕団の方とともにハイゼックスにお米と水を計って入れた。ハイゼックス炊飯の準備作業を行った。
- ②家庭にあるサランラップ、買い物袋、新聞を使って骨折の応急処置と簡易スリッパの作製を行った。サランラップが包帯の代わりになったり、段ボールや新聞で腕を固定させたりできることも学んだ。
- ③動けない人を安全に運ぶ方法を学び、さらに長い棒と毛布を使っての担架運搬を全員が体験した。運ぶ人と担架に乗る人に分かれ、実際に運搬する活動を行った。毛布だけで運ぶこともできるが、みんなで協力しないとできないことを学んだ。

応急処置や担架の運搬などはその場にあるものでできることを知ることができた。



担当の先生からひとこと

近年地震など自然災害が増え、いざという時の備えとして正しい知識を身につけることが必要と考えた。また、被災したとき、自分たちにできることを考え、行動できる力が必要である。

今回、クラス単位で指導していただき、全員が実習することができ、たいへん効果的だった。生徒たちも興味深く、真剣に話を聞き、積極的に活動できていた。



岡野昌代 先生

滋賀県立八日市南高校地域支援活動部の活動

～ 東北ボランティア活動で学んだことを地域社会に活かす活動 ～

滋賀県立八日市南高等学校

〒527-0032 東近江市春日町1-15
TEL.0748-22-1513 FAX.0748-23-2151

学校紹介

本校は、動植物に関わる学習から食品加工・食品製造に関わる学習、そして、公園のデザインや材料に関わる学習から「6次産業化」をめざし、将来の職業人としての個々に必要となる「生きる力」の習得を目標にしています。

さらに、基礎学力の定着やプロジェクト学習を推進し、地域貢献活動やインターンシップなど体験学習に積極的に取り組むことで、社会で活躍できる良識のある人材の育成をめざします。



活動のねらい

2012年度から東北ボランティア活動をしてきました。その活動で被災地の方々、ボランティア活動をされてきた方々から学んだことは、「命の大切さ」「人と人の繋がり大切さ」「人と地域の繋がり大切さ」「防災教育・啓発活動の大切さ」でした。そして私たちは、その学んだこと・思いを地域社会に還元する活動をしていくことで、東日本大震災の教訓を活かしていこうと考え、地域社会への支援(貢献)活動を始めました。

子どもの変容

以前は問題行動等も多く、地域からの信頼も薄く、生徒達からは「どうせ八南(ようなん)だから」といった発言をよく聞きました。しかし、12年度からの東北ボランティア活動・地域支援活動がメディア(新聞・ケーブルTV等)で紹介していただけるようになり、地域の方々にも活動が知られるようになりました。そのことによって、地域の本校生に対する評価も良くなり、生徒の「自己肯定感」「自尊感情」の醸成に繋がりました。

今後の課題

高校生連絡協議会に参加し、県内の高校生とも年に数回活動の交流をしています。その協議会を活用して、活動の輪を広げていきたいと考えています。実際、「笑顔のプロジェクト」は本校を含めて5校で取り組みました。将来的には、もっとたくさんの高校生とも交流をし、多くの高校や高校生が地域との交流活動等に関わるコミュニティースクールのような活動につなげていければと考えています。

活動内容

1)東北ボランティア活動(20年度はコロナ禍のため中止しました)

12年度から岩手県・宮城県、17年度からは福島県でも活動をしています。今年度は9回目の岩手県・宮城県での活動をしました。

2)「復興支援2豊風」の活動

本校のある東近江市には「東近江大風」という国選択無形民俗文化財があります。その文化を東北ボランティア活動で交流した東北の高校生に知ってもらい、風の判じもん(漢字1文字と図柄で意味を表す)から東北の高校生の思いを地域の方々知ってもらう活動です。14年度から大風保存会の方々指指導していただいで実施しています。

3)「いいたて雪っ娘かぼちゃ栽培」の活動

福島県飯舘村で特産化を目指して、飯舘村出身の元農業高校の校長先生が30年以上かけて品種改良してきたかぼちゃで、11年の春から栽培を目指していましたが、福島第一原発事故により飯舘村で栽培ができなくなりました。そのことを12年度の東北ボランティア活動で知ったことから、本校で14年度から栽培を開始しました。収穫したカボチャは地域の和菓子店とコラボしてイベントで販売しています(コロナ禍で現在は販売はしていません)

4)「ボランティアの畑での無農薬野菜の栽培と子ども食堂の支援」の活動

農場の畑の一部をクラブの畑として使用し、学んでいる農業の技術で無農薬野菜を栽培し、子ども食堂へ支援する活動です。また、この野菜は子ども食堂を介して困っている方へも届けられています。



5)「止揚学園(重度の知的障害を持たれた方の施設)」での活動

今は交流ができない状況なので、新鮮な野菜を食べていただけるように施設内の畑へ向かい、夏野菜と冬野菜の野菜苗の定植をしています。

6)「募金活動(熱海土石流災害、子供の貧困対策)」

毎年のように発生する自然災害に対して、毎年1学期末に実施している活動で、今年は「熱海の土石流災害」の募金活動をしました。また、今年は滋賀県で「子供の貧困キャラバン」もあり、社会福祉協議会の方に子供の貧困問題に対するワークショップをしていただき、子供の貧困に対する募金活動もしました。

7)「笑顔のプロジェクト」活動

緊急事態宣言下でクラブ活動が制約される中、生徒が自宅で「笑顔になってねカード」をつくり、コロナ禍で寂しい思いをされている高齢者施設・障がい者施設に「笑顔になってねカード」を贈り、少しでも笑顔になっていただくための活動をしました。

8)防災レンジャー(防災の啓発活動)

滋賀県とFM滋賀が開催した防災イベントに生徒が参加したり、防災リーダー養成講座に参加し、防災に対する意識を高めることができました。そして、その知識を地域の子どものために、防災の啓発活動を実施しています。年の近い高校生が子供たちに受け入れやすい防災レンジャーに扮することで、楽しんで防災に対する興味と関心を引き出すことができる活動ができました。

9)学校周辺の通学路の清掃活動

毎月月末に学校周辺の通学路を清掃活動をしています。



担当の先生からひとこと

17年度の東北ボランティア活動で、岩手県大槌町の高橋住職に教えていただいたことがあります。それは「宝物」とは「他の人を大切に思う心をもって、他の人から大切に思われる生き方をすること」でした。

その言葉が心にすんと落ちて、私たちの活動はもこの「宝物」を探すことなんだと知りました。



田村 晃 先生

滋賀県青少年赤十字 新型コロナウイルス対策コンテスト実施報告

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、学校での日常生活が大きく変化しました。各教育現場においては、さまざまな感染予防対策が講じられていたことから、各校(園)での取り組み事例を募集し、応募内容を青少年赤十字加盟校(園)間で共有することで、感染予防に役立てていただくこと、当該事業を通して青少年赤十字活動への理解と関心を高めていただくことを目的に実施しました。ご応募いただいた学校の皆さま、ありがとうございました。

【実施結果】

- 募集期間 2021年5月17日(月)～12月28日(火)
- 応募数 11校
- 選考結果

受賞	活動タイトル	学校名
最優秀賞	・手洗いのうたプロジェクト	大津市立南郷小学校
優秀賞	・オンライン始業式 ・手洗いタイムは楽しく、確実にほか	草津市立老上中学校
優秀賞	・たっぷり距離をとってイルカ?	守山市立守山小学校
優秀賞	・青空音楽会 ・青空本ミート	甲賀市立小原小学校

【その他応募校】

- 学校名 湖南市立下田小学校
高島市立今津東小学校
甲賀市立綾野小学校
滋賀短期大学附属高等学校
日野町立桜谷小学校
湖南市立石部中学校
守山市立中洲こども園



滋賀県青少年赤十字
新型コロナウイルス対策コンテスト

新型コロナウイルス感染症の流行により、皆さんの日常生活が大きく変化しました。みなさんの学校では、どのような感染予防対策を行っていますか？

日本赤十字社滋賀県支部では、新型コロナウイルス対策のアイデアを募集します。みなさんの学校(園)で取り組んでいる感染予防に役立つアイデアをぜひご応募ください！

優秀アイデアには...

- 最優秀校(1校)
記念楯(賞状) + 副賞(5万円の図書カードNEXT)
- 優秀校(3校)
記念楯(賞状) + 副賞(3万円の図書カードNEXT)

募集期間 2021年5月17日(月)～8月31日(火)

対象 滋賀県青少年赤十字加盟校

応募方法 専用応募用紙に記載の上、日本赤十字社滋賀県支部へメールで提出
応募用紙のダウンロードは以下URLから可能です
日本赤十字社滋賀県支部
【URL】 <https://www.jrc.or.jp/chapter/shiga>

お問い合わせ 日本赤十字社滋賀県支部 総務課
〒520-0044 大津市京町4-3-38
TEL:077-522-6758
FAX:077-523-4502
MAIL:soumu@shiga.jrc.or.jp



大津市立南郷小学校

担当/奥山めぐみ 先生

〒520-0865 大津市南郷一丁目15-9 TEL.077-534-4091

取組内容

手洗いのうたプロジェクト

保健食育委員会では、全校児童の手洗いへの意識を高める活動をしています。

昨年度の活動では、全校児童(各クラス)から歌詞のキーワードを募集し、委員会児童が歌詞を仕上げました。元本校教員が作曲し、レコーディングを行い、本校オリジナルの「手洗いのうた」ができました。この「手洗いのうた」を、今年度も毎日長休みと昼休みの終わりに流しています。この歌を聞きながら、子どもたちは楽しく手を洗っています。

さらに今年は、手洗い動画とポスターを作成し、全校児童に手洗いを呼びかけています。

- 【活動の詳細】**
- 目的 全校児童が楽しく手洗いをできるようにするため
 - 活動規模 委員会活動
 - 費用面 特になし
 - 工夫したこと 全ての活動に児童の意見を取り入れ、主体的に取り組めるようにした。オリジナルソングを作る(卒業後も自分たちの歌が学校で流れる)ことは、活動のモチベーションを高めることが出来た。
 - その他 音楽の素養のある元本校教員の協力のおかげで、オリジナルソングを作ることができた。

【活動ポイント】

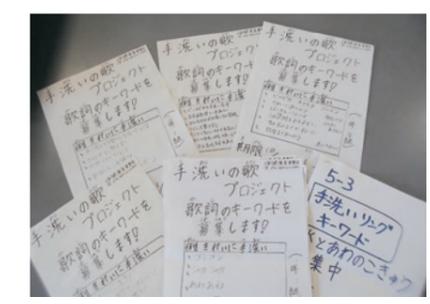
- 全校クラスから、歌詞のキーワードを募集し、集まった言葉を選んで歌詞に仕上げました。
- ウクレレの伴奏に合わせてレコーディング。親しみやすいメロディで、すぐに覚ええました。
- 出来上がったCDを、当番活動で休み時間に流し、手洗いを呼びかけます。
- iPadを使って動画を撮影。セリフや構成も自分たちで考えました。

作詞：南郷小学校のみんな 作曲：中嶋範郎先生
歌：南郷小学校 保健食育委員会

(あそんだあとは、手洗いの時間だよ)
(楽しい気持ちで) (手あらいをしよう)

1. あわあわ びかびか ばいきん みんなで ウイルス みんな	ごしごし つるつる つーるつーる ピカピカ なんかにや みんな	あわあわー これでよし すべてくー せいけつにー まけないぞ 手をあらおう	(これでよし) (これでよし) (せいけつに) (まけないぞ) (これでよし)
2. あわあわ びかびか もこもこ 手くびに ういす みんな あわあわ びかびか	ごしごし つるつる あわを つーめのあいだも なんかにや しっかり ごしごし つるつる	あわあわー これでよし 手にのせて わすれずに まけないぞ 手をあらおう あわあわー これでよし	(これでよし) (わすれずに) (まけないぞ) (これでよし)

(きれいになった手は) (ハンカチでふいて) 全員(これでよし)




優秀賞

草津市立老上中学校

担当／青木貴義 先生
〒525-0067 草津市矢橋町7-1 TEL.077-564-4394

取組内容

黙食でもみんなで食べるとおいしい

- 活動内容
班形態で食べず、全員正面を向いて昼食をとる。
- 目的
昼食時の飛沫を防ぐため、黙食、正面を向いての昼食指導
- 活動規模 全校
- 費用面 なし
- 工夫したこと
生徒会が昼食時にクイズや心理テスト、歴史、曲などを放送。会話がなくても楽しい時間になる工夫をしている。
- 効果
生徒会の放送により、正面を向きながらの昼食でも楽しい、ほっとする時間になった。生徒も楽しそうに放送をきいていた。



取組内容

コロナ終息を願う

- 活動内容
教室入り口にポスターを掲示。掲示板にはコロナ終息の願いを掲示。
- 目的 全校でコロナ終息に向けて願う
- 活動規模 全校
- 費用面 なし
- 工夫したこと
クラス掲示や階段掲示を行う。
- 効果
ひとりひとりが取り組めることを、みんなで行うことが対策・終息に繋がるという意識付けができた。掲示を見ることにより、早く終息させたいという思いを強くすることができた。




優秀賞

甲賀市立小原小学校

担当／辻本智子 先生
〒529-1836 甲賀市信楽町柞原899番地 TEL.0748-82-1077

取組内容

青空音楽会

- 校内音楽会を、中庭で開催しました。
- 目的
 - ・日頃の学習の成果を発表することにより、表現力を高める。
 - ・異学年等の友だちの発表を互いに鑑賞(観賞)し、その良さやすばらしさにふれ、これからの学校生活や学習活動に活かしていく。
- 活動規模 全校児童
- 工夫したこと
 - ・3密を避けるため、例年は多目的ホール内を会場としていたが、中庭にイスを並べて観客席とする。ステージは、ホール外の半円形階段。少人数のため、児童の間隔を十分とって、歌唱・リコーダーや鍵盤ハーモニカの演奏も可能。
 - ・観客は全校児童と保護者。児童と保護者を分け、観客席の間隔を十分とる。
 - ・毎日の健康把握を継続・マスク着用・手指消毒液の設置・参観者把握
- 効果
 - ・コロナだからとあきらめることなく、工夫することで音楽会を実施したことが、学校生活にうらおいをもたらした。目標をもち挑戦する、進んで努力を続ける、みんなでつながる、貴重な機会となった。
 - ・子どもたちは生き生きと活動でき、練習中に中庭から響く歌や音楽が、コロナ禍でなんとなく我慢を強いられてきた日々において、心の癒しとなった。



取組内容

青空本ミート

- 月1回、読書ボランティアの協力で設営する本紹介コーナー。さわやかな秋の日に、わくわく、うきうきする本と楽しい出会いをする「青空本ミート」を開催。
- 目的
おはなし、科学、歴史、生き物、手づくりの各ジャンルの本との楽しい出会いの場をつくることで、さわやかな気候の季節、読書に親しむきっかけをつくるとともに、コロナ禍でふさがちな心を癒す場とする。
- 活動規模 全校児童
- 開催日時 2020年10月15日 長休み・昼休み
- 協力体制 読書ボランティア「本の森」・学校司書
- 工夫したこと
 - ・いつもは校舎内のスペースに本ミートコーナーを設置していたが、中庭の大きなスペースに各コーナーを分散して設営し、3密を避ける。
 - ・心がわくわく、うきうきするような展示方法とする。 テント・キャンプ用のシート・オーナメント等
 - ・毎日の健康把握を継続・マスク着用・手指消毒液の設置
- 効果
 - ・ボランティアの工夫を凝らした手づくりでかわいいコーナーができあがり、歓声とともに子どもたちが集まった。
 - ・その場で本を手にとったり、たくさんの本を借りたりと、本との出会いができた。
 - ・何よりも、子どもたちの笑顔がたくさん見られ、昼休みに中庭でシート上に集まって読書に親しむ子どもたちもいた。がまんするばかりの生活でなく、心がうきうきする場はやっぱり必要だと強く感じた。




優秀賞

守山市立守山小学校

担当／遠藤一磨 先生
〒524-0041 守山市勝部1丁目13-1 TEL.077-582-2424

取組内容

たっぶり距離をとってイルカ?

- 児童がソーシャルディスタンスを意識し、身近ら気づき、考え、実行できるように、ブリやイルカの大きさを活用して掲示物を作り、運動会や水泳学習等で担当の児童が呼びかけたり掲示したりして、飛沫感染を防ぐ取組を行った。
- 目的
校内行事や水泳学習等の学校生活において、飛沫感染を防ぐために互いの距離をとる意識の向上を図り、児童同士が新型コロナウイルスに感染しない・させない気持ちを高め、JRCの実践目標「健康安全」の精神を高める。



取組内容

- 活動規模 全校
- 費用面 プラスチック段ボール、ペンキ代
- 工夫したこと
飛沫感染を防ぐための距離が具体的にどれくらいなのか児童がイメージしやすいように、ブリやイルカの体長を使って表現した。
また児童がソーシャルディスタンスを意識できるような言葉を添付し、啓発を図った。
- 活動主体
運動会の救護係の児童、保健委員会の児童など


優秀賞

湖南市立下田小学校

担当／川嶋稔彦 先生
〒520-3201 湖南市下田2784 TEL.0748-75-0004

取組内容

手洗い・うがいソーシャルディスタンス

- 手洗い・うがいを実施する時には、ソーシャルディスタンスを守って、行っています。子どもたちは、並んで順番を待ちます。
- 目的
床面に待機場所を示すことで、手洗い・うがいのソーシャルディスタンスを保つ。
- 活動規模 全校児童 全手洗い場
- 費用面 パウチシート代
- 工夫したこと
1年生児童にも見やすいようにひらがなで表記した。



取組内容

トレイで配膳・黙食で給食

- 配膳は、接触感染を防ぐために、各児童がトレイを持って配ってもらいます。給食を食べるときは、黙食です。
- 目的
接触感染を防止するために、一人一枚のトレイを準備している。
- 活動規模 全学級
- 費用面 トレイ代 110円×400枚=44,000円
- 工夫したこと
給食当番が各児童机に配膳せず、各児童がトレイに自分で乗せていくスタイルにした。また、トレイは、使用後に消毒を実施している。



湖南省立石部中学校

担当/谷口浩美 先生

〒520-3103 湖南省宝来坂四丁目3番1号 TEL.0748-77-3781

取組内容

合い言葉は「ソーシャルディスタンス」

本校はこれまで給食の時間は全校一斉にドリームホールに集まり、いただいていた。

しかし、学校生活の中で大勢が飲食をする給食時間は感染リスクが高いことから各教室で準備、飲食をするようにしました。密にならないため、準備は廊下で行い、飲食中は全員前を向いて会話は慎み、ビデオを鑑賞しながらいただいています。

また、図書館では貸し出し時に密にならないよう緑のテープを貼って距離をとり、受付はナイロンを貼っての貸し出しをしています。保健関係の内科検診や歯科検診などにおいても名簿順に並び際、緑のテープを貼って人との距離をとっています。

●目的

新型コロナウイルス感染症から身を守るために相手と身体的距離を確保すること

●活動規模 全校

●費用面 校内にあるものを利用

●工夫したこと

学校という場所は、どうしても密になりがちです。教職員、子ども達が様々なところで「意識」することが1番大切であり、常に朝の会や帰りの会、授業中にも教職員が声をかけ意識付けをしました。

給食や図書館利用、手洗いや歯磨きなどをする際にもルールを決め呼びかけていました。

●その他

学校での感染対策をさまざまな形で保護者や地域にアピールしていると、保護者から足踏み式消毒台やコロナ対策アクリル板などの寄付がありました。



甲賀市立綾野小学校

担当/古賀和幸 先生

〒528-0033 甲賀市水口町綾野3番6号 TEL.0748-62-1507

取組内容

心をひとつに～コロナに負けないぞ!!

「教室や廊下で、玄関で、職員室で、そしてプールでも…」

(1)感染予防衛生品の工夫

職員室で：会話時の飛沫防止手づくりパーテーション(透明農ポリと疑似竹支柱を活用・電話が対面とれるよう四角に切り取り)

玄関で：足踏み式手指消毒および検温モニターに設置
プールで：手作り木枠棚と100均ケースで児童個人のバスタオル個別収納+使うたびに教師がケース消毒

(2)基本的な感染対策(手洗い時等)での工夫

洗口場で：うがいや手洗い時の横の飛沫防止手づくりパーテーション(発泡資材でプラスチック段ボールを垂直に固定))
教室の出入り口に：手指消毒用アルコールを各教室出入り口に設置し、必要な時には随時自主的に消毒。

(3)学校行事(イベント等)における工夫

学習参観時に：管理職が昇降口に立ち、事前健康観察用紙(健康状態と体温記入)を全保護者から回収・保管。手指消毒を促す。用紙忘れの保護者はその場で実施。参観は2時間実施し、兄弟姉妹のことも考え、時間ごとに半数になるように地区別に設定。

(4)日常の活動(学校内における活動すべて)での工夫

BTSのテンポの良い曲「ダイナマイト」をBGMに児童の声による換気の呼びかけを1時間ごとに放送。始め「換気の時間になりました。窓を全開にして空気をきれいにしましょう。」→終わり「きれいになりましたか。これからも続けていけるように頑張りますよ。」

(5)その他

プールでのシャワーの際の密と一度に大人数ができるよう手作りシャワー(散水レバーとホース活用)増設。

●目的

全校児童は元より、先生方も、心をひとつに「つながり」合って、新型コロナウイルスに感染しないようあらゆる場面で取組を進める。 ※「つながり」は本の今年度の学校経営のキーワード

●活動規模 全校(児童・教職員)

●費用面

昨年度、今年度と甲賀市でつけていただいている「コロナ対策」予算も有効に活用。学校に既にあるものや廃材等も活用。

●工夫したこと

できるだけ安価に教職員のアイデアで費用対効果が見込める「手づくりの取組」を実施する。児童からの発信(呼びかけ)も含め、取組に対する学校全体の士気の高揚を図る。



高島市立今津東小学校

担当/北村優衣 先生

〒520-1611 高島市今津町弘川59 TEL.0740-22-2021

取組内容

手洗いで感染症を予防しよう!

各水道や掲示板には手洗いの掲示をして、手洗いを呼び掛けています。また、手洗いの時間には音楽を流して、忘れず手洗いができるように工夫しています。

保健委員会では、手洗い動画を作成したり、学期に1度の手洗いチェックを行ったりしています。また、企画代表委員会が手洗いのときに距離が取れるように足元の掲示をしたり、放送委員会が手洗いの呼びかけ放送をしたり、美化委員会が手洗い場の清掃をしたりと、委員会活動で高学年が中心になって積極的に取組を進めています。

●目的

全校で基本的な感染症対策 手洗いの取組を行い、感染症の予防をする

●活動規模 全校

●工夫したこと

- 今津東小学校では、コロナ禍の新しい生活様式(①マスクをうまくつかう ②学校では手洗いを4回以上する ③となりの人との距離をとる ④休み時間には換気をする)

を守って生活するよう指導しています。全校で取り組みやすい、感染症対策の基本である「手洗い」を特に意識させ、指導しました。

- 掲示や放送、委員会の活動などで手洗いを進んでできるような環境を作り、子どもたちが主体的に感染症予防に取り組みるように工夫しました。
- 委員会活動では、子どもたちが積極的に意見やアイデア出し合い、自分たちができる感染症対策を行いました。
- 保健委員会では、手洗いチェック週間の取組を行いました。毎日4回の手洗いができているかチェック表に記録をつけ、各クラスの結果を集計し、優秀なクラスには賞状とメダルを渡しました。子どもたち同士で声をかけ合うなど、手洗いへの意識が高まりました。
- 日々状況が変わり、活動や行事が制限されることもありますが、その度に子どもも大人も色々なアイデアを出し合いながら、学校生活を送っています。



滋賀短期大学附属高等学校

担当/山本怜奈 先生

〒520 0052 大津市朝日が丘1-18-1 TEL.077-522-3465

取組内容

校内に一つだけのごみ箱

各教室に設置していたごみ箱を撤去し食堂前1か所だけに統一しました。

また、ごみの分別をし、ペットボトルも感染症対策のために洗浄した後、キャップ・ラベル・本体に分け、キャップはエコキャップ推進活動をしている企業に送っています。

●目的

- 新型コロナウイルス感染症予防のために、自分が出したごみは自分で処分するという意識づけをする。
- ごみの分別を学び、環境問題について考える。
- 分別の際に出たペットボトルキャップでエコキャップ推進運動をしている。企業に送ることで、世界の子供たちにワクチンを贈る活動に貢献する。

●活動規模 学校全体(全学年・教職員)

●費用面

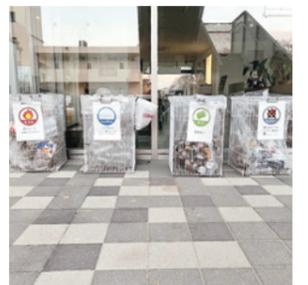
ペットボトルキャップの郵送料(委員会活動の一部として行っているため、生徒会会計より捻出)

●工夫したこと

始めた当初はペットボトルを洗うことが習慣化 されておらず、洗う生徒が少なかった。そのため教員が下校 指導の際に声掛けをした。

すると、今では教員が何も言わなくても分別・洗浄し、ペットボトルを捨てるようになった。

また、生徒の感染症対策のためごみ捨ては すべて 教員で行った。



守山市立中洲こども園 担当/坂田仁美 先生

〒524-0215 滋賀県守山市幸津川町1406番地 TEL.077-585-2454

取組内容

ピカピカマスクで げんきいっぱい

幼児一人一人がマスクケース(透明・プラスチック製・蓋つき)に、使用済のマスクを自ら始末し、清潔なマスクと区別することで、コロナ感染症予防をする。

- 目的 幼児のマスク着脱における感染予防や衛生指導の工夫
- 活動規模 マスクを着用している3・4・5歳児
- 費用面 一人50円程度



●工夫したこと

幼児が毎日、飛沫感染予防のために身につけているマスクは、園生活で汚れたり、遊びや活動の内容に応じて脱着したりする。マスクの始末指導について、職員間で話し合いを重ねる中、幼児自らが扱いやすく、不快感に気付いて始末するために、ケースを取り入れることにした。

ケースは、毎日、家庭に持ち帰り洗浄・消毒をして繰り返し使う。幼児には、自らマスクの汚れに気付いてケースに始末するように指導し、マスク着用の必要性と自立した生活の育ちにつなげる工夫をした。

●活動主体 幼児とその保護者



日野町立桜谷小学校 担当/北崎あゆみ 先生

〒529-1619 蒲生郡日野町佐久良37 TEL.0748-52-0338

取組内容

飛沫防止シールドづくり ~地域や職員の専門性を生かして~

①図書室に設置した飛沫防止シールド(2020年度)

6年生が地域の方の指導で飛沫防止シールドを製作。出来上がったシールドは図書室に設置。持ち運びができるため、他の教室でも使用可能。

- 目的 図書室使用时(持ち運びができるため他教室でも使用)の飛沫防止。
- 配慮、工夫したこと コロナ禍において、机を対面で利用するときになくはならないものであった。地域の方だけで製作していただくことも可能であったが、児童が人との関わりの中で役に立つ喜びを実感できるように、児童と一緒に製作するようにした。
- 費用面 塩ビ板(3mm)30,459円、角材7,920円、紙やすり152円(180cm×90cmの机6台分)
- その他 地域の学校応援団「HOTけん桜谷隊」の指導で実施。大きさやシールドの厚み(1mm厚になると費用が大幅に高くなるため、丈夫でしかも少しでも安価なものを吟味)等、試作を重ねてくださる。

②給食時の担任機の飛沫防止シールド(21年度)

給食時、教室の担任機に設置する、用務員手作りの飛沫防止シールド。使用しないときは、逆さまにして片付けることができる。

- 目的 給食時の飛沫防止(給食時は、マスクを外した状態で担任と児童が対面になる。黙食をしているが、給食時であっても会話が必要な場面があるため、シールドを設置)
- 費用面 教師机1台あたり726円(6mm鉄棒3m396円、ポリ袋40円、金具200円、ホース90円) 安価でできるよう、用務員がホームセンターで材料を購入して製作)
- 工夫したこと (イ)報道で彦根工業高校が鉄の棒とポリ袋でシールドを作っておられることを知り、用務員が応用。彦根工業高校ではシールドに脚を付けて机に置く形のものをつくっておられたが、小学校では倒れる可能性があるため、金具で机の前側にはめ込むようにする。机が傷つかないように、先にホースを付ける。
- (イ)給食時以外は、邪魔にならないよう、シールドを逆さまにすると片付けることができる。



青少年赤十字 (Junior Red Cross) とは

はじめに

子どもたちの「気づき」をきっかけに

第一次世界大戦のとき、カナダ、アメリカ、オーストラリア、イタリアの学校の生徒と先生は、戦争で苦しむヨーロッパの人々をなぐさめ励ますため、手紙や包帯、被服、慰問品などを赤十字を通じて届けました。

これがきっかけとなり、青少年赤十字(JRC)が誕生しました。

人道的な価値観を世界の子どもたちへ

赤十字の精神に基づき、世界の平和と人類の福祉に貢献できる人間に成長してほしいという願いから、赤十字社連盟(現在の国際赤十字・赤新月社連盟)は青少年赤十字を創設することを決めました。

日本の青少年赤十字は、1922年に守山尋常高等小学校(現在の守山市立守山小学校)で「少年赤十字」として誕生しました。JRCはそれから脈々と活動を続け、2022年に100周年を迎えました。

JRCが大切にしていること



JRCの加盟・活用のメリット

赤十字を教材に、「生きる力」を育てる

JRCの活動は、子どもたちの思考力(気づき)・判断力(考え)・表現力(実行する)を養うとともに、コミュニケーション能力や言語活動の充実を期待できます。



赤十字には、人間の命と健康、尊厳を守るために世界中で活動する中で得た経験やネットワークなどがあります。赤十字そのものを「教材」として、活用することができます。

青少年赤十字のあゆみ

年号 (和暦)	滋賀県内のあゆみ	国内のあゆみ	世界と日本の動き
1877年 (明治10)		5月 博愛社設立の願書を提出、許可を得る。	2月 西南戦争はじまる
1886年 (明治19)		11月 ジュネーブ条約加盟について政府から博愛社あて通知	6月 日本政府、ジュネーブ条約に加盟
1887年 (明治20)		5月 博愛社を日本赤十字社と改称	1月 東京に電灯がつく
1889年 (明治22)	10月 県庁内に日本赤十字社滋賀県委員会が設置される。委員長中井弘		2月 大日本帝国憲法公布
1893年 (明治26)	6月 県内各都市に委員会が置かれる		
1895年 (明治28)	4月 日本赤十字社滋賀支部設置。支部長大越亨。日本赤十字社滋賀支部の設立元年		4月 下関講和条約が結ばれる
1901年 (明治34)			12月 アンリー・デュナンの第1回ノーベル平和賞を受賞
1904年 (明治37)			2月 日露戦争(～'05)
1914年 (大正3)			7月 第一次世界大戦(～'18)
1920年 (大正9)			1月 国際連盟設立 3月 第1回赤十字社連盟総会で「すべての赤十字社は赤十字事業のためにその国の少年を養成すべし」という決議を採択
1921年 (大正10)		5月 日赤本社に調査部を設置。同部の所管事項に少年赤十字の一項を加える 10月 本社全国主事会議。少年赤十字の趣旨を説明し、満場一致の同意を得る	
1922年 (大正11)	5月 野洲郡守山尋常高等小学校(現在の守山小学校)で日本最初の少年赤十字を結成 6月 支部が少年赤十字の実施に関する要項を都市委員長に通知 6月 地域連合としての日本最初の少年赤十字団が伊香郡12か町村の小学校児童1,900余人で組織 10月 伊香郡内16個団体1,900余人による連合発会式を木之本町において挙行。年内に支部少年赤十字団が227団、45,680人となる 10月 支部が少年赤十字団員に対する善行表彰を実施	5月 本社が少年赤十字実施方案制定 5月 「日本赤十字社少年赤十字の実施に関する件」が各支部に通知される	3月 赤十字社連盟第2回総会(ジュネーブ)で少年赤十字の内容決議(青少年赤十字の誕生) 12月 ソビエト社会主義共和国連邦が成立
1923年 (大正12)	5月 「団員に救急処置をなす傍ら救急法を習熟せしむる目的」をもって、支部特製の救急箱を製作し、県内全227団に配備 9月 関東大震災で少年赤十字団が義入金4,700円、教科書44,159点ほか衣類等の慰問品を本社を通じて贈る 10月 少年赤十字の団旗授与式を県公会堂にて挙行。団員総代229人が出席。これを受けて野洲郡や伊香郡で団旗樹立式を開催 この頃、野洲郡連合赤十字団が、イギリス、フランス、アメリカの各少年赤十字と通信交換。外国児童との通信交換の嚆矢	1月 本社が少年赤十字歌の歌詞を一般公募	9月 関東大震災
1925年 (大正14)		7月 赤十字社連盟主催の第一回国際教育家会議(パリ)に本社から野田義夫氏を囑託委員として派遣	
1926年 (大正15～昭和元年)	7月 支部が少年赤十字教範と実行プログラムを編成。都市の視学及び小学校長等を編集委員に委嘱し制定。全国の模範となる 8月 少年赤十字標語を募集。審査の結果「世界の平和は我等の手より」に決定		12月 昭和と改元
1927年 (昭和2)	3月 京都府丹後地方震災(北丹震災)で少年赤十字団が慰問金を贈る 5月 栗太郎少年赤十字団が連合総会並びに運動会を開催	11月 少年赤十字善行章程を制定	3月 金融恐慌 3月 南京事件
1928年 (昭和3)	3月 少年赤十字善行章の第1回本社表彰で神崎郡八日市少年赤十字団員(尋常科4年)が受賞 この年、御大典記念事業として支部が各少年赤十字団に桐笛2,197本を配布。各団はこれを栽培	7月 第1回少年赤十字補導者講習会	2月 日本初の普通選挙権実施
1929年 (昭和4)		7月 第4回国際教育家会議(ジュネーブ)に本社から林博太郎氏を派遣	10月 世界恐慌
1930年 (昭和5)	4月 第1回優良団表彰で蒲生郡日野少年赤十字団が本社表彰を授与される		1月 ロンドン軍縮会議
1931年 (昭和6)	10月 支部が優良少年赤十字団表彰用小旗「リボン」を調製		9月 満州事変
1932年 (昭和7)	この年の秋、愛知郡、犬上郡の少年赤十字団が連合総会並びに運動会を開催		1月 上海事変 5月 一五事件
1933年 (昭和8)	6月 日本赤十字社滋賀支部誌を発行。少年赤十字の沿革や事業内容が紹介される	11月 「赤十字デー」(11月15日、1950年からは5月8日)を制定	3月 日本が国際連盟脱退
1934年 (昭和9)		10月 第15回赤十字国際会議が日本で開かれ、少年赤十字の範囲を中等学校、青年学校等に拡大することを決議	1月 ドイツ・ポーランド不可侵条約締結
1935年 (昭和10)	9月 日赤本社少年赤十字課長手塚義明氏を招き、支部主催の「県下校長会議並びに講演会」を大津市で開催 12月 ブタベスト市ハンガリー少年赤十字主催の国際人形展覧会に大津市の少年赤十字団が出品。「藤娘」「汐浪」が好評を博す この年、青森、秋田地方水害で少年赤十字団が慰問金を贈る	2月 フランス少年赤十字主催「世界人形展覧会」に日本から8団が参加 12月 ハンガリー少年赤十字主催「国際人形展覧会」に日本から9団が参加	3月 ヒトラーがヴェルサイユ条約を破棄し、ナチス・ドイツの再軍備を宣言
1936年 (昭和11)	3月 10年度末に県内全ての小学校が加盟。222団、90,566人(男46,706人、女43,860人)		2月 ニ・二六事件
1937年 (昭和12)		7月 本社主催の東洋少年赤十字会議にフィリピン、インド、シヤムなどから38人が参加	7月 盧溝橋事件が発端となり日本と中華民国間に日中戦争が起こる
1938年 (昭和13)	12月 水口小学校で甲賀郡内少年赤十字団農産加工品・工夫作品展を開催	5月 少年赤十字団員の資金3万6,876円87銭で患者輸送機を献納	4月 国家総動員法が制定される
1939年 (昭和14)	1月 少年赤十字団特行団員として本社より金田少年赤十字団員及び朝日少年赤十字団員が第一次表彰に決定。また、柏原少年赤十字団員が第二次表彰に決定 5月 戦禍を受けて困っている中国・モンゴルの子供たちに少年赤十字団が学用品や手紙などを送る 11月 支部においてジュネーブ条約75周年式典を開催	11月 ジュネーブ条約成立75周年記念式典を本社で開催	5月 ノモンハン事件 9月 第2次世界大戦が始まる
1940年 (昭和15)		9月 青年赤十字団歌を公募 10月 「赤十字読本」の読後感想文を募集	9月 日独伊三国同盟
1941年 (昭和16)	この年、本社が実施した「赤十字読本」読後感想文募集で、滋賀の団員が甲種入選となる	9月 「青少年赤十字表彰規程」を制定。「特行章」を設ける	12月 太平洋戦争が起こる
1946年 (昭和21)		6月 「青少年赤十字事業振興に関する件」を各支部に通知。	11月 日本国憲法公布

年号 (和暦)	滋賀県内のあゆみ	国内のあゆみ	世界と日本の動き
1947年 (昭和22)	4月 学制改革(6・3・3制)の実施に伴い青少年赤十字もこの線に沿って、加盟促進啓発を開始 7月 赤十字平和まつりと全国児童福祉週間の取り組みで、こども赤十字の標語・ポスター展の支部長表彰を実施		3月 アメリカ赤十字社からオードレイ・H・バセット女史が、本社青少年赤十字課の専属顧問として着任 5月 こども赤十字の歌「空は世界へ」が発表される
1947年 (昭和22)			この年、アメリカ赤十字社からギフトボックス5万個とスクール・チェスト50万組が寄贈される また、現在の青少年赤十字マークがこの年から使用される
1948年 (昭和23)	5月 大津市中央小学校が県内で戦後初めて青少年赤十字を結成 6月 北陸震災義援金品募集を県内学校の少年赤十字団員によって依頼。義援金116,220円、見舞品5,461点		2月 機関誌「青少年赤十字」を復刊 6月 青少年赤十字の手引草案を作成。青少年赤十字が新制度で再出発 7月 本社主催の第1回トレーニング・センター開催
1949年 (昭和24)	5月 青少年赤十字交歓会を附属中学校と奈良伏見中学校との間で開催 5月 青少年赤十字団員の第1回全国大会に支部から5人参加 11月 滋賀県青少年赤十字団協議会(その後、「補導者協議会」と改称)を設置(役員24人)。以後、毎年「定期総会」を会場を変えて開催 12月 蒲生郡玉緒小学校で奈良女子大学附属小学校の今井鑑三氏の講演会と青少年赤十字研究発表会を実施。参加者120人		5月 青少年赤十字団第1回全国大会
1950年 (昭和25)	1月 米国赤十字社ギフトボックスが支部に到着。県内養護児童施設と加盟校に配布 2月 野洲郡吉身小学校に米国赤十字社極東本部安全副部長ゼームス・H・ストローク氏を迎え、ギフトボックスの伝達と研究発表、青少年赤十字団員大会を開催。参加者140人 8月 大津市雄琴小学校で青少年赤十字の第1回トレーニング・センター(2泊3日)を開催。参加者140人。以後、支部の泊を伴うトレーニング・センターが会場や対象校種を変えながら定着することになる 11月 国連海軍病院を坂田郡鳥居本小学校の団員40人が慰問 この年、ジェーン台風他1件に対し、義援金、見舞品を取り扱う		11月 「青少年赤十字全国団員協議会」開催。以後、概ね2年ごとに開催
1951年 (昭和26)	5月 滋賀県青少年赤十字(JRC)補導者協議会会則を施行 5月 青少年赤十字滋賀県大会を大津市の付属小学校及び彦根市の城東小学校で本社橋本祐子女史を迎え2日間にわたり開催 9月 野洲郡北里小学校で奈良女子大学付属小学校池内房吉先生を迎え、青少年赤十字研究発表大会を開催。参加者120人		2月 青少年赤十字支部職員講習会 4月 全国補導者協議会が結成される 11月 高校青少年赤十字の初めての全国大会が開催される
1952年 (昭和27)	12月 第1回滋賀県青少年赤十字補導者講習会を大津市石山鉄道職員宿舎で開催(2泊3日)。参加者60人。以後、支部主催の補導者講習がほぼ毎年開催される。この年鳥取市火災に伴い、義援金、見舞品を取り扱う		8月 国際トレーニング・センター・アジア親善キャンプ
1953年 (昭和28)	2月 「滋賀県JRC高校生連絡協議会」が支部で開催され、高校団員18人、補導者8人が出席。各校の活動状況の発表等が行われる(高校団員連絡協議会に関する支部の最も古い記録)。以後も支部会議室でJRC活動の情報交換、アルバム作成、機関紙発行などの活動を実施。平成13年まで続く 8月 青少年赤十字トレーニング・センターを都市別単位で開催。参加者延べ328人。以後、都市単位のトレーニング・センターが定着する この年、台風13号災害に伴い、見舞品7,500点を取り扱う。また、米国、カナダ、オランダ、南アフリカ等との学校通信やアルバム交換に参加		2月 NHKが日本で初のテレビジョン本放送を開始 12月 奄美諸島が日本に返還
1954年 (昭和29)	7月 打出中学校、瀬田工業高校火災、他2件について、義援金、見舞品を取り扱う 11月 近畿7府県支部連合社員大会並びに御親様式が滋賀会館で開催された際、名誉総裁皇后陛下が中央小学校での青少年赤十字大会を挙行御挨拶 11月 愛知郡湖東中学校で青少年赤十字研究会を本社橋本祐子女史を招いて開催		8月 在日アメリカン・スクールの青少年団員との日米トレーニング・センターが開催される 11月 「青少年赤十字の歌」を制定し、全国青少年赤十字大会で発表
1955年 (昭和30)	11月 滋賀県青少年赤十字研究発表会・JRC研究懇談会を東浅井郡竹生小学校で本社橋本祐子女史を招いて開催。参加者73人		8月 アメリカ赤十字社極東本部主催の国際トレーニング・センター開催 11月 全国補導者協議会で青少年赤十字の発展方策を協議
1956年 (昭和31)	5月 滋賀県青少年赤十字第8回定期総会並びに代表団員大会を大津市中央小学校で開催。新規に制定した団旗を135校に授与。参加者480人 11月 野洲郡吉身小学校で郡小・中学校JRC研究協議会並びに講演会を開催し、本社橋本祐子女史を講師に招く この年、北海道冷害凶作地見舞いなどに義援金、見舞品を取り扱う		5月 トレーニング・センター指導者養成講習会始まる 12月 日ソ共同宣言 12月 日本が国際連合に加盟
1957年 (昭和32)	10月 名誉副総裁秩父宮妃殿下のご臨席を仰ぎ、青少年赤十字10周年記念滋賀県大会を大津市中央小学校で開催。参加者760人 11月 研究発表会を長浜北小学校で開催 この年、西九州水害見舞いとして義援金、見舞品を取り扱う		1月 日本南極越冬隊が南極大陸初上陸 10月 ソ連が人工衛星スプートニク1号の打ち上げに成功
1958年 (昭和33)	8月 在日アメリカンスクールより、僻地加盟校(中河内小・中学校他1校)にギフトボックスが送られる 10月 外国少年赤十字(ニューギニア、カナダ、フィリピン他3カ国)と支部加盟校との間で機関紙を交換 11月 青少年赤十字国際絵画展に参加		7月 全国補導者協議会で団員倍加運動や年度計画の推進等を協議
1959年 (昭和34)	6月 赤十字思想誕生100周年記念青少年赤十字滋賀県大会を大津市中央小学校で開催。新作「あこがれの赤十字」を歌唱発表 11月 伊勢湾台風災害に際し、義援金と救援物資を取り扱う		1月 「日本青少年赤十字活動資金設定の件」を各支部長あて通知 5月 赤十字奉仕団、青少年赤十字会同大会
1960年 (昭和35)	2月 アルジェリア人難民児童へのJRC世界的救済活動として、国際赤十字社連盟の要請に応じて本社を通じて3,000円を送る 4月 沖繩・宮古島台風被災者への慰問救援として蒲生郡朝桜中学校JRCより10,000円が贈られる		1月 新安保条約(日米相互協力及び安全保障条約)が調印される 5月 チリ地震。翌日、日本でも津波の被害 9月 日本でカラーテレビの本放送スタート
1961年 (昭和36)	8月 青少年赤十字沖繩親善トレーニング・センター交歓会に日本代表団員として高島高校の団員が派遣される 第1回青少年赤十字近畿ブロック補導者研修会が開催される。以後、平成23年を除き2府4県支部が持ち回りで毎年開催。また、ブロック補導者協議会も研修の当番支部で開催されることになる		8月 沖繩赤十字主催のトレーニング・センターに日本代表が派遣される 9月 全国補導者協議会で文部省初等中等教育局長等への要請書を取りまとめる
1962年 (昭和37)	12月 青少年赤十字発祥40周年記念滋賀大会を野洲郡守山小学校で名誉副総裁秩父宮妃殿下をお迎えして開催 12月 「滋賀県青少年赤十字のあゆみ」を日本赤十字社滋賀県支部と滋賀県青少年赤十字補導者協議会が発行		5月 指導主事対象青少年赤十字研究会が初めて開催される 6月 北陸本線北陸トンネル開通 7月 堀江謙一小型ヨットで太平洋単独横断
1963年 (昭和38)			9月 赤十字社連盟主催の世界教育者会議(ローザンヌ)に橋本祐子本社青少年課長が出席
1964年 (昭和39)	5月 第16回青少年赤十字補導者協議会総会を五個荘中学校で開催。文部省(現文部科学省)、ユネスコ国内委員会による「国際理解教育の必要とその指導」を講演		9月 日本青少年赤十字賛助会が発足
1967年 (昭和42)	6月 第7回近畿ブロック青少年赤十字補導者研修会を大津市坂西西教会で開催。講師に橋本祐子本社青少年課長を迎える。支部から8人参加 8月 世界青少年赤十字JRCスタディセンターに八幡工業、瀬田工業、甲賀高校から各1人参加 この年、第28回赤十字社連盟理事会での決議を受け、ネパール等の新興国を対象に本社を通じ文具品、日用品8,997点を加盟校24校より寄贈		1月 文部省から「公立義務教育諸学校が、青少年赤十字に加盟、指導することは、さしつかえない」との公文が出される 6月 第3次中東戦争 6月 欧州共同体(EU)発足 6月 東南アジア諸国連合(ASEAN)結成

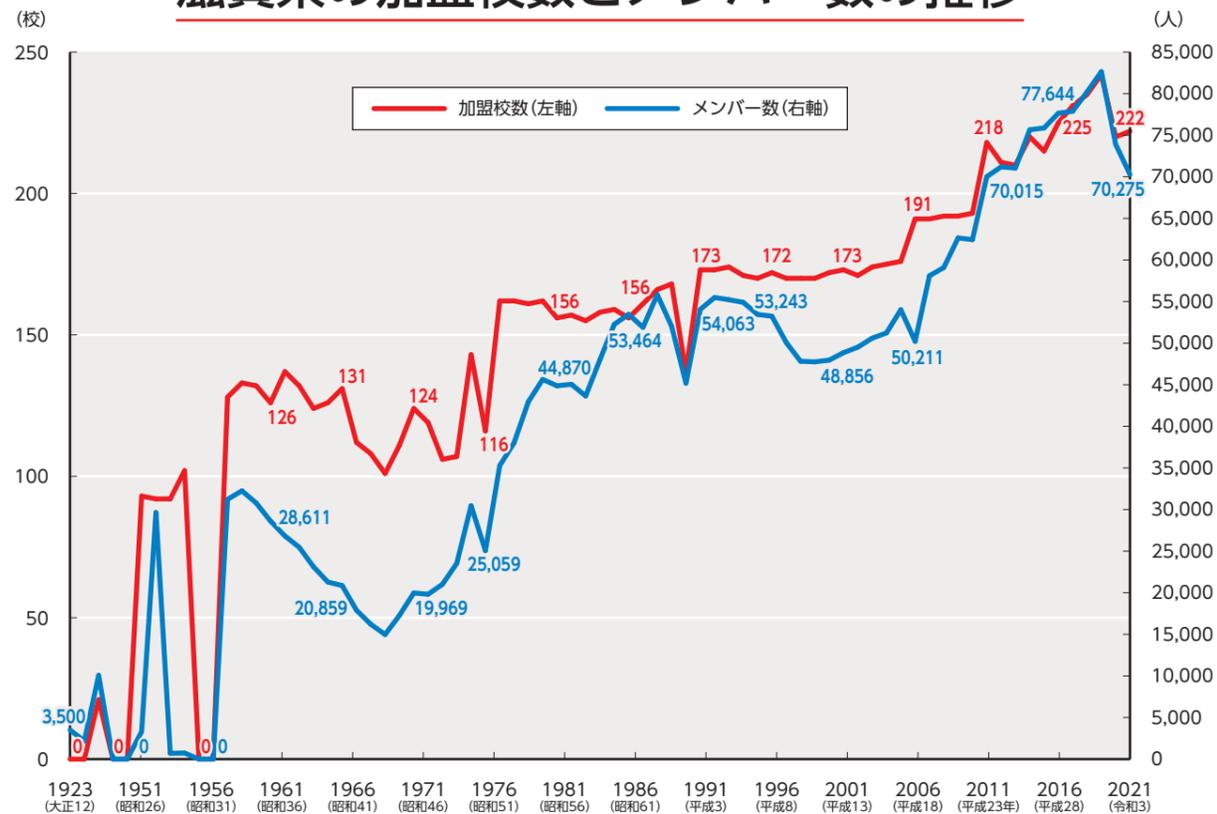
青少年赤十字のあゆみ

年号(和暦)	滋賀県内のあゆみ	国内のあゆみ	世界と日本の動き
1967年(昭和42)	また、ネパールの児童を対象に結核予防対策に必要なBCG獲得運動として「古切手集め」を高校団員が実施し、第1回分として30,631枚を本社に送る 12月 水口町伴小学校在講堂及び校舎の一部を焼失。「JRC愛の活動資金」を募集し、加盟校から寄せられた資金をもとに見舞金と運動用具を寄贈	5月 日本赤十字社創立90周年記念式典を日比谷公会堂で開催	
1968年(昭和43)	3月 大津市膳所小学校で火災発生。「JRC愛の活動資金」を募集。取り急ぎ、保管資金から見舞金10,000円を贈る この年、ネパール児童対象結核予防対策BCG獲得運動で高校団員が「古切手集め」を実施。第2回分として57,175枚を本社を通じて贈る また、JRC指導者協議会が美化思想の普及を目的にプラスチック製護美箱(ポリダスター)を各加盟校に配置することになり、第1回分として30個を確保	6月 小笠原諸島の日本復帰 10月 川端康成がノーベル文学賞受賞	
1969年(昭和44)	6月 前年の膳所小学校火災に対して加盟校から募集した136,139円を学校に贈る 12月 支部が初めて高校団員の1日トレーニング・センターを大津商業高校で開催。参加者30人。翌年から春季トレーニング・センターとして開催される		12月 アポロ11号が人類初の月面有人着陸を果たす
1970年(昭和45)	5月 高校メンバーの春季トレーニングセンター始まる(草津高校)。参加者85人。平成12年まで会場を変えて継続する 7月 滋賀県青少年赤十字(JRC)指導者協議会規約を制定、施行 12月 高校団員の第1回JRC大会が大津商業高校で開催。85人が参加	7月 本社と赤十字社連盟の共催で「こんにちは70」-東南アジア・太平洋地域青少年赤十字国際セミナーが開催される	3月 日本万国博覧会(大阪万博)開幕 3月 日本航空機よど号ハイジャック事件発生
1971年(昭和46)	10月 滋賀県青少年赤十字50周年記念大会を草津市民会館で開催 12月 高校団員のJRC大会を瀬田工業高校で開催。45人が参加	7月 本社に「青少年赤十字中央審議会」が設置される	6月 沖縄返還協定の調印式 8月 ニクソンショック
1972年(昭和47)	12月 高校団員のJRC大会を大津商業高校で開催。28人が参加	10月 中央審議会が「青少年赤十字の指導者養成と情報資料の整備に関する答申」を行う	9月 日中国交正常化の共同声明
1973年(昭和48)	4月 第13回青少年赤十字近畿ブロック指導者研修会が大津市坂本西教寺で開催される。支部から6人参加 8月 「キーブ・ジャパン・ビューティフル」を近江舞子水泳場で開催。中・高メンバー、指導者98人が参加 12月 高校団員のJRC大会を瀬田工業高校で開催。23人が参加	4月 青少年赤十字登録費を廃止 6月 中央審議会が「青少年赤十字と学校教育との関連、青少年赤十字の組織、活動に関する答申」を行う	2月 円変動相場制へ 10月 オイルショック
1974年(昭和49)	12月 高校メンバーのJRC大会を八幡工業高校で開催。30人が参加	1月 「青少年赤十字関係用語の読みかえ使用について」通知。これにより「団」という呼称を用いないこととなる 11月 「青少年赤十字メンバー増強について」を各支部に通知	8月 三菱重工爆破事件
1975年(昭和50)	1月 青少年赤十字研究協議会を県庁別館大ホールで開催。講演「学校教育と青少年赤十字の関連について」。講師に本社青少年課長を招く 2月 第1回滋賀県青少年赤十字研究協議会を栗東町立治田小学校で開催。参加者90人 7月 メンバートレーニングセンター(大津市坂本西教寺)を小、中、高の部に分けて開催(高校は2泊3日)。小・中・高別の支部のトレセンとしては最後となる	4月 150万人達成を目的に「メンバー増強五カ年計画」スタート	4月 サイゴン陥落によりベトナム戦争終結 7月 沖縄海洋博覧会開幕
1976年(昭和51)	7月 小学校メンバーのトレーニングセンター(1泊2日)と中・高校メンバートレーニングセンター(2泊3日)を荒神山少年自然の家で開催。以後、小学校単位と中・高を単位とした宿泊トレセンが定着し、平成13年まで継続する	5月 青少年赤十字メンバー事故見舞金制度が発足	2月 アメリカ、ロッキード事件
1977年(昭和52)	2月 第1回滋賀県青少年赤十字研究推進委嘱校研究発表大会を栗東町立治田西小学校で開催。研究主題は「学校教育目標の具体化をたずねる青少年赤十字活動」。参加者65人。支部の研究委嘱校制度に基づき、以後2年間の研究を行う委嘱校を毎年1校指定。研究2年目の委嘱校研究発表会が定着する 10月 青少年赤十字メンバー作品展を滋賀会館で開催	11月 青少年赤十字「指導講師養成講習会」が始まる。平成3年度まで継続	7月 日本初の静止気象衛星「ひまわり」打ち上げ 9月 ダッカ空港において日本赤十字によるハイジャック事件
1978年(昭和53)		5月 青少年赤十字再建30周年記念全国大会	6月 宮城県沖地震
1979年(昭和54)	6月 第19回青少年赤十字近畿ブロック指導者研修会を大津市坂本西教寺で開催。支部から9人参加	9月 日本青少年赤十字賛助会を青少年赤十字全国賛助会に改称 12月 「赤十字ジュニア救急法」制定	3月 アメリカのスリーマイル島原子力発電所で放射能漏れ事故
1980年(昭和55)	5月 滋賀県青少年赤十字賛助会を設立。全国賛助会に加盟	4月 180万人を目標にメンバー増強五カ年計画(第2次)スタート	9月 イラン・イラク戦争
1981年(昭和56)	6月 支部が初めて指導者の県外研修を実施。奈良県田原本町立北小学校を訪問し、授業参観、意見交換を実施。23人が参加		3月 中国残留孤児が初来日
1982年(昭和57)	6月 支部の指導者県外研修で伊勢市四郷小学校を訪問。参加者20人	4月 「青少年赤十字研究推進校設置要項準則」制定	2月 日航機羽田沖墜落
1983年(昭和58)	7月 支部の指導者県外研修で名古屋市井戸田小学校と刈谷市刈谷東小学校を訪問。参加者10人 10月 本社主催の青少年赤十字再建35周年記念全国大会が東京オリンピック記念青少年総合センターで開催され、支部から10人参加		4月 東京ディズニーランド開園 10月 三宅島大噴火
1984年(昭和59)	7月 本社の国際交流事業でネパールの代表メンバー男女各1人を3泊4日の日程で受け入れる	9月 ネパール支援のための「一円玉募金」始まる	12月 グリコ・森永脅迫事件
1985年(昭和60)	6月 第25回青少年赤十字近畿ブロック指導者研修会を大津市坂本西教寺で開催。支部から9人参加		3月 科学万博つくば'85開催(～9月16日)
1987年(昭和62)		3月 「青少年赤十字にかかわる今後の重点推進項目」が各支部に通知される	10月 ブラックマンデー
1988年(昭和63)		10月 全国賛助会が「信条」を制定 12月 「青少年赤十字の質的向上を図るための検討委員会」が社長に答申	3月 青函トンネル開通
1989年(昭和64～平成元)	6月 日本本社における質的向上を図るための答申を受け、支部に質的向上委員会を設け6月26日と8月7日に委員会を開催。質的向上推進計画を策定 7月 本社の国際交流事業でインドより女子2人のメンバーを受け入れ。7月26日～31日までの滞在期間に県のトレセンや高島高校、八日市女子高、水口女子専門学校との交流会を実施	2月 「幼稚園・保育所青少年赤十字活動研究会」始まる 6月 天安門事件 10月 「青少年赤十字国際交流事業実施のためのガイドライン」制定	1月 昭和から平成に改元 11月 ベルリンの壁崩壊
1990年(平成2)	8月 支部が初めて指導者リフレッシュ研修会を開催。近畿ブロックや本社の研修会修了者の再研修として開始(～平成3)	3月 「青少年赤十字健康安全プログラム」が設定される	10月 東西ドイツの統一
1991年(平成3)	11月 指導者リフレッシュ研修会を支部会議室で開催。参加者6人	11月 青少年赤十字全国大会「こんにちは'91」に海外メンバーを招待	12月 ソビエト連邦崩壊
1992年(平成4)	4月 日本赤十字社第4ブロック研修センター「日赤滋賀りっとう山荘」開設(～平成15) 6月 第32回青少年赤十字近畿ブロック青少年赤十字指導者研修会を日赤滋賀りっとう山荘で開催。		4月 ボスニア・ヘルツェゴビナ内戦始まる
1993年(平成5)	1月 本社主催の「指導主事対象青少年赤十字研究会」が「日赤滋賀りっとう山荘」で開催される 5月 青少年赤十字賛助会拡大総会を支部会議室で開催。参加者20人 6月 本社主催のトレーニング・センター指導者養成講習会が「日赤滋賀りっとう山荘」で開催される。(平成6、7、9年を除き、平成14年まで同所で開催)	11月 青少年赤十字・赤十字奉仕団全国交流集会是じめの一歩	2月 M6.6の能登沖地震発生
1994年(平成6)	7月 本社の国際交流・交歓会でタイより女子2人のメンバーと1人の職員が来県。県のトレセンに参加したり施設訪問や滋賀県メンバーとの交歓会などを通じて国際交流を深める 11月 機関紙「JRCしが」創刊(以後、毎年度発行)	9月 青少年赤十字全国賛助会結成30周年記念大会	4月 ルワンダ紛争 10月 大江健三郎がノーベル文学賞受賞
1995年(平成7)	1月 阪神・淡路大震災で支部と指導者協議会が加盟校に被災者に対する募金活動呼びかける 11月 滋賀県青少年赤十字賛助会が青少年赤十字の加盟促進と充実・発展に協力するため「青少年赤十字Q&A」を発行	3月 幼稚園・保育所指導者対象青少年赤十字研修会開催 12月 全国賛助会の会報「いとすぎ」創刊	1月 阪神淡路大震災(M7.3) 3月 地下鉄千鳥線事件

青少年赤十字のあゆみ

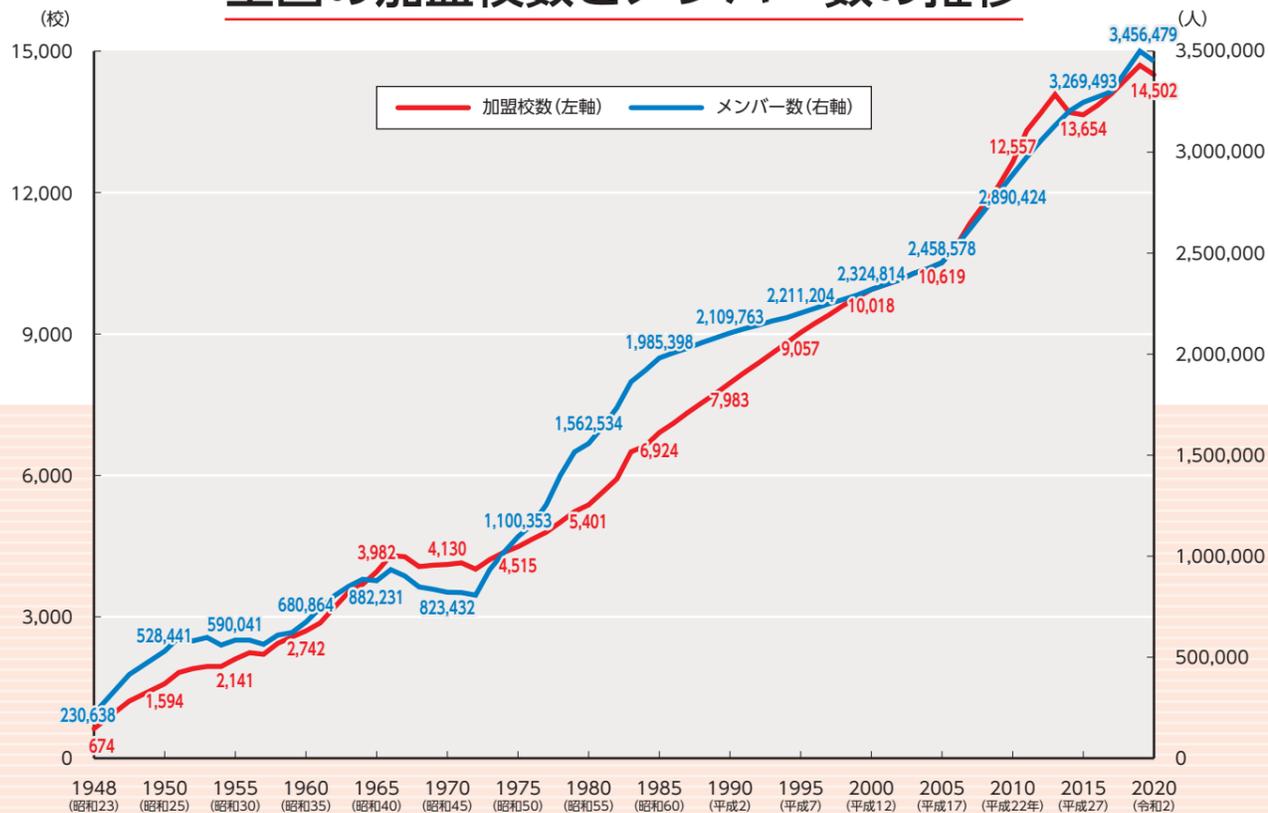
年号(和暦)	滋賀県内のあゆみ	国内のあゆみ	世界と日本の動き
1996年(平成8)	この年、支部主催のメンバートレーニングセンターは0-157のため中止		3月 ネパール飲料水供給事業のための「一円玉募金」が1億800万円に 9月 青少年赤十字全国指導者協議会が総会で「全国アピール」を採択
1997年(平成9)	1月 カンボジアの地雷被災者支援事業に役立てるため青少年赤十字のメンバーが1年間、使用済みテレビホンカードの収集活動を実施		7月 香港が英国から中国に返還される
1998年(平成10)	10月 「滋賀のJRC～滋賀県青少年赤十字 特色ある実践事例集」を発刊 10月 広報「JRC賛助会しが」創刊(以後、毎年度発行) 10月 名誉副総裁秋篠宮妃殿下をお迎えし青少年赤十字発祥75周年記念並びに大津赤十字病院増改築工事竣工記念平成10年滋賀県赤十字大会をびわ湖ホールで開催。加盟校133校を表彰		10月 青少年赤十字創立75周年・赤十字奉仕団創設50周年記念事業が都内で開催される 2月 長野冬季オリンピック開幕 12月 NPO法施行
1999年(平成11)	7月 青少年赤十字代表団海外派遣事業でネパールへの派遣メンバーに初めて高島高校のメンバーが選ばれる		2月 臓器移植法による初の脳死臓器移植が実施される
2002年(平成14)	5月 青少年赤十字賛助会が賛助奉仕団と改称 7月 支部のメンバートレーニングセンターを初めて小・中・高の校種混合で開催合同で開催するよう改善 10月 本社の国際交流事業で韓国RCYメンバー2人を受け入れ、加盟校との交流、施設見学、ホームステイなどで交流を深める		4月 完全学校5日制が実施される 10月 北朝鮮に拉致された日本人5人が帰国
2003年(平成15)	11月 本社主催の青少年赤十字国際交流集会上八幡高校から男女各1人のメンバーが参加。以後、平成20年を除き毎年2人が参加		4月 「青少年赤十字活動資金造成要綱」が全面改正される 4月 アフガニスタン、パルミラディシ、モンゴル、ネパール、フィリピンに対する教育等支援事業始まる 10月 青少年赤十字全国賛助会が奉仕団に移行
2004年(平成16)	3月 本社青少年課より青少年赤十字活動実践事例集が発行され、五個荘中学校、高島高等学校の取り組みが掲載される 7月 JR守山駅西口広場に青少年赤十字賛助奉仕団湖南ブロックにより「少年赤十字団発祥の地」と刻まれた顕彰碑が建立され、除幕式を挙げる 8月 近畿ブロック合同青少年赤十字国際交流事業始まる。同事業でメンバー2人、指導者1人がシンガポール、台湾に派遣される。以後、シンガポール、マレーシアなどとの間で、メンバー等の派遣または受け入れが継続する		1月 自衛隊イラク派遣 10月 新潟中越地震発生(M6.8) 12月 スマトラ島沖地震発生(M9.1)
2005年(平成17)	4月 1930年(昭和5)に野洲郡の三上少年赤十字団が米国の小学校に贈った絵画約40点が品揃りする		3月 「青少年赤十字活動強化要綱」策定。これに基づきモデル校事業がスタート
2006年(平成18)	3月 高島高校が本社の青少年赤十字モデル校に指定される(2年間)		5月 インドネシア・ジャワ島でM6.3の地震発生
2007年(平成19)	11月 青少年赤十字国際交流集会で香港のメンバー2人が来県。今津北小、高島高校、水口女子専門学校、立命館守山高校、八幡高校を訪問		3月 石川県能登半島沖を震源にM6.9の地震発生
2008年(平成20)	11月 八幡高等学校福祉部の活動が評価され京都新聞大賞を受賞		10月 賛助奉仕団の全国組織「全国青少年赤十字賛助奉仕団協議会」が発足。特殊奉仕団に位置付けられる
2010年(平成22)	1月 ハイチ救済のため大津市日吉こどもサミットの4人がアルミ缶回収収益金の一部3万円を、愛東中学校生徒会が募金活動で得た12,544円を支部等を通じて送る		6月 小惑星イトカワ着陸の探査機(はやぶさ)、地球へ帰還
2011年(平成23)	3月 東日本大震災で加盟校が義援金の募集に取り組み。未加盟校と合わせて年内だけでも21校から約418万円が支部に寄せられる 8月 東日本大震災大震災の救護活動のためブロック青少年赤十字指導者研修会が中止になる		3月 「東日本大震災後の被災者支援の取り組みに関する青少年赤十字の当面の考え方」が各都道府県支部に通知される 2月 リビアで反政府運動拡大(アラブの春) 3月 東日本大震災発生(M9.0)
2012年(平成24)	7月 本社の近衛社長が守山小学校を訪問。トレーニングセンターを視察		1月 山中伸弥教授がノーベル生理学・医学賞を受賞
2013年(平成25)	4月 支部が青少年赤十字活動を支援するため「青少年赤十字メンバー・加盟校応援プロジェクト事業」を開始 7月 守山小学校の取り組みが、全国のJRC活動の紹介記事として本社ホームページに掲載される		2月 「国際人道法学習プログラム～誰もか人間らしく生きるために～」発行 9月 台風18号上陸で初めての特別警報が滋賀県、京都府、福井県に発令される
2014年(平成26)	「青少年赤十字メンバー・加盟校応援プロジェクト事業」の対象に東北復興支援事業を追加。五個荘中学校の取り組みに助成		8月 広島市で大規模な土砂災害発生
2015年(平成27)	3月 五個荘中学校が本社の防災教育モデル校の指定を受ける(2年間) 3月 「滋賀県青少年赤十字のあゆみ1922-2015」を滋賀県青少年赤十字のあゆみ編集委員会が発行 4月 支部が「青少年赤十字防災教育プログラム」を全ての小・中・高等学校に配布		1月 青少年赤十字防災教育プログラム「まもるいのち ひろめるほうさい」発行 3月 北陸新幹線の長野駅～金沢駅間が開通 4月 ネパールで大規模な地震発生
2016年(平成28)	8月 夏休み防災・気象セミナーを大津市と彦根市で開催し県内の中高校生120人が参加 8月 第7回第4(近畿)ブロック合同青少年赤十字国際交流事業を実施し、高島高等学校から宮川奈々さん、万木涼さんがマレーシアに派遣された 10月 青少年赤十字国際交流事業が東京都で開催され、八幡高等学校のメンバーが参加 10月 支部創立120周年記念滋賀県赤十字大会をびわ湖ホールで開催。指導者5人、加盟校149校、青少年赤十字5支部を表彰 11月 1926年(大正15年)に当時の野洲郡連合少年赤十字団が国際交流で海外に送った「成績帖(国際親善アルバム)」が90年ぶりにカナダから支部へ返還される		3月 北海道新幹線が開業 4月 熊本地震が発生 5月 オバマ米大統領が広島訪問
2017年(平成29)	9月 第4(近畿)ブロック合同青少年赤十字国際交流事業(受入)を滋賀県及び和歌山県内で実施。高島高等学校が国際交流事業推進校として県内受入プログラムを実施(マレーシア赤新月社メンバー2人、指導者3人を受入) 11月 野洲市立野洲小学校で野洲郡連合少年赤十字団作成の「成績帖(国際親善アルバム)」展示会を開催		1月 トランプ米大統領が就任 6月 藤井聡太四段が29連勝 6月 上野動物園でパンダ(香港)誕生
2018年(平成30)	4月 広報パンフレット「気づきからはじまる青少年赤十字活動」を発行 8月 第4(近畿)ブロック合同青少年赤十字国際交流事業で、県内の高校生メンバー及び指導者ら3人をマレーシアに派遣。国際情報高等学校が国際交流事業推進校として本事業に参加。		6月 史上初の米朝首脳会談が開催 7月 西日本で記録的豪雨 9月 大坂なおみがテニス全米オープンで初優勝
2019年(令和元)	9月 第4(近畿)ブロック合同青少年赤十字国際交流事業(受入)を滋賀県内で実施。マレーシア赤新月社からメンバー12人と指導者3人を招き、近畿各地のメンバー、指導者計48人と交流。		4月 新元号「令和」を発表 9月 ラグビーワールドカップ日本大会が開催 11月 徳仁天皇・即位の礼
2020年(令和2)	11月 青少年赤十字国際交流事業が初めてオンラインで開催され、八幡高等学校から高校生メンバー11人と指導者2人が参加		3月 新型コロナウイルス感染症拡大を受け、ウイルスの3つの感染症(病気・不安・差別)についてのガイド「新型コロナウイルス3つの顔を知ろう!」が発行される 1月 中国・武漢で新型肺炎発生 7月 熱海で大規模な土石流 10月 東京五輪開幕 7月 岸田内閣発足
2021年(令和3)	5月 県内青少年赤十字加盟校を対象に、新型コロナウイルス対策コンテストを実施し、実践事例を募集 6月 滋賀県青少年赤十字高校生連絡協議会を立ち上げ、県内加盟高等学校4校が参加		1月 バイデン米大統領就任 7月 熱海で大規模な土石流 10月 東京五輪開幕 7月 岸田内閣発足
2022年(令和4)	1922年(大正11年)5月に野洲郡守山尋常高等小学校(現在の守山小学校)で日本最初の少年赤十字団が結成されてから100年を迎える 7月 「青少年赤十字創立100周年記念滋賀県青少年赤十字活動実践事例集」を発行 7月 青少年赤十字創立100周年記念滋賀県青少年赤十字大会を守山市市民文化会館で開催		1月 トンガで海底火山噴火=近隣国で津波発生 2月 ロシアがウクライナ侵攻開始

滋賀県の加盟校数とメンバー数の推移



※「加盟校数」「メンバー数」が不明の場合0と表記

全国の加盟校数とメンバー数の推移



編集後記



滋賀県青少年赤十字指導者協議会
指導部長 南原正和

青少年赤十字の態度目標である「気づき・考え・実行する」は、私の教育理念となっています。私の青少年赤十字との出会いは、十数年前になります。学級担任として学習や学校生活を通して児童・生徒と関わる中で、誰かの指示を頼りに行動しがちになったり、頭では分かっているにもかかわらず行動に移せなかったりする児童と多く出会いました。それは、教師が知識を一方向的に教え込む教育の弊害であったと思います。

滋賀県JRCトレーニングセンターのスタッフとして参加させていただいたことで、教育への考え方が変わりました。そこでは指示はほとんどなく、時間の管理やプログラムの進行など子どもたちが主体となり、行動していました。スタッフが想定していた以上の考えが生まれたり、率先して行動する姿が見られたり、何よりも活動する子どもたちの目が生き生きとして輝いていました。自ら「気づき・考え・実行する」ことが、子どもたちの成長や豊かな人間性、リーダーシップを発揮する礎になるものだと考えるようになりました。

この度、青少年赤十字100周年を迎えるにあたり、滋賀県青少年赤十字指導者協議会では、今日に至るまでの県下の学校の青少年赤十字に関わる実践事例を事例集としてまとめました。実践目標である「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」に基づき、地域や学校の実態に応じた特色のある実践が寄せられました。ここに収録されている貴重な実践事例を今後の教育活動の参考の一助としていただき、青少年赤十字の理念を引き継ぐきっかけとなれば幸いです。

最後に、この事例集作成のために、活用させていただいた実践事例校、並びに多くの研究校に対し、心からの感謝を申し上げます。

編集委員

■ 滋賀県青少年赤十字指導者協議会

● 2021年度

田中滋規(会長/守山市支部長)	守山小学校 校長
山本仁士(副会長)	五個荘中学校 校長
西川朗(副会長)	高島高等学校 校長
武田定樹(顧問/高島市支部長)	今津東小学校 校長
上野智士(顧問/近江八幡市支部長)	島小学校 校長
富士谷晃正(顧問)	朝桜中学校 教頭
鎌田豊(大津市支部長)	和瀬小学校 校長
奈須秀和(長浜市支部長)	余呉小中学校 校長
廣瀬智彦(草津市支部長)	常盤小学校 校長
野田里子(栗東市支部長)	大宝東小学校 教頭
古賀和幸(甲賀市支部長)	綾野小学校 校長
高島謙治(野洲市支部長)	篠原小学校 校長
川嶋稔彦(湖南市支部長)	下田小学校 教頭
堀田安彦(東近江市支部長)	愛東北小学校 校長
辻裕(愛知郡支部長)	愛知川東小学校 校長
南原正和(指導部長)	老上西小学校 教諭
川端清司	滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課指導主事
長瀬寛子	滋賀県教育委員会事務局高校教育課指導主事

※所属・役職は2021年度当時

● 2022年度

田中滋規(会長/守山市支部長)	守山小学校 校長
田中慶希(副会長)	五個荘中学校 校長
西川朗(副会長)	高島高等学校 校長
武田定樹(顧問/高島市支部長)	本庄小学校 校長
上野智士(顧問/近江八幡市支部長)	島小学校 校長
富士谷晃正(顧問)	朝桜中学校 教頭
徳田辰行(顧問)	北里小学校 教頭
山本純子(大津市支部長)	伊香立小学校 校長
常陸恵子(長浜市支部長)	朝日小学校 校長
廣瀬智彦(草津市支部長)	常盤小学校 校長
野田里子(栗東市支部長)	大宝西小学校 教頭
佐々木直子(甲賀市支部長)	土山小学校 校長
細谷亜紀子(野洲市支部長)	篠原小学校 校長
川嶋稔彦(湖南市支部長)	三雲小学校 教頭
堀田安彦(東近江市支部長)	愛東北小学校 校長
塚本拓哉(蒲生郡支部長)	竜王小学校 教頭
田中幹雄(愛知郡支部長)	秦荘中学校 校長
南原正和(指導部長)	老上西小学校 教諭
川端清司	滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課主査
松島正宜	滋賀県教育委員会事務局高校教育課指導主事

■ 日本赤十字社滋賀県支部

丸尾勉・西出佳弘・坂下博文・服部絢子(事務局)

青少年赤十字創設100周年記念
滋賀県青少年赤十字活動実践事例集

発行 2022年(令和4年)7月
 編集 滋賀県青少年赤十字指導者協議会
 発行者 日本赤十字社滋賀県支部
 〒520-0044 大津市京町4-3-38
 TEL(077)522-6758 FAX(077)523-4502
<https://www.jrc.or.jp/chapter/shiga/>